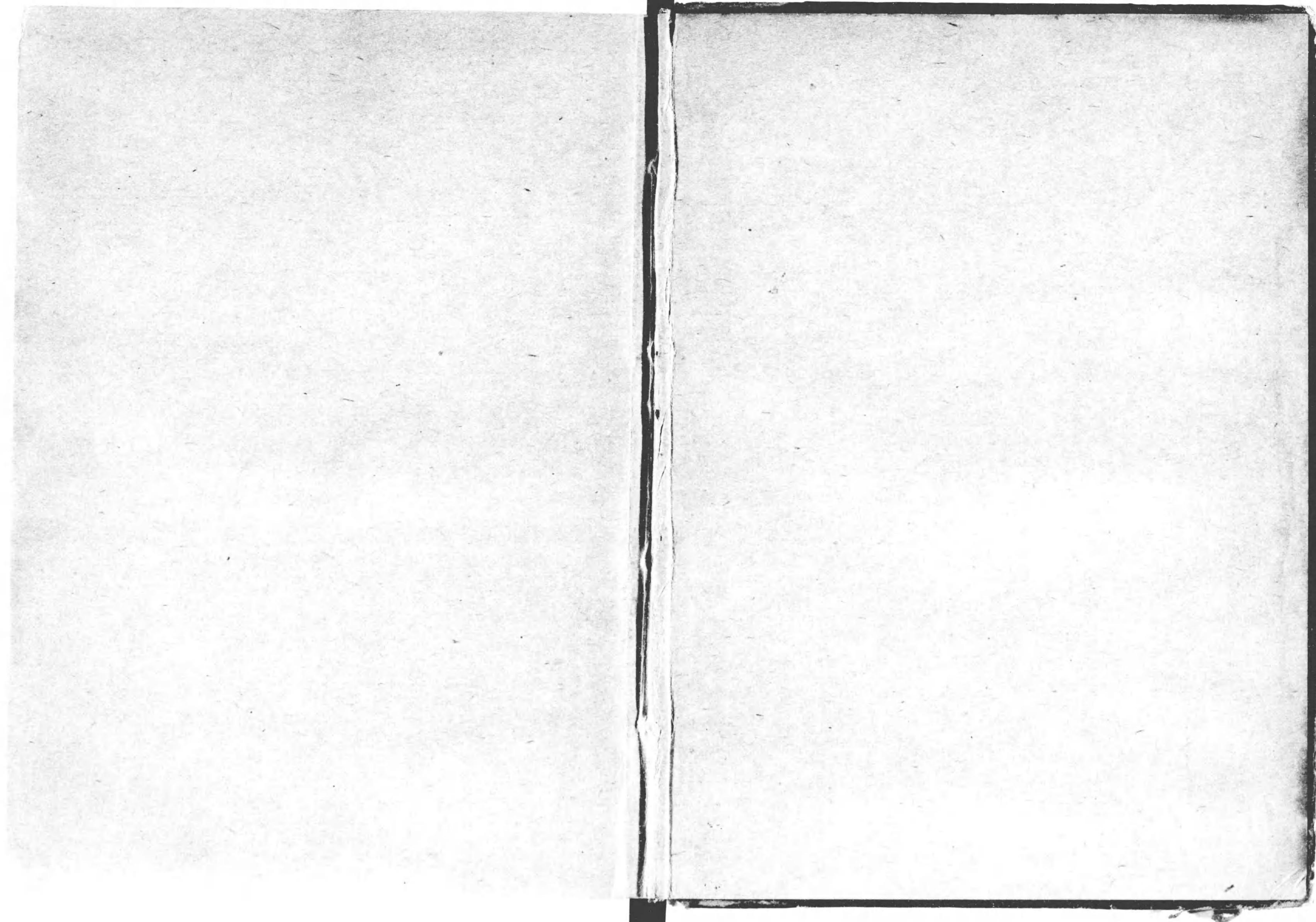


562
19



始





大藏省內

明治財政史編纂會編纂



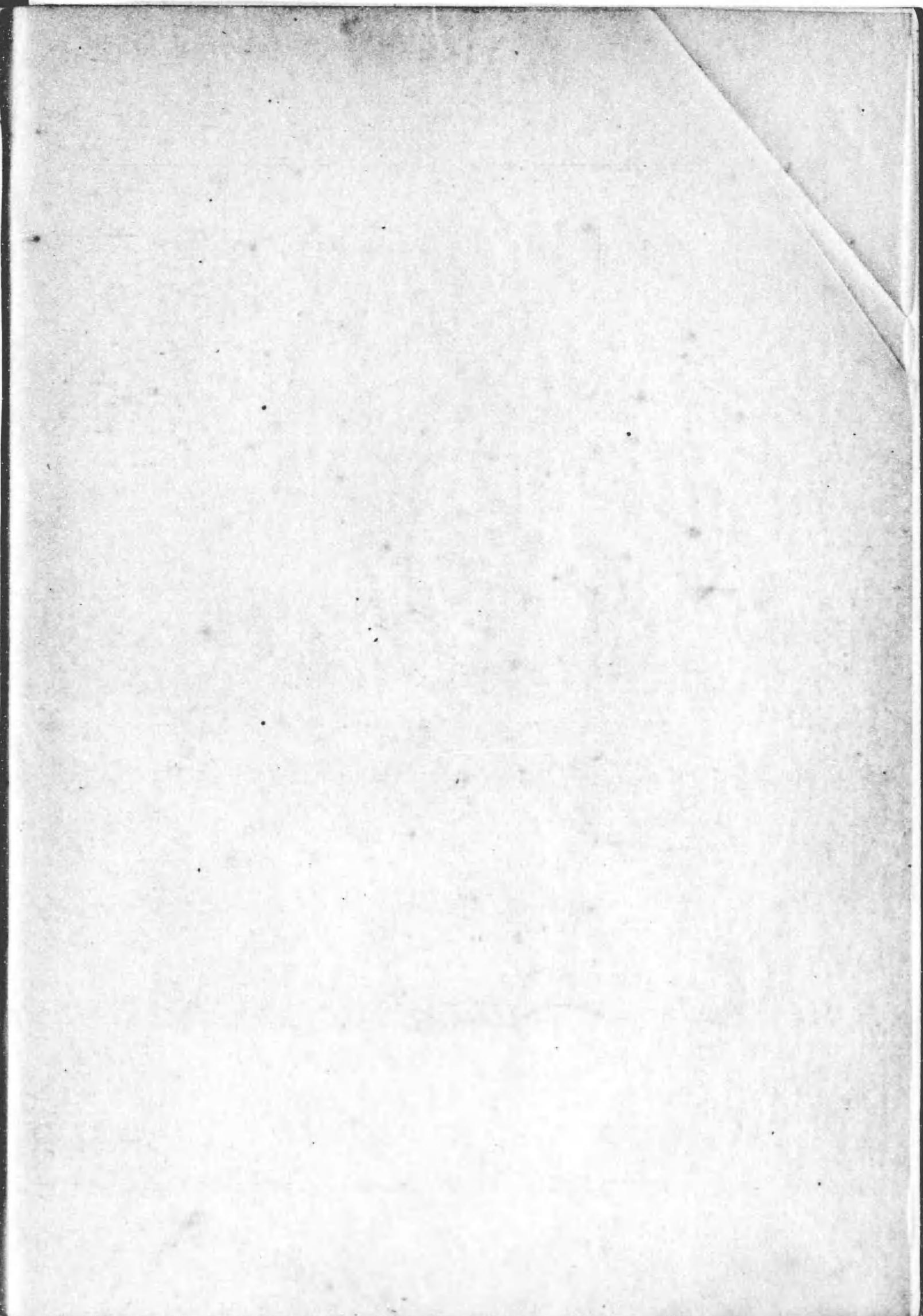
明治財政史

第一卷

緒言
財政機關
會計法規

15. 10. 5
內交

東京 明治財政史發行所



存

存

其

蘇

甲辰三月

海東



明治財政史の再刻に就て

大正國民に取りて明治時代史研究の必要なるは云ふ迄もなし。殊に明治財政の推移發展を知悉して今日の時務に處し、將來の趨向を察し、國家の進運に伴ふ國民的責務を自覺することは、更に一層緊切ならずんばならず。若夫れ公私財界の人々にありては、これ實に自家頭上の一大事たるべく、疎懶努めず徒に舊夢一過の感を以て空しく雲煙視去るが如きは最も慎まざるべからざるなり。明治の時代は半世紀に充たずと雖、封建より出で、世界の列強に伍し、文物制度悉く新たに備はり、他國民數世

紀の功業を四十五年の短日月に成就したり。故を以て刻々生起する財政上の事象も亦頗る豊富にして、斯學の研鑽上、政治の運用上、將た産業の施設上に好參考たるは固より、仔細にこれを檢覈すれば、深刻なる國民的苦闘と國家的試鍊の實證材料を多分に包藏して、一般史實の本質を闡明剖判するに足るものあり。

たゞ、財政の事象は専ら數字及び表罫のこれを補ふにあらずんば、到底その的確精到を期待し難きも、明治初期にありては維新の擾亂未だ全く定まらずして、而して政府の基礎鞏固なるを得ず、人心常に盪搖して歸趨に迷ふの状態にして、爲めに財政的記録の徵すべきもの多から

ず、たまたまこれあるも細密周匝ならずして、事實の真相を直ちに信憑し得べきにあらず。加之年所を経るに従ひ折角可能の徵書も漸く佚亡し、關係の故老相亞いで没する等、たとへ編史の篤學家ありとするも、資料蒐集の困難容易ならざるべきは何人も想像するに難からざるべし。

松方老公これを憂ひ、夙に明治財政史編纂の意圖ありて未だ果さず。余乃ち友人數氏と共に朝野同感の士の翼賛後援を得て、明治財政史編纂會を組織す、余推されて委員長たり、時恰も大藏省に於ても財政史編纂の議あり、本會の組織せらるゝに及びて其趣旨を賛成せられ、同省

に於て既に編纂蒐集せられたる財政史料其他所藏の公文書等の借覽を許され、且編纂濟となれる原稿の檢閲並にこれが補修校訂等、擧げて同省の事務としてこれを一任するを得たり。編纂の期間は明治三十三年より同三十六年に亘れる三ヶ年餘にして、之が刊行を了せしは同三十八年三月なりき。即ち「明治財政史」十五卷一萬四千五百頁これなり。

本書の記載する所は、明治維新以降三十五ヶ年間の財政沿革にして、明治時代の初中葉を貫き、舊政府の百弊を受けて何等財政上の基調を有せざりし新政府の當初より、國際上に我が財政の基礎を確立したる金貨本位制の

實施に及べり。その財政上其他有益にして興味ある多數の實例に富めるは、既に述べたる如し。單り本書編纂の時期の關係上、明治の治世中最も精彩ある爾後十ヶ年間の記述を缺き、未だ首尾を一貫して渾然たる明治財政史を大成するの機會を有せざりしは、居常余の最も遺憾とせし所なりしが、頃日大藏省の諒解を得て重ねて本書續篇の企畫あるに至れるは、余に取りて寔に欣快の情なき能はざるなり。

もと本書は少部數を印行したるに止まりしが、刊行後二十年を経過せる今日、猶本書の殘冊缺本も貴重とせられ、官公私を問はず普ねく社會に參考せらるゝの實情に

あり、且つ限られたる所蔵本も多くは大震災に失はれ、今や坊間本書の隻影だも覓むるを得ず。乃ち續篇編纂の企畫に際して特に大藏大臣に稟申して裁許を得たるを以て、茲に版を新たにし、魯魚の謬を訂して弘く世に問ふことゝなせり。大方諸子の幸に余が微意の存する所を諒得せられ、本書再刻の事業に賛意を表せらるゝあらば余の光榮これに過ぐるものなきなり。

所思と共に本書の來由を陳べて再刻の序となす。

大正十五年四月

明治財政史編纂會委員長

法學博士 男爵

阪谷芳郎

序

本書ハ明治元年以降三十五年ニ至ル我邦財政上ノ沿革ヲ編纂記述シタルモノナリ而シテ此間ニ於テ財政上最モ多クノ事歴ヲ留メタルモノハ實ニ松方伯ナリトス本書題シテ明治財政史一名松方伯財政事歴ト云フハ偶然ニアラサルナリ抑モ維新以來我邦諸般ノ文物制度ハ頗ル變遷ヲ極メ就中財政ノ事歴ハ最モ錯雜ニシテ其局ニ當リタルモノト雖モ殆ト沿革ヲ知ルニ苦シム松方伯夙ニ茲ニ考フル所アリ財政史編纂ノ必要ヲ唱ヘラレテ未タ果サス今因テ友人松尾臣善、添田壽一、山口宗義、早川千吉、四氏ト協議シ更ニ三井、岩崎、澁澤三男爵及山本達雄、相馬永胤、高橋新吉、園田孝吉、曾根靜夫、松方幸次郎等ノ諸君

ト謀リ明治財政史編纂會ヲ組織シ本書ノ編纂ニ著手ス余推サ
レテ其委員長トナル偶大藏省亦將サニ財政史編纂ノ舉アラム
トス乃チ本會ノ主旨ヲ贊成セラレ材料其他編纂上數多ノ便宜
ヲ與ヘラル是ニ於テ前後數年ヲ費シ今ヤ漸ク其成ルヲ告ク
我邦既往三十五年間ニ於ケル開發進步ハ世界歷史上決シテ他
ニ類例ヲ見サル所ナリ而シテ國運進步ノ根基ハ實ニ財政ノ整
理ニ在リ後ノ財務ノ局ニ當ル者此書ニ鑑ミル所アリテ可ナリ
明治三十六年一月

明治財政史編纂委員長
從四位勳二等法學博士

阪谷芳郎謹識

松方伯略傳

松方伯略傳

伯姓ハ藤原名ハ正義舊鹿兒嶋藩士松方善藏ノ五男ナリ母ハ山下氏ニシテ天保六年二月二十五日鹿兒嶋下荒田ニ生ル初メ金次郎ト稱シ長シテ三之丞一郎助左衛門ト改メ後ニ正義ヲ以テ通稱トス幼ニシテ羸弱病多シ父母常ニ其夭折ヲ恐レ心ヲ看護撫養ニ盡セシカ年甫メテ九歳痘瘡ヲ患フルノ後頓ニ一變シテ強健トナレリ弘化二年十一月母ヲ喪ヒ同四年六月父ヲ喪フ時ニ齡十三ナリ伯長兄清藏ト筑筑相依リ赤貧洗フカ如ク爨炊ノ料屢窮乏ヲ告クルニ至レリ伯ノ兄之昌大番頭座ノ書記タリ他職ニ轉スルニ及ビ伯其後任ニ補セラル是ヲ仕途出身ノ始トス時ニ齡正ニ二十ナリ未タ幾ナラス擢ラレテ家老座ノ書記トナリ文久三年嶋津久光公ニ扈シテ上洛ス米艦來航以來天下騷然幕府政ヲ失ヒ尊皇攘夷ノ論盛ニ起ル在阪薩藩ノ激徒等浮浪ト胥謀リ關白九條公及大阪所司代酒井氏ヲ除キ久光公ニ逼リテ事ヲ舉ケントスルノ議アリ公輕舉大事ヲ誤ランコトヲ憂ヒ伯ヲシテ往テ之ヲ止メシム伯大阪ニ至リ激徒等ノ已ニ前夜ヲ以テ潛ニ發セシヲ聞キ直ニ京ニ歸リテ之ヲ報ス公モ亦既ニ其事ヲ知り近臣數名ヲ遣ハシテ鎮撫ヲ圖ラシメシカ更ニ伯ヲシテ之ヲ助ケシム馳セテ

伏見ニ至レハ則チ事既ニ定マルノ後ナリ公伏見暴舉ノ報薩藩人心ノ激動ヲ招カン
 コトヲ恐レ伯ニ命シ急行以テ鹿兒嶋ニ赴カシム伯鹿兒嶋ニ留ルコト一七日人心ノ
 平穩ナルヲ見テ再ヒ入京スレハ公已ニ大原卿ヲ護シテ東下セリ因テ尾シテ江戸ニ
 至リ滯留ノ間近習番ニ拔擢セララル
 居ルコト幾ナラス久光公ニ從ヒ國ニ就ク途生麥ヲ過クルヤ一英人公ノ鹵簿ヲ犯シ
 從士怒テ之ヲ斬ル駿府ニ至ルノ日忽チ風説アリ曰ク英國ノ兵艦鹿兒嶋ニ向フト伯
 命ヲ奉シテ急行鹿兒嶋ニ至レハ洋艦ノ隻影ナク事全ク訛傳ニ屬セリ
 後又藩命ヲ受ケテ上京シ齊彬公ノ功勳ヲ録シ神號宣下ノ事ヲ奏請ス朝議之ヲ嘉納
 シ照國神社ノ號ヲ賜フ歸國ノ後忠義公ノ小納戸役ト爲リ別ニ松方家ヲ起セリ
 伯ノ君側ニ奉仕スルヤ會、議者アリ誣フルニ無根ノ説ヲ唱道シ擅横ノ行アルヲ以テ
 ス是ニ於テ俗ニ誠忠派ト唱ヘシ友人四五輩ト共ニ同日免職謹慎ノ奇禍ニ罹レリト
 雖モ未タ一月ヲ出テスシテ冤枉ノ狀明白ナルヲ得謹慎ヲ解カル幾モナク郡奉行ニ
 補シ轉シテ船奉行ト爲リ次テ海軍研究ノ爲メ長崎留學ヲ命セラル居ルコト二年半
 洋算測量等ノ術ヲ學フ
 伯ハ又洋艦ノ必要ナルヲ洞觀シ藩ニ稟シテ英艦某號ヲ購入ス即チ春日艦ナリ其同
 艦ニ乗シテ國ニ歸ルヤ之ヲ以テ軍艦トシ海軍ヲ創設スヘキコトヲ主唱シ熱心論議

セシモ藩論尙早シトシテ採納セラレス因テ再ヒ長崎ニ赴ケリ
 戊辰一月伏見ノ變起リ次テ徳川慶喜東走ノ報至ルニ及ヒテ長崎奉行河津祐邦職ヲ
 棄テテ去リ復タ政務ヲ顧ミル者ナシ伯之ヲ憂ヒ土佐ノ藩士佐佐木三四郎(今ノ佐木伯)等
 ト共ニ行政外交ノ急務ヲ處辨セシカ二月長崎裁判所參謀ヲ命セラレ三月徵士内國
 事務局權判事ニ轉シ五月上京スルヤ更ニ又日田縣知事ニ任セララル
 日田縣赴任ノ時ニ當リ會、一揆ノ徒蜂起シ附近ノ諸藩兵ヲ出シテ之レカ鎮定ヲ圖ル
 或人伯ニ勸ムルニ若干ノ護兵ヲ率ユヘキコトヲ以テセシモ聽カス單身任ニ赴キ主
 トシテ各藩ノ人才ヲ拔擢選用シ教育ヲ勸メ物産ヲ興スヲ以テ爲政ノ急務トシ先ツ
 廣瀬氏咸宜園ノ隆興ヲ助ケ育兒院ヲ設立セリ日田ノ地タル墮胎ノ弊風最モ甚ダシ
 カリシモ伯力熱心ニ戒飭シタルト育兒院ヲ設立セシトニ由テ幼兒ノ救濟セラレタ
 ルモノ數百ノ多キニ及ヒタリ後チ十餘年ヲ經テ伯ノ日田ニ官游スルヤ當時在院セ
 シ女子兒ヲ抱キ來リテ舊恩ヲ謝スルモノアリシト云フ
 伯日田縣ニ知事タルノ間政務ニ關シテ建言セシコト數回就中各藩封土奉還ノ名ア
 リテ實ナキハ眞ノ王政復古ニ非ス宜シク速ニ郡縣ノ制ヲ實施スヘキコトヲ建議セ
 ルカ如キ總檢地ヲ行ヒ税法ヲ齊一シ歲入歲出及物産ノ數ヲ審ニシテ而シテ後天下
 ノ會計始メテ立ツヘキコトヲ議セルカ如キ其主要ノ事項タリ

三年十月伯ハ入りテ民部大丞トナル其年十二月又日田縣ニ一揆ノ徒蜂起セリ伯ハ民部ヨリ河野敏鎌ハ刑部ヨリ四條隆謨ハ陸軍ヨリ各命ヲ奉シ前後縣地ニ赴キ直ニ巨魁ヲ捕縛シテ鎮定ノ功ヲ奏スルヲ得タルハ伯カ日田ノ事情ニ通曉セシノ功大ニ與リテ力アリシナリ

伯ハ明治四年七月民部省廢止ニヨリテ官ヲ失ヒ翌日更ニ大藏權大丞トナリ翌月轉シテ租稅權頭トナル是レ伯カ財務ノ局ニ當ルノ第一梯ナリトス當時廢藩置縣ノ餘ヲ承ケ稅法ノ紛雜事務ノ繁劇實ニ名狀スヘカラス伯屬僚ヲ督勵シ夙夜執掌爲メニ大ニ健康ヲ損戕シ胃疾ヲ獲ルニ至ル精勵ノ狀蓋シ想ヒ見ルヘシ而シテ地租改正ハ伯ノ最モ精力ヲ竭セシ事業ノ一ナリトス藩制時代地租法ノ區區ニシテ其種類ノ多キコト營ニ二三ニ止マラス之レカ改正統一ノ急要ナル固ヨリ言ヲ俟タスト雖トモ實ニ至難至重ノ事業トス因テ地租改正ノ議起ルヤ伯ハ先ツ各地方中最モ困難ノ聞エアル大阪府下ニ赴キテ實地ヲ踏査シ具ニ調査ノ形況ト改正ノ方案トヲ報告シタリ此報告書ハ後日改正實施ノ材料トナリシモノ頗ル多シト云フ地租改正ノ如キ大事業ヲ遂行スルニ當リ半途ニシテ挫折スルハ國家ノ大害ニシテ伯ノ最モ憂慮セシ所タリ故ニ著手ノ始ニ於テ斷然廟議ヲ一定スヘキコト及ヒ特ニ一局ヲ設ケ當局者ヲシテ專心一意其事ニ從ハシムヘキコト

ヲ建議セシニ廟議之ヲ納レ八年三月地租改正局ヲ置キ大久保參議ヲ總裁トス伯之ヲ輔ケテ銳意改正ノ事ニ從フ困難百出辛苦言フヘカラス其間租稅頭トナリ大藏省三等出仕及地租改正局三等出仕ヲ兼ネ八年十一月遂ニ大藏大輔ニ任セラル是ヨリ先キ大久保大藏卿岩倉特命全權大使ニ副トシテ海外ニ在リ井上大藏大輔專ラ財政ノ局ニ當リシカ六年五月職ヲ辭シ大隈參議大藏ノ事務ヲ總裁シ尋テ大藏卿ヲ兼ヌルニ至レリ其翌年佐賀ノ亂アリ又臺灣征討ノ結果清國ト葛藤ヲ生シ國費頗ル多端ニシテ財政ノ窮迫其極ニ達ス伯ハ苦心經營殆ント寢食ヲ忘レ百方救治ノ法ヲ講スルノ餘初メテ我會計法ノ改正セサル可カラサルコトヲ發見シタリ當時我會計法ハ曆年ニ據リ前年度ノ歲入ヲ以テ當該年度ノ歲出ニ充ツルノ制ナリシカ若シ之ヲ改正シ當該年度ノ歲入ヲ以テ其歲出ニ充ツルノ制トナサハ優ニ歲入ノ殘餘ヲ生スヘク以テ一時ノ窮乏ヲ補ヒ難關ヲ通過スルニ綽然餘リ有ルヘシ伯ハ之ヲ以テ大隈伯病氣中ナリシモ助ケテ更ニ廟議ノ決定ヲ仰キ遂ニ七年十月會計年度ヲ改正シ七月ヨリ翌年六月ニ至ルマテヲ以テ界限トスルニ至リタリ八年八月我雲揚艦朝鮮人ノ爲メニ砲撃セラレ兩國幾ント將ニ戰端ヲ開カントスルニ當リ廟議頗ル軍費支出ノ途ナキニ苦シム是ニ於テカ伯ハ今此機ヲ利用シテ多年未決ノ問題タル祿制改正ヲ斷行スルノ時機ナリトナシ反覆思考益其良計タルヲ確

信シ大隈卿ニ進言セシニ卿亦大ニ贊同シ遂ニ廟議ニ提出シ其決定ヲ得ルニ當リ伯
 又以爲ラク祿制改正ノ事タル實ニ一大事タリ朝鮮ノ事平和ニ局ヲ結ハ、或ハ恐ル
 改正中止ノ議起ルコトアランヲ果シテ然ラハ國家ノ不利之ヨリ大ナルハナシト仍
 テ更ニ祿制ノ改正ハ朝鮮問題ノ終局如何ニ關セス必ラス斷行スヘシトノ議ヲ大隈
 伯ト謀リ裁可ヲ得タリ後果シテ異議起リシモ之ヲ排シ先キニ斷行ノ事ヲ追申シ裁
 可ヲ仰キタルハ則チ今日アランコトヲ慮カリシカ爲メナリト論シ毅然動カス政府
 ハ九年八月遂ニ祿制改革ヲ斷行セリ
 伯ハ九年五月勸業頭ニ同八月授産局長ニ兼輔セラレ又内國勸業博覽會御用掛ヲ兼
 又是ニ於テ勸業ニ心ヲ盡スコト尠カラス
 我政府ハ佛國巴里萬國博覽會ニ參同センコトヲ決シ伯ヲ以テ博覽會事務局副總裁
 ト爲ス乃チ十一年ノ初巴里ニ赴キテ博覽會ノ事務ヲ處辨シ其餘暇ヲ以テ英獨蘭白
 ノ諸邦ヲ巡遊シ一周年ニシテ歸朝ス此行各邦都府ニ於ケル文物ノ視察ハ固ヨリ論
 ナク主トシテ工場所在ノ地ヲ歴訪シ工業ノ實況ヲ按察スルト同時ニ農家經濟ノ實
 相ヲ探究スルニ力メタリ其巴里ニ在ル「レオンセー」クラントツ等ノ諸名士ト往來談
 論シ大ニ得ル所アリ殊ニ財政上ノ疑問ハ「レオンセー」氏ト談論ノ際釋然氷解セシモ
 ノ尠カラス歸朝後共進會ノ制ヲ起セシカ如キ愛知ニ綿絲紡績所ヲ創設シタルカ如

キ農商務省特設ノ議ヲ唱ヘタルカ如キ皆歐洲視察ニ胚胎セリ

大久保參議在世ノ日陸前對面ケ原開墾ノ議アリテ伯亦大ニ之ヲ贊成セリ幾ナラス
 シテ伯ハ歐洲ニ渡航シ參議ハ薨去セラレ開墾ノ事終ニ中止トナル伯歸朝ノ後之ヲ
 聞キ大ニ遺憾ト爲シ伊藤侯ト共ニ實地ヲ檢查シ當初ノ計畫ヲ遂行スルヲ得テ開墾
 ノ功ヲ收メタリ

十三年内務卿ニ任セララル此時紙幣ノ下落極度ニ達シ財政整理ノ問題朝野ニ喧シク
 伯亦建議スル所アリ四月京都巡幸ノ供奉ヲ命セラレシモ財政問題ニ關シ寺嶋伊藤
 大隈諸參議會ノ列ニ班スルノ故ヲ以テ陪駕スルヲ得ス散會後寺嶋伊藤ニ參議ト
 共ニ車駕ヲ追フテ伊勢津ニ至リ次テ京都行在所ニ赴ケリ十四年又北海道巡幸ノ事
 アリ供奉ノ歸途先發シテ羽後ノ庄内ニ在リ東京ヨリ至急ノ電報ニ接シテ歸京ス是
 國會開設緩急ノ問題ニ關シテ閣員間ニ紛論ヲ生セシカ爲メニシテ其結果大隈大藏
 卿ノ辭職トナリ同年十月伯之ニ代リテ參議兼大藏卿ニ任セララル紙幣ノ整理ハ伯カ
 最モ其心血ヲ傾注セシ所ニシテ大藏卿ノ命ヲ拜スルヤ直ニ不換紙幣交換ノ議ヲ提
 出セリ其要ハ漸次ニ正貨ヲ蓄積シ紙幣ヲ鎖却シ以テ兌換制ヲ實施スルノ方針ヲ確
 立シ一意誠實ニ進行セントスルニ在リ此事閣議ノ納ル、所トナリタレトモ固ヨリ
 空前ノ大業ナレハ苟モ其基礎鞏固ナルニ非サレハ不可ナリト信シ三條公岩倉公ト

共ニ親ク闕下ニ伏シテ仔細ニ所見ヲ奏上セシニ 聖上モ亦深ク之ヲ嘉納シ給ヒシカハ伯大ニ感奮スル所アリ百難ヲ排除シテ必ス其成功ヲ期センコトヲ誓ヘリ英公使「パークス」氏ハ久シク東洋ニ在リテ本邦ノ事情ニ精通セリ我財政ノ紊亂ヲ歎シ屢當路ニ勸告スル所アリシモ用キラレス頗ル不平ノ色アリ伯ハ大藏卿就任ノ後氏ヲ公使館ニ訪問シ我財政ニ對シテ屢忠言セラレタルノ厚意ヲ謝シ且之ニ告ケテ曰ク不肖自ラ揣ラス大藏卿ノ重任ヲ奉セシハ竊カニ自ラ期スル所アレハナリ凡ソ財政ノ要ハ別ニ奇計妙術ノ存スルニ非ス唯正直ノ一點ニ在リト確信ス故ヲ以テ終始正直ヲ以テ一貫スルノ決意ニシテ紙幣整理ノ手段トシテハ漸次正貨ヲ蓄積シテ交換ノ準備ニ充テテ以テ兌換制度ヲ施行スヘク而シテ正貨ヲ蓄積スルハ決シテ外國債ヲ起スニ非ス唯爲替ノ作用ヲ以テ其目的ヲ達セントスト氏ハ頗ル其成功ヲ疑フノ色アリシモ數年ノ後紙幣ノ價格次第ニ回復スルニ及ヒテ初メテ伯ノ計畫宜シキヲ得タルヲ知り伯ニ向テ大ニ其成功ヲ賀シタリト云フ

伯ハ豫備紙幣ヲ發行シテ國庫一時ノ缺乏ヲ補フノ習慣ヲ非トシ先ツ其回收ヲ計リ大藏省證券ヲ以テ之ニ代フルノ制ヲ設ケタリ又紙幣ヲ整理スルニハ兌換紙幣發行ノ特權ヲ專有スル一大中央銀行ヲ設立シテ全國ノ金融ヲ圓滑ナラシメ國庫ノ出納ヲ簡易ニスルノ得策ナルヲ認メ十五年日本銀行ヲ創立シ尋テ國立銀行條例ヲ改正

シテ銀行紙幣合同鎖却ノ法ヲ定メ日本銀行ヲシテ漸次ニ銀行紙幣ヲ兌換銀行券ト交換セシムルノ途ヲ開ケリ此ノ如クニシテ日本銀行ハ十八年五月ニ至リ始テ兌換銀行券ヲ發行シ政府ハ十九年一月一日ヨリ紙幣ノ正貨交換ヲ開始シ遂ニ兌換制度實施ノ目的ヲ達セリ

政府カ銳意紙幣ノ整理ヲ圖レルノ結果二十一年ニ至リテハ其數大ニ減セシヲ以テ伯ハ一步ヲ進メ全然紙幣ヲ鎖却シ兌換銀行券ヲシテ之ニ代ラシムルノ計畫ヲ立テ兌換銀行券條例ヲ改正シ正貨準備ノ外公債證書其他確實ナル證券ヲ準備トシ法定ノ制限内ニ於テ兌換銀行券ヲ發行スルコトヲ得セシメ二十三年紙幣交換基金ヲ置キ政府ノ準備金一千萬圓ト日本銀行ヨリノ借入金二千二百萬圓トヲ組入レ以テ當時殘存セシ一圓以上ノ政府紙幣三千二百萬圓ノ交換ニ充テ銀行紙幣モ亦豫定ノ計畫ニ據リテ漸次ニ鎖却ヲ行ヒ遂ニ紙幣ノ統一ヲ全ウセリ

紙幣整理ノ外伯カ大藏大臣トシテ畫策施設セシ所頗ル多シ各省ノ出納事務ヲ大藏省ニ總括シテ其統一ヲ全ウシ會計法規ヲ整備シテ遂ニ會計法及會計規則ヲ制定シ整理公債條例ヲ發布シテ高利公債借換ノ途ヲ開クト同時ニ公債取扱ノ方法ヲ簡明畫一ナラシメ又税法ヲ廢止若クハ制定シテ其改良ヲ行ヘル等一一詳説ニ違アラス勸業銀行及農工銀行設立ノ如キモ亦伯カ嘗テ日本銀行設立ニ際シ建議セル考案計

畫ニ基クモノナリ

明治二十三年憲法實施セラレ十一月二十九日第一議會ノ開院式アリ伯ハ山縣總理大臣ヲ輔ケテ議會ト交渉シ遂ニ歲計豫算ヲ成立セシメ翌二十四年山縣侯ニ代テ内閣ニ首班トナリ大藏大臣ヲ兼務ス伯ノ總理大臣トナルヤ日ナラスシテ露國皇太子湖南ノ事變アリ又第二議會ノ準備ニ汲汲タルノ際岐阜愛知ノ震災アリ共ニ非常ノ事變ニシテ伯ノ苦心甚タ大ナリ第二議會ハ大ニ政府ト衝突シテ終ニ解散セラレ第三議會モ亦政府ニ反抗セシカ纔ニ無事閉會ヲ告クルヲ得タリ閉會ノ後幾ナラスシテ伯其職ヲ辭ス

日清戰爭ノ際伯ハ關外ニ在リシト雖モ軍事公債ノ應募ニ關シテ斡旋スル所少カラズ戰役訖ルノ後伯ヲシテ戰後財政ノ經營ニ當ラシムルノ議起リ二十八年三月 聖上親シク優渥ナル勅語ヲ賜フ伯大ニ感激シ大藏大臣ノ任ニ就キシモ議合ハス數月ニシテ辭職シ世人大ニ之ヲ惜ム

二十九年伊藤内閣辭職ノ後伯ハ内閣ヲ組織シ再ヒ首相兼大藏大臣トナレリ是ニ於テ伯ハ清國ノ償金ヲ利用シテ其宿論タル金貨本位制ヲ設立スルノ計畫ヲ定メ貨幣法ヲ第十議會ニ提出シテ其協賛ヲ得幣制ノ改革全ク成就セシモ不幸ニシテ病ヲ獲數月ノ間政務ヲ視ルコト能ハス癒ルノ後幾モナク第十一議會ハ解散セラレ内閣亦

總辭職ヲ爲セリ

第二ノ松方内閣ニ代レル伊藤内閣ハ數月ニシテ前轍ヲ追ヒ大隈内閣之ニ繼キシモ亦半歲ヲ出テスシテ辭職セリ三十一年十月山縣侯起テ内閣ヲ組織スルニ當リ伯ニ請フニ大藏大臣タランコトヲ以テス伯時勢ノ艱難ヲ察シ山縣侯ノ苦衷ヲ諒シテ之ヲ諾シ四タヒ財政ノ局面ニ立チ多年ノ宿題タリシ地租増徴地價修正ノ二法案ヲ提出シテ第十三議會ヲ通過セシメ又倫敦ニ於テ四米利附一億萬圓ノ外債ヲ募集シ了リシカ三十三年十月山縣侯ノ辭職ト共ニ内閣ヲ去レリ

明治三十五年三月外遊ノ途ニ上リ米英白佛獨伊埃匈露ノ八國ヲ歷巡シ財政上經濟上ノ視察ヲ遂ケ八月西伯利亞鐵道ニヨリテ歸朝ス此ノ歷遊ノ機會ヲ以テ英國皇帝ヨリ聖「マイレール」及聖「ジヨルジ」大十字勳章ヲ白耳義皇帝ヨリ「レオポルド」大綬章ヲ露國皇帝ヨリ「アレキサンドル」ネヴスキ「勳章ヲ獨逸皇帝ヨリ赤鷲大綬章ヲ贈與セラレオックスフォード大學ヨリ財政上ノ功績ヲ認ムル趣旨ヲ以テ法學博士ノ名譽學位ヲ授ケラル

以上記述セシ所ハ松方伯經歷ノ概要ニ過キス伯ハ明治四年大藏省ニ入リシヨリ三十三年ニ至ルマテ三十年ノ久シキ殆ント間斷ナク心血ヲ財務ニ注キ百般ノ艱難ヲ經テ幾多重要ノ事業ヲ成就ス民間經濟ノ發達亦伯ニ負フ所多シ其功實ニ偉ナリト

謂フヘシ
 十七年華族ニ列シテ伯爵ヲ授クルノ殊遇ヲ被リ三十二年又桐花大綬章ヲ賜フノ優
 恩ヲ拜スル固ヨリ其所ナリト謂フヘシ伯ト明治財政史トハ其關係ノ密接セル斯ノ
 如シ本書ヲ編纂スルニ當リテ其略傳ヲ卷首ニ掲クルモノ豈故ナシトセンヤ

明治財政史

第一卷 目次

第一編 緒言

第一章 總說

一

第二章 明治六年井上大藏大輔及澁澤大藏省三等出仕辭職ニ臨ミ提出セル財政上ノ建言

五

第三章 明治二十八年松方大藏大臣ノ提出セル財政意見書

一三

第四章 明治三十三年松方大藏大臣ノ提出セル戦後財政始末報告

二五

第二編 財政機關

第一章 總說

二二九

第二章 中央機關

二八一

第一節 金穀出納所時代

二八一

第一款	管務	二八一
第二款	職員	二八一
第三款	雜件	二八一
第二節 會計事務局時代		
第一款	管務	二八二
第二款	職員	二八二
第三款	雜件	二八二
第三節 會計官時代		
第一款	管務	二八三
第二款	分掌	二八三
第一項	諸司ノ廢置	二八四
第二項	諸司ノ管務	二八四
第三項	諸司ノ班次	二八四
第三款	職員	二八六
第四款	雜件	二八六
第一項	署麻	二八六

第四節 大藏省時代

第二項	支衛	二八八
第三項	附屬署衛	二九一
第四項	事務監督	二九三
第一款 第一期		
第一項	管務	二九四
第二項	分掌	二九五
第一目	寮司ノ廢置	二九五
第二目	寮司ノ管務	二九六
第三目	寮司ノ班次	二九七
第三項	職員	二九七
第四項	雜件	二九八
第一目	署麻	二九八
第二目	支衛	二九八
第三目	附屬署衛	三〇〇
第二款 第二期		
第一項	第二期ノ前期	三〇一

第一目	管務	三〇一
第二目	分掌	三〇三
第三目	職員	三一九
第四目	雜件	三一九
第二項	第二期ノ後期	三二四
第一目	管務	三二四
第二目	分掌	三二五
第三目	職員	三四三
第四目	雜件	三四四
第三款	第三期	三四六
第一項	管務	三四七
第二項	分掌	三四七
第一目	諸局ノ廢置	三四七
第二目	諸局ノ管務	三四八
第三目	諸局ノ分課	三七〇
第三項	職員	三七三
第四項	雜件	三七九
第一目	支術	三七九

明治憲政史第一卷

明治憲政史第一卷

第二目	附屬署衙	三七九
第三目	制外組織	三八一
附錄	中央財政機關沿革一覽表	三八三
第三章	地方機關	三八三
第一節	內國稅務地方機關	三八三
第一款	內國稅務地方機關ノ第一期	三八三
第一項	一般內地	三八三
第一目	前期(府藩縣)	三八三
第二目	後期(府縣)	三八五
第二項	北海道	三八六
第一目	前期	三八六
第二目	後期	三八七
第三項	琉球藩	三八九
第二款	內國稅務地方機關ノ第二期	三八九
第一項	一般府縣	三八九
第一目	租稅局派出機關	三八九
第二目	下級機關	三九二

第二項	沖繩縣	三九三
第三項	北海道	三九三
第三款 內國稅務地方機關ノ第三期		
第一項	一般府縣	三九四
第一目	府縣	三九四
第二目	下級機關ノ第一期	三九九
第三目	下級機關ノ第二期	四〇〇
第四目	下級機關ノ第三期	四〇〇
第五目	下級機關ノ第四期	四〇五
第二項	沖繩縣	四〇六
第一目	縣	四〇九
第二目	下級機關ノ第一期	四一〇
第三目	下級機關ノ第二期	四一一
第三項	北海道	四一二
第一目	上級機關	四一二
第二目	一般內國稅務機關	四一六
第三目	水產稅務下級機關	四一七
第四款 內國稅務地方機關ノ第四期		
		四一八

明治廿九年四月一日

第一項 前期		
第一目	稅務管理局	四一八
第二目	稅務署	四二〇
第三目	下級機關	四二二
第二項 後期		
第一目	稅務監督局	四三二
第二目	稅務署	四三六
第三目	下級機關	四三八
第二節 海關稅務地方機關		
第一款 海關稅務地方機關ノ第一期		
第二款 海關稅務地方機關ノ第二期		
第一項	管務	四三九
第二項	分掌	四三九
第三項	職員	四四〇
第四項	雜件	四四一
第一目	稅關ノ名稱	四四一
第二目	稅關ノ管理	四四二

明治廿九年四月一日

第三目 稅關支廳

第三款 海關稅務地方機關ノ第三期

第一項 管務

第二項 分掌

第三項 職員

第四項 雜件

第一目 稅關ノ管理

第二目 稅關ノ位置

第三目 管轄區域

第四目 稅關支廳

第五目 稅關監視部

第四款 臺灣海關稅務地方機關

第一項 管務

第二項 職員

第三項 雜件

第一目 稅關ノ管理

第二目 稅關ノ位置

第三目 管轄區域

第四目 稅關支廳

第五目 稅關監視部

第三節 臺灣稅務機關

第一款 臺灣稅務中央機關

第一項 管務

第二項 分掌

第一目 局部ノ廢置

第二目 局部ノ管務

第三目 局部ノ分課

第三項 職員

第四項 雜件

第一目 監督

第二目 附屬機關

第二款 臺灣內國稅務地方機關

第一項 縣島廳及廳

第一目 管務

第二目 分掌

四六〇

四六五

四六五

四六五

四六五

四六六

四六六

四六六

四六六

四六七

四六七

四六九

四六九

四六九

四七三

四七三

四七三

第三目 職員	四七四
第四目 雜件	四七七
第二項 支廳	四七八
第一目 管務	四七九
第二目 分掌	四七九
第三目 職員	四七九
第四目 雜件	四八〇
第三項 街庄社長	四八二
第四項 雜件	四八二
第一節 造幣機關	四八五
第一款 造幣機關ノ第一期	四八五
第二款 造幣機關ノ第二期	四八五
第一項 管務	四八六
第二項 分掌	四八六
第三項 職員	四八七
第四項 雜件	四八八
第一目 管理	四八八

第四章 附屬機關

第一節 造幣機關

第一款 造幣機關ノ第一期

第二款 造幣機關ノ第二期

第一項 管務

第二項 分掌

第三項 職員

第四項 雜件

第一目 管理

第二目 支廳	四八八
第二節 印刷機關	四八九
第一款 印刷機關ノ第一期	四八九
第二款 印刷機關ノ第二期	四九〇
第一項 管務	四九〇
第二項 分掌	四九一
第三項 職員	四九二
第四項 雜件	四九三
第三節 葉煙草專賣機關	四九四
第一款 葉煙草專賣機關ノ第一期	四九四
第一項 管務	四九四
第二項 分掌	四九四
第三項 職員	四九四
第四項 雜件	四九五
第一目 管理	四九五
第二目 名稱位置	四九五
第三目 管轄區域	四九五

第四目	專賣支所	四九六
第二款	葉煙草專賣機關ノ第二期	四九七
第一項	第二期ノ前期	四九七
第一目	管務	四九七
第二目	分掌	四九七
第三目	職員	四九八
第四目	雜件	四九八
第二項	第二期ノ後期	四九八
第一目	管務	四九九
第二目	分掌	四九九
第三目	職員	四九九
第四目	雜件	五〇〇
第四節	金庫	五〇二
第一款	金庫ノ第一期	五〇二
第一項	金庫	五〇三
第一目	前期	五〇三
第二目	後期	五〇四

第二項	現金出納機關	五〇六
第一目	前期	五〇六
第二目	後期(國庫金出納所)	五一三
第二款	金庫ノ第二期	五二〇
第一項	管務	五二〇
第二項	分掌	五二〇
第三項	掌理	五二一
第四項	雜件	五二一
第一目	管理	五二一
第二目	種類	五二一
第三目	配置	五二二
第五章	監督機關	五三九
第一節	監督機關ノ第一期	五三九
第一款	監督司	五三九
第一項	管務	五三九
第二項	分掌	五四〇
第三項	職員	五四〇

第四項	雜件	五四一
第二款	正算司	五四二
第一項	管務	五四二
第二項	分掌	五四三
第三項	職員	五四三
第四項	雜件	五四四
第三款	検査寮及検査局	五四四
第一項	管務	五四四
第二項	分掌	五四五
第三項	職員	五四八
第四項	雜件	五四九
第二節	監督機關ノ第二期	五五〇
第一款	會計部	五五〇
第一項	管務	五五〇
第二項	職員	五五〇
第三項	雜件	五五一
第二款	會計検査院	五五一

第一項	管務	五五一
第二項	分掌	五五二
第三項	職員	五五四
第四項	雜件	五五五
第三款	精算局及調査局	五五五
第三節	監督機關ノ第三期	五五六
第一款	會計検査院	五五六
第一項	管務	五五六
第二項	分掌	五五七
第三項	職員	五六二
第四項	雜件	五六三
第二款	調査局及主計局	五六三
第四節	監督機關ノ第四期	五六三
第一款	帝國議會	五六三
第一項	組織	五六四
第二項	權限	五六四
第三項	職員	五六五

第四項	雜件	五六六
第二款	會計檢查院	五六七
第一項	管務	五六七
第二項	分掌	五六九
第三項	職員	五七四
第四項	雜件	五七五
第三款	主計局	五七六
第六章	中央當局者	五七九
第一節	金穀出納所時代	五七九
第二節	會計事務局時代	五七九
第三節	會計官時代	五八〇
第四節	大藏省時代	五八〇
第三編	會計法規	五八五
第一章	總說	五八五
第二章	一般會計法	五九三

第一節	一般會計法規ノ第一期	五九三
第二節	一般會計法規ノ第二期	六一九
第三節	一般會計法規ノ第三期	七五四
第四節	一般會計法規ノ第四期	八五七
第三章	特別會計	八九三
第一節	現行會計法制定前ノ特別會計	八九三
第一款	鐵道基金	八九四
第二款	整理公債金	八九六
第三款	起業基金	八九八
第四款	勸業資本金及勸業委託金	九〇二
第五款	北海道廳府縣勸業委託金	九〇四
第六款	下ノ關償金返還部	九〇五
第七款	朝鮮政府補填金	九〇六
第八款	官業資本金	九〇九
第九款	各種別途金	九一一
第十款	別途會計ニ關スル法規	九一五

第一項	作業費	九一六
第二項	起業基金	九四五
第三項	森林資金	九五四
第四項	電信燈臺貯藏物品資本	九五六
第五項	學校收入金	九五八
第二節 現行會計法制定後ノ特別會計		
第一款 作業及鐵道		
第二款 資金		
第一項	造船及造兵材料資金	九八八
第二項	鐵道用品資金	九九七
第三項	葉煙草專賣資金	一〇〇六
第四項	貨幣整理資金	一〇一〇
第五項	森林資金	一〇一二
第三款 基金		
第一項	紙幣交換基金	一〇一四
第二項	軍艦水雷艇補充基金	一〇一七
第三項	教育基金	一〇一九

明治財政史第一卷目次終

第四項	災害準備基金	一〇二二
第四款 公債		
第一項	整理公債	一〇二七
第二項	鐵道及事業公債	一〇二八
第三項	鐵道及事業公債	一〇二九
第五款	儲蓄金、預金、貯金、爲替金	一〇三二
第六款	官立學校及圖書館	一〇三七
第七款	臨時軍事費	一〇五一
第八款	償金	一〇五一
第九款	臺灣總督府	一〇五二
第十款	在外國帝國專管居留地	一〇五四

第一編 緒言

明治財政史 第一卷

第一編 緒言

第一章 總說



明治維新以降三十五年間ノ財政歴史ハ實ニ變化起伏極リナク比較的ニ短日月ノ間ニ種種ノ出來事ヲ網羅シ細ニ之ヲ研究スルトキハ實ニ一部ノ財政學ニシテ爲政家ノ爲メニモ亦學術家ノ爲メニモ參考トナルヘキ頗ル有益ノ材料ヲ豊カニ供給スルモノナリ

明治財政史ハ最モ混雜極ハマル財政ヲ以テ初マレリ慶應ノ末年ニ當リ徳川將軍ハ政權ヲ朝廷ニ返上シ京都ハ全國政治ノ中心トナリタルモ未タ政治機關ノ組織就中最モ急要ナル財政ヲ如何ニホヘキヤノ問題ヲ考フルノ暇モナク鳥羽伏見ノ戰爭トナリタルモノナリ當時ノ官軍ハ朝廷ニ味方セシ諸藩聯合軍ニシテ經費ノ多クハ各藩ヨリ支辨セリ而シテ各藩ニ屬セサル中央政府ノ經費ハ纔カニ富豪ヨリノ借入金ト太政官札ノ發行トニヨリ支ヘタルモノナリ

明治元年ヨリ同四年七月廢藩置縣ニ至ルマテノ間ニ於ル財政ノ務ハ朝廷ノ直轄ニ歸シタル土地ヨリ生スル歳入ヲ整理シ太政官札ノ通用ニ障礙アリ價格ノ下落セルヲ救フノ途ヲ講シ舊政府發行ノ貨幣紊亂セルヲ一掃シテ新ニ純良ノ貨幣ヲ造リ及二分金其他ノ贋造貨幣ヲ處分シ通商會社及爲替會社ヲ設立セル等是ナリ此年間に於テ明治政府中央集權ノ方針ハ著著進行シ諸藩ノ軍隊

及軍艦ヲ中央ニ收集メテ軍政ヲ統一シ之ト共ニ軍隊及軍艦ノ維持ニ要スル經費ノ財源ハ諸藩ヨリ納付セシムルノ方針ヲ採レリ

明治四年廢藩後明治十年マテノ間ニ於ル財政ノ務ハ舊藩ヨリ引繼タル歲入ヲ整理シ舊藩ノ負債ヲ處分シ舊藩發行ノ紙幣ヲ整理シ政府發行紙幣償還ノ爲メ金札引換公債證書條例ヲ制定シ通商會社爲替會社ヲ解散シテ國立銀行條例ヲ制定シ鐵道建設及秩祿處分ノ爲メ外國債ヲ起シ土地ノ官民有區分ヲ明カニシ地租改正ヲ斷行シ地租ノ米納ヲ金納ニ改メ舊政府時代ノ雜稅二千餘種ヲ廢シテ稅法ノ統一ヲ計リ家祿ヲ處分シテ金祿公債ノ制ニ改メ臺灣佐賀萩鹿兒島ノ戰役費ヲ支辨シ地租ノ率ヲ改メ八百萬圓ヲ減シタル等はナリ

明治十一年ヨリ明治二十三年ニ至ルマテノ間ニ於ル財政ノ務ハ公債ノ償還方案ヲ定メ地方稅ヲ起シ政府紙幣ノ整理ヲ斷行シ正金銀行及日本銀行ヲ設立シ國立銀行條例ヲ改正シテ其發行紙幣消却方法ヲ定メ鐵道公債ヲ起シ軍備擴張ノ爲メ酒稅ヲ增シ海軍公債ヲ起シ其他所得稅醬油稅菓子稅煙草稅賣藥稅印紙稅等ヲ課シ大藏省證券ノ制ヲ定メ兌換銀行券條例ヲ設ケ紙幣ト銀貨トノ交換ヲ實施シ公債ヲ整理シ豫算出納會計検査等會計ノ制度ヲ改頁シ田畑ノ地價ヲ修正減少シタル等はナリ

明治二十四年ヨリ明治三十五年ニ至ルマテノ間ニ於ル財政ノ務ハ明治二十七八年戰役費ヲ支辨シ戰後經營及三十三年北清事件ノ爲メ三回ノ增稅ヲ斷行シ貨幣制度ヲ改革シテ金貨本位ヲ實施シ日本勸業銀行農工銀行臺灣銀行拓殖銀行日本興業銀行ヲ設立シ臺灣經營ノ財政方案ヲ定メ外國債ヲ起シ關稅定率法ヲ定メ稅關制度ヲ改頁シタル等はナリ

以下三章ニ三十五年間ノ財政史上最モ著明ノ建言ト報告トヲ掲ケ緒言ノ補足トス

第二章 明治六年井上大藏大輔及澁澤大藏省三等

出仕辭職ニ臨ミ提出セル財政上ノ建言

國家ノ隆替ハ固ヨリ氣運ノ然ラシムル所ト雖モ亦未タ政府舉措ノ當否ニ由ラスンハアラサルナリ維新ヨリ以來未タ十年ナラスシテ庶績緒ニ就キ萬方化ニ嚮ヒ内ニハ數百年既ニ衰ヘタル紀綱ヲ恢弘シ外ニハ五大洲方ニ盛ナルノ政刑ヲ折衷シ封建ヲ變シテ以テ郡縣ヲ定メ門閭ヲ廢シテ以テ賢材ヲ舉ケ律ハ萬國ノ公法ヲ兼テ議ハ四境ノ輿論ヲ盡シ學ハ八區ヲ別テテ無智ノ民ヲ誘ヒ兵ハ六鎮ヲ置テ不逞ノ徒ヲ懲ス一瞬遠キニ達スルハ舟車同ク蒸汽ノ力ニ藉リ萬里急ヲ報スルハ海陸並ニ電信ノ機ヲ頼ム心ヲ貿易ニ用キ力ヲ開拓ニ盡シ貨幣制ヲ正フシ街衢觀ヲ異ニス其他製鐵燈臺鐵路ヨリ以テ屋舎衣帽几床織履ノ細ニ至ルマテ日ニ變シ月ニ革マリ駸駸乎トシテ開化ノ域ニ進ムコト馴馬モ及フヘカラサルノ勢アリ此ノ如クニシテ已マサレハ數年ヲ出テスシテ文明ノ具備スルコト之ヲ歐米諸國ニ比スルモ亦應サニ慚色ナカルヘキナリ苟クモ國家ニ志アルモノ皆喜ンテ相慶スルヲ知レリ然リ而シテ臣等爰ニ憂フル所アリ蓋シ憂ハ憂ニ終ルニアラス必スヤ喜アリテ其間ニ存ス喜ハ喜ニ終ルニアラスシテ必スヤ憂アリテ其中ニ存ス故ニ憂アレハ其喜フヘキヲ求メ喜アレハ其憂フヘキモノヲ慮ル是ニ於テカ舉措當ヲ失ハスシテ國家以テ開明ノ眞治ヲ致スヲ得ン夫レ開明ノ言タル其稱ハ一ナリト雖モ推シテ其歸スル處ヲ論スレハ判然岐ツテ二ツト爲ササルヲ得ス開明ノ政理上ヲ主トスルハ形ヲ以テスルモノニシテ開明ノ民力上ヲ重ンスルハ實ヲ以テスルモノナリ形ヲ以テスルモノハ求メ易クシテ實ヲ以テスルモノハ致シ難シ今歐米

諸國ハ民皆實學ヲ務メテ智識ニ優ナリ故ニ人人各自其力ニ食ム能ハサルヲ以テ大恥トナシ而シテ我民ハ即チ之ニ反ス士ハ徒ラニ父祖ノ穀祿ニ藉ルヲ知テ未タ文武ノ科ヲ究ムルヲ知ラス農ハ徒ラニ郷土ノ常ニ仍ルヲ知テ未タ耕桑ノ術ヲ講スルヲ知ラス工ハ徒ラニ備作ノ價ヲ論スルヲ知テ未タ器械ノ巧ヲ求ムルヲ知ラス商ハ徒ラニ錮録ノ利ヲ爭フヲ知テ未タ貿易ノ法ヲ明カニスルヲ知ラス是レ皆其力ニ食ムコト能ハサルモノニシテ其際一二才識ヲ以テ稱セラルモノアリト雖モ多クハ請托機ニ投シ龍斷利ヲ網スルノ徒ニ過キス甚シキハ詐欺百出誣冒萬變產ヲ破リ家ヲ亡ホスニ至ル者比比トシテ之アリ今斯ノ如キノ輩ヲ驅テ一朝俄カニ開明ノ域ニ屆ラシメント欲ス又猶ホ卵ヲ見テ時夜ヲ求ムルカ如キナリ臣等曾テ中夜竊カニ自ラ謂ラク長ク大都ニ在テ一タヒ海外ニ航シ職ヲ奉スル久シカラストセス事ヲ閱スル多カラストセサレハ其智識昔日ニ愈ルヤ必セリト退テ其長スル所ノ者ヲ求ムレハ依然タル吳下ノ阿蒙ノミ因テ起坐大息スル者之ヲ久フス臣等ノ遇フ所ヲ以テシテ猶ホ且然リ況ンヤ生レテ偏陬僻邑ニ在ル者ニ於テヲヤ是ニ由テ之ヲ觀レハ今日ノ開明ハ民力上ヲ重ンスルニアラスシテ徒ラニ政理上ニ空馳スルモノ固ヨリ智者ヲ俟テ後ニ知ラサルナリ苟クモ政理上ノミヲ主トセン乎人人愛國ノ情ヲ存スレハ誰カ敢テ文明ノ政治歐米諸國ノ如クナルヲ企望セサルモノアラシヤ是ヲ以テ現今在官ノ士足未タ其地ヲ踏マヌ目未タ其事ヲ見ス僅カニ之ヲ譯書ニ窺カヒ之ヲ寫眞ニ閱スルモ亦且ツ奮然興起シテ之ト相抗セントス況ンヤ比年海外ニ客遊スル者ニ於テヲヤ其歸ルニ及ンテハ或ハ英ヲ以テ優レリトシ或ハ佛ヲ以テ優レリトシ蘭ヤ米ヤ字ヤ埃ヤ皆其長スル所ヲ以テ我ニ比較シ街衢貨幣開拓貿易ニ論ナク兵ニ學ニ議ニ律ニ蒸汽電信ニ衣服器械ニ凡ソ以テ我カ文明ヲ資ク可キ者絲毫遺サス纖細洩サ

ス以テ我具備ヲ求メサルナキニ至ラン是レ固ヨリ人情ノ已ムヲ得サル所ニシテ未タ以テ非トナス可ラスト雖モ徒ラニ其形ノミヲ主トシテ其實ヲ重ンセスンハ政治遂ニ人民ト背馳シ法制益美ニシテ人民益疲レ百度愈張リテ國力愈減シ功未タ成ルニ至ラスシテ國已ニ貧弱ニ陥リ善者アリト雖モ其後ヲ善クスル能ハサラントス果シテ此ノ如キカ夫レ何ヲ以テ國タルヲ得ンヤ是レ人人ノ喜フ所ニシテ臣等ノ以テ憂フル所ナリ凡ソ天下ノ事ハ豫メ標準ヲ高遠ニ期セサル可ラスト雖モ其手ヲ下スニ方テハ即チ歩序ヲ逐ヒ著著實ヲ認メ政理ヲシテ民力ト相負カサラシムルヲ要ス決シテ躁行輕進速成ヲ一日ニ求ムヘカラス武臣均キヲ乘ルノ日ハ國各其制ヲ異ニスト雖モ人ヲ舉クル必ス門閥ヲ以テ是故ニ位ニアル者ハ肉食ノ徒ニ止マリテ政刑却テ卑職賤吏ノ手ニ出ルニ由リ教化法律ノ何者タルヲ知ラス故キヲ按シ例ニ據リ武斷決ヲ取ルヲ以テ事却テ苟簡ニシテ未タ紛擾ノ患ヲ見ス因襲ノ久シキ民モ亦見テ以テ常トナシ敢テ之ヲ異シムモノアルコトナク海内平安茲ニ二百餘年一旦外交ノ事起ルニ及ンテ始メテ其害大ニ見ハレ收拾ス可ラサルニ至レリ爾來志士仁人爭起就趨其身ヲ殺シテ以テ維新ノ運ヲ挽回スルヲ得タリ是時ニ當リテ其勢舊弊ヲ廢除シ庶政ヲ更張シテ天下ノ耳目ヲ一洗セサルヘカラス是ヲ以テ先ツ視聽ヲ廣ムルヲ求ムレハ故常ニ安スルヲ恥ルヲ知ル既ニ故常ニ安スルヲ恥ルヲ知レハ猛省勇決昔日ノ弊ヲ盡セサル能ハス是ニ於テ乎倒行逆施舉テ其事ニ從ヒ凡ソ國體兵制刑律教法學則工藝民法商業ヨリ百般ノ技藝ニ至ルマテ之ヲ一時ニ更革シテ萬國ト抗衡セント欲ス是レ氣運ノ然ラシムル所ト雖モ其舉措モ亦此ニ出スンハアラサルナリ之ヲ良醫ノ病ヲ治スルニ譬フ疾方ニ劇ナルニ當ツテハ先ツ投スルニ劇藥ヲ以テセサル可ラスト雖モ其漸ク平ナルニ迄ンテハ溫補ノ藥ヲ與ヘテ以テ其元氣ノ

復スルヲ待ツ是レ之ヲ其術ヲ得タリト謂フ故ニ其醫ノ期スル所ハ唯元氣ノ復スルヲ待ツニ在テ
 必ス先ツ投スルニ劇藥ヲ以テス天下ヲ治ルノ術モ亦何ソ此ニ異ラン既ニ投スルニ劇藥ヲ以テシ
 テ其疾漸ク平カナルヲ致シ庶績緒ニ就キ萬方化ニ嚮フ是レ宜シク温補ノ藥ヲ與フヘキ時ナリ故
 ニ今日政府ノ事ヲ施設スル歩序ヲ追ヒ著實ヲ認ムルヲ要ス而シテ計未タ此ニ出ルヲ知ラス
 猶ホ疇昔ノ輕佻ニ倣ヒ徒ラニ百事ノ躁進ヲ勉ム是レ臣等ノ甘心スル能ハサル所ナリ然リ而シテ
 其之ヲ致スモノ臣等固ヨリ由來スル所アルヲ知レリ更始ノ際政府專ラ人才ヲ拔擢スルニ急ニシ
 テ天下ノ人士モ亦自ラ奮テ其用ニ供セント欲ス苟モ一藝ヲ挾ミ一能ニ誇ルモノ雲集鷹至身ヲ闕
 下ニ致スヲ願ハサルモノナクシテ昔時廉監ノ節ニ從フモノ或ハ其才ナシト雖モ遽カニ捨ツヘカ
 ラス今日操觚ノ才ニ名アル者或ハ其聲アリト雖モ長ク棄ツ可ラス之ヲ以テ野ニ陟スヘキノ士ア
 リテ朝ニ黜クヘキノ人ナク百官ノ闕クルナキ未タ此時ヨリ盛ナルハアラサルナリ夫レ官其人多
 ケレハ其事ヲ作スヲ好ム既ニ其事ヲ作スヲ好ムハ必ス其功ヲ爲スヲ喜フ今政府意ヲ民力上ニ注
 カスシテ力ヲ政理上ニ専ラニシ百官又事ヲ作シ功ヲ爲スニ急ナレハ勢ヒ實用ヲ捨テ空理ニ馳ス
 ルノ弊ナキ能ハス況ンヤ愛國ノ至情ヨリ彼カ開明ノ政治ヲ欣羨シテ驟カニ之ト相抗セント欲ス
 ルニ於テヲヤ是ニ於テカ唯事務ノ振興ヲ求メテ治具ノ漏闕アラントヲ之レ恐ル故ニ害トシテ
 陳ヘサルナク利トシテ講セサルナク或ハ隙ニ投シテ以テ容ルルヲ求ムルモノアリ或ハ新ヲ街フ
 テ寵ヲ要スル者アリ院省使察司ヨリ府縣ニ至ルマテ各自其功ヲ貪テ往往其官ヲ増ス是ヲ以テ百
 事湊合萬緒蟬集互ニ相抵觸シテ政府モ亦自ラ其弊ニ堪ヘサラントス且夫其官アレハ其給ナカル
 可ラス其事アレハ其費ナカル可ラス是故ニ事務日ニ多キヲ加ヘテ用度月ニ費ヲ増シ歲入常ニ歲

出ヲ償フ能ハサレハ之ヲ人民ニ徵求セサルヲ得ス夫レ政治ノ要其端固ヨリ多シト雖トモ渙號ノ
 今日ニ際セル須ラク理財ヲ以テ第一義トスヘシ理財苟モ法ヲ失セハ要費給スルヲ得ヘカラス要
 費給ハルヲ得ヘカラスレハ百事何ヲ以テ舉カルヲ得ンヤ是ニ於テ乃チ之カ賦稅ヲ増シ之カ備役
 ヲ起シテ以テ斯民ヲ督呵ス其極斯民ヲシテ安息スル能ハスシテ國モ亦隨テ凋衰ヲ免カレサルニ
 至ラン是レ古今ノ通患ニシテ政府ノ深ク寒心セサル可ラサルモノ實ニ此ニアリ今全國歲入ノ總
 額ヲ概算スレハ四千萬圓ヲ得ルニ過キスシテ豫メ本年ノ經費ヲ推計スルニ一變故ナカラシムル
 モ尙ホ五千萬圓ニ及フヘシ然ラハ則チ一歲ノ出入ヲ比較シテ既ニ壹千萬圓ノ不足ヲ生ス加之維
 新以來國用ノ急ナルヲ以テ每歲負フ所ノ用途モ亦將ニ壹千萬圓ニ超ントス其他官省舊藩ノ楮幣
 及ヒ中外ノ負債ヲ舉クルニ殆ト壹億貳千萬圓ノ巨額ニ近カラントス故ニ之ヲ通算スルニ政府現
 今ノ負債實ニ壹億四千萬圓ニシテ償却ノ道未タ立タサル者トス然ラハ則チ速ク其制ヲ設ケテ逐
 次之ヲ支費セサル可ラス然ラスンハ後來人心ノ信憑ヲ固確スル能ハス一朝不虞ノ變アル困頓跋
 蹙躄ヲ噬ムトモ及フ可カラサルニ至ラン然リ而シテ政府未タ意ヲ此ニ注セテ却テ百度ノ更張ヲ
 勉メ開明ヲ政理上ニ求ムルコト猶ホ前日ノ如クナラハ斯民ヲ保護スルノ道安タニカアル政府既
 ニ斯民ヲ保護スルニ道ヲ得ス斯民ソレ何ヲ以テ蘇息スルヲ得ンヤ議者乃チ曰ク瘠土ノ民ハ勞シ
 沃土ノ民ハ樂ム樂メハ貧ニシテ勞スレハ富ム故ニ其智ヲ進メテ之ヲ富サント欲セハ其賦稅ヲ厚
 クスル速ニ歐米諸國ノ如クセサルヘカラスト噫何ソ其言ノ謬レルヤ歐米諸國ノ民タル概ネ智識
 ニ優ニシテ特立ノ志操ヲ存ス且其國體ノ然ラシムル所ヨリ常ニ政府ノ議ニ參スルヲ以テ其保持
 スル猶ホ手足ノ頭目ヲ護スルカ如ク利害得失内ニ明ニシテ政府ハ唯之カ外廷タルニ過キス今我

民ハ即チ之ニ異ナリ久シク專横ノ餘習ニ慣レ長ク偏僻ノ固陋ニ安シ智識開ケス志操確カラス進退俯仰唯政府ノ命ニ之レ遵ヒ所謂權利義務等ノ如キニ至リテハ未タ其何物タルヲ辨スル能ハス政府令スル所アレハ國ヲ舉テ之ヲ奉シ政府趨ク所アレハ國ヲ舉テ之ニ歸シ凡ソ風習言語服飾器什ヨリ日用器具ニ至ルマテ先ヲ爭ヒ後ルルヲ恐レテ政府ノ好尚ニ模セサルモノナシ夫レ上ノ好ム所下焉ヨリ甚シキアリ故ニ互市ノ際ニ於ケルモ彼ノ器物既什ヲ輸入スルコト常ニ多クシテ輸出ノ品ハ僅カニ十ノ六七ニ居ルニ過キス民安ソ其貧弱ニ陥ル日一日ヨリ甚シカラサルヲ得ンヤ古人言アリ曰ク民ヲ視ル傷ムカ如シト今ヤ政府ノ斯民ヲ視ル營ニ傷ムカ如キ能ハサルノミナラス却テ之ヲ法制ニ束縛シ之ヲ賦税ニ督呵スル或ハ昔日ニ加フルアリ戸ニ編籍ナキヲ得ス里ニ社稷ナキヲ得ス宅ニ地券ナキヲ得ス人ニ血税ナキヲ得スシテ訴訟ノ費アリ違警ノ罰アリ物價販品牛馬婢僕ニ至ルマテ皆其律ナクンハアラス是ヲ以テ一令下ル毎ニ輒ハチ斯民惘然措ヲ失シ其嚮フ所ヲ知ラス商ニ就テ得サレハ工ニ就キ工ニ就テ得サレハ農ニ就キ家ヲ破リ産ヲ失フモノ比比相踵ク其凋衰ニ赴ク者モ亦昔日ニ倍スル者アリ夫レ此ノ如キヤ政府ハ愈ヨ歩ヲ開明ノ域ニ進メテ民ハ愈ヨ陋ヲ野蠻ノ俗ニ甘ンシ上下ノ相距ル何ソ營々嚮壞ノミナランヤ政理ノ民力ニ負ムク既ニ此ニ至ラハ其善ナルモノ未タ以テ善トナスニ足ラス其美ナルモノ未タ以テ美トスルニ足ラス唯其憂フヘキヲ見テ未タ其喜フヘキヲ見サルナリ蓋シ物各其量アリ國各其力アリテ政治ノ要ハ時勢ニ適スルヲ貴シトス故ニ政府ノ事ヲ施爲スル我國力ヲ審カニシ能ク我民情ヲ察セスンハアルヘカラス夫レ出ルヲ量リ入ルヲ制スルハ歐米諸國ノ政ヲ爲ス所以ニシテ我國力民情未タ此ニ出ツル能ハサルモノ人人ノ能ク知ル所ナレハ方今ノ策ハ且ラク入ヲ量リテ出ヲ制スルノ舊

ヲ守リ務メテ經費ヲ節減シ豫メ一歲ノ所入ヲ概算シテ歲出ヲシテ決シテ之ニ超ユルコトヲ得サラシメ院省寮司ヨリ府縣ニ至ルマテ其施設順序ヲ考量シ之カ額ヲ確定シテ分毫モ其限度ヲ出ルヲ許サス其負債紙幣ノ如キハ無用ノ費ヲ減シ不急ノ祿ヲ省キテ支消兌換漸ヲ以テスルノ法ニ供シ事其序ヲ追ハサレハ進マヌ法其實ヲ認メサレハ舉ラス此民ヲシテ蘇息スル所アラシメ天下ヲシテ政府ノ趨ク所大ニ昔日ニ異ナルヲ明ニセシメサルヘカラス是レ今日ノ時勢ニシテ我國力民情ニ適スル所未タ此ニ愈レルモノアラサルナリ此法苟クモ一定セハ盡ク其長官ヲ會同シテ公示スルニ要旨ヲ以テシ交モ相誓約シテ此目的ヲ失ハサルヲ務トシ夫ノ施爲ノ緩急處置ノ前後或ハ用ヲ兵制ニ豊ニシテ費ヲ法律ニ制ニシ或ハ額ヲ工術ニ加ヘテ費ヲ學則ニ損シ或ハ農租ヲ遞減シテ商稅ヲ増加スル等ノ如キニ至リテハ衆議ヲ盡シテ其宜キヲ斟酌シ政理民力相背カサルヲ以テ後來ノ標準トナスヘキナリ果シテ此ノ如クナレハ斯民モ亦其向フ所ヲ知リ自ラ富貴ノ本ヲ勉ムルヲ得テ政理ト共ニ開明ノ歩ヲ進ムル足ヲ企テ俟ツヘキナリ然ラスンハ内外ノ變必ス不測ノ間ニ生シテ土崩瓦解檢束スヘカラサルニ至ラン之ヲ如何ソ政府ノ舉措其當ヲ得タリト云フヘケンヤ臣等無似ト雖モ亦久シク乏シキヲ理財ニ承ケタリ是ヲ以テ施爲ノ務メニ於テハ未タ大ニ其功ヲ奏スルヲ得スト雖モ其實際ヲ親驗躬履ノ迹ニ求ムレハ未タ必スシモ見解ナシト云フヘカラス臣等ノ見ル所ヲ以テ之ヲ慮ルニ今日ノ開明唯ニ其喜フヘキモノヲ見サルノミナラス其大ニ憂フヘキモノ將ニ彈指ノ間ニ在ラント是レ固ヨリ政府ノ措置如何ニ在テ氣運ノ然ラシムル所ニ非ル者照照乎トシテ明カナリ夫レ知テ言ハサルハ不忠ナリ知ラスシテ言フハ不智ナリ臣等縱ヘ不智ノ譴ヲ受クルトモ決シテ不忠ノ臣タルヲ欲セス是ニ於テカ已ニ其職務ニ堪ヘサルヲ以テ骸骨

ヲ乞フト雖モ區區ノ心今日ニ默然タルニ忍ヒス故ニ敢テ其愚忠ヲ留メテ以テ政府ノ少シク回顧
スル所アランヲ望ム耳其盡言極論威嚴ヲ冒瀆シテ顧忌スル所ナキハ固ヨリ斧鉞ノ誅ヲ甘スルヲ
以テナリ臣等臣榮一憂懼ノ至リニ堪ヘス誠恐誠惶悚味死以聞

第三章 明治二十八年松方大藏大臣ノ提出セル財

政意見書

謹テ按スルニ財政ノ整否ハ實ニ國家盛衰安危ノ關スル所ナリ昨年日清事件ノ起リテ以來巨額ノ
軍費ヲ要シ今後軍備ノ擴張ニ要スル所亦少ナカラス此時ニ當リ財政ノ經綸一步ヲ過レハ國家不
治ノ禍害ヲ醸シ國勢ヲシテ永ク萎靡不振ニ陥ラシメントス豈ニ恐レサルヘケンヤ
凡ソ財政前途ノ經畫ヲ立ツルニ當リ第一ニ著目スヘキハ今後或年數間ニ新ニ增加支出ヲ要スル
經費ノ定度第二右經費ノ支辨ニ充ツヘキ財源及民力ノ負擔如何第三國費ノ増進ニ應スヘキ國力
發達ノ方法はナリ

日清交渉ノ結果我國威大ニ宣揚シ宇内各國ノ嫉妬心ヲ増シタルヲ以テ之ニ應スルノ兵力ナカル
ヘカラス朝鮮獨立ヲ將來永遠ニ保持スルノ兵力ナカルヘカラス新領地ノ防備ニ充ツルノ兵力ナ
カルヘカラス而シテ是等ノ兵備ハ大半三五年ノ内ニ完成スルノ必要アルヘシ歐洲列國ハ既ニ我
國ニ對スル外交ノ面目ヲ改メ三國ノ同盟ヲ訂約セリ東洋ニ浮フヘキ堅艦ノ建造ニ著手セントス
ルノ形勢アリ「サイベリヤ」大鐵道ノ成ルハ正ニ五箇年ノ内ニアルナリ我國軍備ノ擴張ハ實ニ一日
モ緩ニスヘカラス而シテ其經費ノ定度ハ海軍ハ先以テ凡貳拾萬噸陸軍ハ砲臺建築兵器改良ノ外
ニ現在ノ常備ヲ殆ト倍増スルニ足ルモノタラサルヘカラストハ當局者ノ唱フル所ニシテ實ニ止
ムヲ得サルモノト信スルナリ
軍備ノ擴張ニ充ツヘキ財源ト民力ノ負擔如何ヲ考フルニ明治二十八年度ニ於テ我國一人別内地

税ノ負擔額ハ壹圓五拾八錢トス之ヲ歐米各國ニ比スルニ頗ル輕微ニシテ殆ト比較スルニ足ラス是レ素ヨリ富源ノ度ニ於テ隔絶スル所アルニ因ルト雖モ抑亦我國從來ノ地位低下ニシテ經費ヲ要スル少ナカリシニ因ルナリ故ニ今後漸次増加シテ一人別負擔貳圓乃至貳圓五拾錢ニ至ルモ決シテ民力ノ負擔ニ堪ヘサルノ理アルコトナシ而シテ此新ニ増加スヘキ負擔ハ如何ナル財源ニ課シ如何ナル形ニ於テ徵收スヘキヤハ國情ニ照シ最モ便宜適當ノ税法ヲ採擇セサルヘカラス負擔ノ増加ト共ニ國力ノ發達ハ最モ其方法ヲ忘ルヘカラス其方法タル多アルヘシト雖モ就中大ニ交通運輸ノ便ヲ開發シ以テ農商工業ノ隆盛ヲ計リ興業銀行農業銀行ヲ起シ資本融通ノ潤澤ヲ充分ナラシムルハ頗ル急務ト信スル所ナリ

今現在ノ財源ト現在ノ歳出中毎年殆ト一定シテ動シ得ヘカラス分トヲ調査スルニ明治二十九年ニ於テ國庫ニ入ルヘキ歳入ハ經常部九千六拾貳萬餘圓臨時部參百四拾五萬餘圓合計九千四百八萬餘圓ナリ又皇室費國債費其他各省ノ經常費等年年殆ト一定シタル歳出ハ八千四百五萬餘圓ニシテ歳入ト差引千貳萬餘圓ノ殘餘ヲ生セリ

前記一定シタル歳出八千四百五萬餘圓以外ニ於テ明治二十九年ニ増加セサルヘカラサル費途ヲ調査スルニ左ノ如シ

第一 一般行政事務ノ擴張ニ要スル經費八百貳拾壹萬餘圓ナリ

右ハ比年議會ニ於テ政費ニ節減ヲ加ヘ又或年ニ於テハ豫算不成立トナリ前年度ヲ施行シ又本年度ノ如キハ戰爭ノ爲メ一切新事業ヲ停止シタル結果各省諸般ノ行政事務ハ世運ノ進歩ニ伴ヒ相當ノ擴張ヲ爲スコト能ハス隨テ治水築港ノ事業收税ノ事務諸學校ノ設備交通機關ノ改良

等大ニ滯滞シ國家ノ發達ニ妨害ヲ與フルノ恐アリ又日清事件ノ結果清國朝鮮國ニ領事館ノ増設ヲ要スル等ノ事アリ萬止ムヲ得サルノ増資トス其各省ノ内譯ハ左ノ如シ

一 外務省所管ニ於テ領事館増設機密費増加等拾四萬餘圓

一 內務省所管ニ於テ治水築港費等百參拾九萬餘圓

一 大藏省所管ニ於テ收稅事務擴張費等貳拾五萬餘圓

一 陸軍省所管ニ於テ軍事費増加臨時召集旅費等九拾參萬餘圓

一 海軍省所管ニ於テ軍事費増加鎮守府造船材料資金増加等百五拾貳萬餘圓

一 司法省所管ニ於テ區裁判所出張所増設費等拾五萬餘圓

一 文部省所管ニ於テ諸學校擴張費京都大學及大阪工業學校創立費等參拾萬餘圓

一 農商務省所管ニ於テ生絲検査所蠶業講習所増設費等拾五萬圓

一 遞信省所管ニ於テ航路擴張電信線新設費等參百參拾五萬餘圓

以上

第二 日清事件直接ノ結果ニ伴フ増費千七百參拾貳萬圓ナリ

右ハ止ムヲ得サルノ増費ニシテ内譯左ノ如シ

一金參百萬圓

一金七百萬圓

一金五拾貳萬七千參百九拾九圓

一金六拾九萬圓

威海衛守備費(但清國ヨリ償却金ハ歳入ニ加フ)

軍事公債元利消却

日清事件ニ伴フ賞勳年金増加

日清事件ニ伴フ恩給増加

一 凡金貳百四十五拾萬圓
 一金六拾壹萬貳千六百拾貳圓
 一金參百萬圓

陸軍大計畫擴張ニ伴フ經常部維持費
 吳假兵器製造所製作費
 臺灣經費補足

但臺灣ノ經費ハ該島ノ歳入ヨリ歳出ヲ差引其不足ヲ補填スル計算ナリ又陸軍擴張維持費ハ其完成ニ從ヒ漸次増加シ最高一箇年凡千萬圓トナルノ見込ナリ海軍大計畫擴張ニ伴フ經常維持費ハ明治二十九年歳ニ要求ナキモ新艦落成ト共ニ漸次支出ヲ要シ最高一箇年八百萬圓内外ニ達スルノ見込ナリ

明治二十九年歳ニ於ル歳入殘餘千貳萬圓ヲ以テ一般行政事務ノ擴張費八百貳拾壹萬餘圓ニ充テ尙其殘餘百八拾餘萬圓ヲ以テ日清事件ノ結果ニ伴フ増費千七百參拾貳萬餘圓ニ充テ其差引不足額千五百五拾壹萬餘圓ハ新ニ租稅ヲ増課シ補填セントス今其増稅法案ノ概要ヲ述フレハ左ノ如シ

現在ノ歳入中ニテ將來増加シ得ヘキ見込ノモノヲ舉クレハ地租、所得稅、酒造稅、煙草稅、海關稅、登記料、森林收入、郵便電信收入、鐵道益金ノ九種ナリ此内地租ハ課稅最モ容易ナリト雖モ農民ノ負擔ヲ重クスルハ國家經濟上得策ニアラス況ンヤ我國農民ノ負擔ハ既ニ偏重ニシテ維新以來常ニ地租輕減ノ政策ヲ取り來リタルヲヤ故ニ斷シテ行フヘカラス海關輸入稅ノ増加ハ改正條約實施後ニアラサレハ行ハルヘカラス森林收入、郵便電信收入、鐵道益金ハ收入ノ増加ト共ニ林政及交通機關ノ改良發達ヲ計ラサルヘカラサルヲ以テ他ノ政費ニ供スルニ足ラス所得稅ハ漸次増加シ得ヘキモ俄ニ巨額ノ收入ヲ望ムヘカラス獨リ酒造稅、煙草稅登記料ハ大ニ増加收入ノ望ヲ屬シ得ヘキモ

ノトス然レトモ亦煙草稅ト登記料トハ根底ノ方法ヨリ大ニ改正ヲ要スルモノアルヲ以テ到底明年度ヨリ實施シ得ヘカラス故ニ今日ニ於テハ酒造稅ノ外ハ現在國庫歳入中巨額ノ收入ヲ速ニ得ルノ道ナシトス

爾テ現在未タ國庫ノ歳入トナラサルモノニ就テ増稅ノ方法ヲ求ムルニ現行地方稅中ニアル所ノ營業稅ハ其行ハル、既ニ久シト雖各地稅率ヲ異ニシ弊害少ナカラス今之ヲ國稅ニ改メ稅率ヲ平等適度ニスルトキハ國庫ノ爲ニ一箇年七百五拾萬圓以上ノ收入ヲ生シ而シテ現行ノ如ク稅率不平均ノ爲メ經濟ノ發達ニ妨害ヲ與フルカ如キコトナカルヘシ且又營業稅ハ直接國稅ノ一端ナルヲ以テ衆議院議員選舉人被選舉人ノ獨リ土地所有者ノノミ偏傾スルノ時弊ヲ救治スルノ一端タルヘシ故ニ營業稅ノ實施ハ一舉ニシテ數得アルモノト云フヘキナリ然シナカラ營業稅ヲ國稅ト爲スニツキ地方稅中不足ヲ生スヘキカ故ニ其補填ノ方法ハ現在國稅中ニアル車稅、船稅、菓子稅、牛馬賣買免許稅ハ國稅トシテハ收稅上最モ不適當ナルヲ以テ之ヲ全廢シ更ニ地方稅ニ於テ相當ノ方法ヲ設ケシメ又國稅附加割ノ上ニ修正ヲ加フルトキハ充分餘アルヘシ(地方稅中ノ雜種稅ノ一部モ營業國稅ニ入ルヘシ)明治二十九年歳歳入ノ不足千五百五拾壹萬餘圓ハ酒造稅及營業稅ノ二者ニ依ルノ利タルヤ以上述フルカ如シ而シテ明治二十九年歳以後軍備擴張ノ完成ト共ニ歳入不足モ亦増加スヘキカ故ニ今日ニ於テ之ニ應スルノ準備ナカルヘカラス依テ葉煙草專賣法實施ノ基礎ヲ定ムルノ必要アリ今三稅法ノ概要ヲ述ヘン

第一 酒造稅則改正

現行壹石四圓ノ課稅ヲ改メ七圓トス其增加收入一箇年千八拾餘萬圓

酒造税ハ賚澤品ニ課スル間接國稅ニシテ壹石參圓ノ増稅ハ一時多少造石數ニ影響スヘキモ決シテ酒造業ノ衰微ヲ來スコトナカルヘシ

右改正ハ酒造期節アルヲ以テ本年十月一日ヨリ實施ヲ要ス

酒造稅則ノ改正ニ伴ヒ脫稅防禦ノ爲メ自家用料酒法ヲ改正シ其課稅ヲ増シ及資力アル者ニハ製造免許ヲ制限スルノ必要アリ

又混成酒法ヲ設ケ外國ヨリ輸入ノ酒精ヲ基トシ之ニ水其他ノ物品ヲ混和シ一種ノ飲料酒類ヲ製造シ低價ニシテ酒類ニ代用シ稅源ヲ害スルノ弊ヲ塞クノ必要アリ

又沖繩縣酒類出港稅則及朝鮮國製造日本酒類輸入海關稅法ヲ改正シ内地ノ酒造家ヲ保護スルノ必要アリ

第二 營業稅法制定

各種ノ營業ヲ類別シ課稅ス其收入一箇年七百五十拾餘萬圓

右稅法ハ明治二十九年一月一日ヨリ實施ヲ要ス

第三 葉煙草專賣法制定

全國ノ葉煙草ヲ政府ニ買收シ之ヲ製造人ニ賣渡シ收入ヲ得ルノ方法ナリ其一箇年收入凡ソ六百萬圓内外ヨリ漸次千萬圓以上ニ昇ルヘシ

右ハ施行ノ準備ニ時日ヲ要スルヲ以テ明治三十一年ヨリ施行ヲ要ス

第四 廢止スヘキ稅

酒造稅營業稅ノ實施ト共ニ明治二十九年年度ヨリ廢止スヘキ國稅ハ車稅、船稅、菓子稅、牛馬賣買免

許稅、酒造免許稅、營麴營業稅、煙草營業稅、醬油營業稅、賣藥營業稅ニシテ其廢止ニ因リ減少スヘキ歲入一箇年貳百六十拾餘萬圓ナリ

以上ノ計算ニ依レハ酒造稅及營業稅收入合計千八百四十拾餘萬圓ニシテ此内廢止ニ依リ減少スヘキ歲入貳百六十拾餘萬圓ヲ控除スルトキハ差引千五百七十拾餘萬圓ノ増加トナルヲ以テ明治二十九年年度歲入ノ不足千五百五十拾餘萬圓ニ充テ餘アルヘシ而シテ明治三十一年度以後ニ至レハ葉煙草ノ專賣收入ヲ生スヘク其他海關稅等モ増加スヘキカ故ニ軍備擴張ニ伴フ維持費ノ増加ニ應スルコトヲ得ヘシ

明治二十九年以後ニ於ケル經常歲出増加ト一般行政事務擴張費トニ對スル財政經畫ハ以上述フルカ如シ而シテ其臨時大計畫ニ屬スル歲出増加ニ對スル經畫ハ如何乞フ之ヲ述ヘン

明治二十九年年度以後ニ於テ臨時大計畫ニ屬スル歲出ノ増加ハ第一陸軍擴張第二海軍擴張第三製鋼所設置第四鐵道及電話擴張是ナリ

第一 陸軍擴張費 砲臺建築兵器改良兵營建築等ニ要スル分

第二 海軍擴張費 軍艦及兵器水雷製造軍港築造等ニ要スル分

以上二項ハ清國賠償金ノ內壹億八千萬圓ヲ以テ之ニ充テ其餘ハ必要ニ應シ他ノ財源ヨリ支辨ス

第三 製鋼所設置費 金五百萬圓

右ハ清國賠償金ノ内ヲ以テ之ニ充ツ

第四 鐵道及電話擴張費

官線鐵道ヲ延長シ及既成官線中複線工事ヲ施行シ車輛ヲ増加シ東京ニ中央停車場ヲ設置シ大ニ運輸交通ノ便ヲ計リ北海道殖民鐵道ヲ延長スル等目今ノ急務トスル所ナリ又臺灣ニハ到底南北貫通ノ一線路ヲ必要トスヘシ

電話事業ノ需要非常ニ増加シ到底姑息ノ擴張ヲ以テ満足スルニ足ラサル實況ナリ

依テ明治二十九年以後鐵道敷設法ニ依ルモノハ既定ノ經畫ニ依リ其他複線工事車輛增加中央停車場殖民鐵道臺灣鐵道及電話事業ノ爲メ年壹千萬圓ヲ限リ公債ヲ募集シ其擴張費ニ充テントス而シテ公債ノ増加ト共ニ各事業ノ收入モ亦大ニ増加スヘキ計算ナリ

以上ハ明治二十九年以後大計畫ニ屬スル歲出増加ニ對スル經畫ナリ而シテ以上ノ經畫ト隨伴シテ茲ニ臨時軍事費清國賠償金使用及臺灣歲計ニ對スル經畫ヲ明言シ置カサルヘカラス

第一 臨時軍事費特別會計ハ一時ノ變法ニシテ今日ニ於テハ臺灣未タ鎮定セス金州半島問題及朝鮮問題完結セス之レカ出納ヲ閉ルコト能ハサルモ遲クモ明治二十八年度内ニハ夫夫始末シ其明治二十九年以後以降ニ涉ルモノハ之ヲ一般會計ニ移スノ方法ヲ設ケ一日モ速ニ明細ノ決算ヲ議會ニ報告スルノ準備ヲ爲ササルヘカラス今日軍費ノ爲ニ支出スル所壹億五千九百餘萬圓ニシテ軍資ノ收入ハ壹億四百餘萬圓ニ過キス尙ホ將來ニ支出スヘキモノ或ハ貳參千萬圓ニ昇ルモ計ラレス依テ清國賠償金ノ内五千五百萬圓ヲ軍資ニ繰入レ其餘ハ公債ヲ募集シテ補填セントス

第二 清國賠償金ハ本年十一月ヨリ明治三十五年五月マテ八箇年間ニ分テ收入スヘキモノニシテ其額庫平銀貳億兩即チ我カ三億餘萬圓ナリ如此數年ニ跨リ收入スルモノナルカ故ニ其用途

モ遠大ニシテ數年ニ涉ル繼續事業ニ充ツルヲ可トス
今其用途ヲ定ムルコト左ノ如シ

第一金五千五百萬圓

軍費消却

第二金五千萬圓

陸軍擴張費

第三金壹億參千萬圓

海軍擴張費

第四金五百萬圓

製鋼所設置費

以上既ニ前文ニ略説スル所ナリ

第五金五千萬圓

非常準備金

現金ヲ以テ國庫ニ貯藏シ他日ノ軍資ニ供ス

第六金千萬圓

農業銀行資本補助

民力ヲ培養シ大ニ國產ヲ獎勵スルハ戰後ノ經濟ニ最モ急務トスル所ナリ依テ農業銀行法ヲ制定シ各府縣ニ農業銀行ヲ設立スルノ資ヲ補助セントス

計金三億圓

本項經畫實施ニ付テハ計算ヲ嚴密ニスル爲メ資金法及非常準備金法ノ制定ヲ要ス

第三 臺灣歲計ハ一般會計ヨリ分離シテ別ニ歲入歲出ヲ定メ自營ノ方法ヲ設ケントス尤モ其監督整理ハ嚴肅ニシ弊根ヲ杜絶スルヲ要ス其特別會計法案ハ別ニ具スル所アリ

戰後ノ整理ニ於テ國庫ノ負債増加シタルヲ減却シテ財政ノ基礎ヲ固フスルハ最モ力メサルヘカラス又經濟上ノ發達ヲ計リ民力ヲ培養スルハ其經畫遠大ナラサルヘカラス今此點ニ關シ述フル

所アラントス

臨時軍事費ノ爲ニ募集セル公債八千萬圓ニシテ今後尙募集スヘキ分ヲ假リニ貳千萬圓トスレハ合計壹億圓トス此金額ハ不殖産の費用ノ爲ニ増加シタルモノナルヲ以テナルヘク速ニ消却ヲ了シ後世ノ負擔ト爲サス且他日事アルノ日國庫起債力ノ基礎ヲ鞏固ニスルヲ要ス依テ明治二十九年以以降十箇年間ニ悉皆消却スルノ經畫トス但將來鐵道建築費等殖産の事業ノ爲ニ起スヘキ公債ハ別計算トス

右ノ目的ヲ達スルノ一助トシテ將來毎年度一般會計決算殘餘ハ之ヲ翌年度ニ繰入レス當分公債償還ニ充ツルノ法律ヲ設ケントス又公債ノ償還ヲ便ニシ且其價格ヲ維持センカ爲メ公債買上消却ノ方法ヲ設ケントス

經濟上ノ發達ヲ計リ民力ヲ培養スルノ方法ハ一ニシテ足ラスト雖モ運輸通信ノ機關ヲ擴張シ工業上ノ教育ヲ盛ニシ農工商獎勵ノ途ヲ開ク等ハ最モ急務ト付スヘカラス是レ前文既ニ述フルカ如ク鐵道及電話事業擴張ノ爲メ公債募集ノ經畫ヲ立タル所以ナリ而シテ明治二十九年以於ケル一般行政事務擴張費八百貳拾壹萬餘圓ノ内大部分ハ工業學校擴張費、農事試驗費、蠶業講習所費、生絲檢査所費、商品陳列所費、商船學校擴張費、航路擴張費、海員養成獎勵費、電信線新設費、普通郵便及小包郵便擴張費、領事館増設費等ニ充テタルモノナリ

前記事業ノ外資本融通ノ方法ヲ講スルハ根本的經濟政策トシテ最モ急務トスル所ナリ日本銀行及正金銀行ヲシテ各事業ヲ擴張セシムルコトニ付テハ既ニ著手スル所アリ各國立銀行ノ終末ヲ全クセシムルニ付テモ亦胸算スル所アリ而シテ興業銀行及農業銀行ノ創立ハ將サニ今日ニ於テ

其機運ノ熟スルヲ確信シテ疑ハサル所ナリ

日本銀行ハ國庫ノ運轉機關並活潑ナル商業信用機關ノ中心タリ正金銀行ハ日本銀行ヲ助ケ專ラ外國ニ向テ信用機關ノ運動ヲ爲スモノナリ今ヤ戰勝ノ結果内地ノ農工商業ヲ發達シ進テ臺灣ニ朝鮮ニ清國ニ我商業ヲ擴張シ我國人民ノ所有ニ係ル工場ヲ増設スルノ必要アリ其資本ヲ要スルノ巨大ナル到底現在ノ銀行組織ノ應シ得ヘキ所ニアラス況ンヤ各府縣市町村ニ於テ疏水築港給水等土木事業頻頻トシテ起リ其要スル所ノ資金モ亦巨額ニ昇ラントスルニ於テテヤ從來巨大ノ事業ニ付テハ多少中央政府ヨリ保護セシ所アリシモ戰後ノ財政ハ如此キ餘地ヲ存セス從テ益々資金融通ノ途ヲ要スルコト急ナリ此ニ於テ中央ニ一大興業銀行ヲ起シ各府縣ニ農業銀行ヲ設立シ政府ハ其監督ヲ嚴ニシ債券ノ發行ヲ以テ内外ノ資本ヲ吸收シ永期年賦償還ノ方法ヲ以テ貸付ヲ爲シ前記一般ノ需要ト各府縣市町村ノ需用トニ應スルニ至レハ我國經濟上ノ發達ニ至大ノ便益ヲ與フルヤ昭昭タリ

戰後ニ於ケル財政及經濟ノ爲メ畫策スル所ハ以上述フルカ如シ而シテ其中最モ施行ヲ急ク所ノモノハ酒造稅則改正ト營業稅法トノ制定發布是ナリ是レ一ハ本年十月一日ヨリノ實施ニ係ルト一ハ明年一月一日ヨリノ實施ニ係ルヲ以テナリ

今若シ二稅案ノ明治二十九年以實施ニ至ラントセンカ假リニ彌縫ノ策ヲ講スルノ外途ナシ即チ一時借入金ヲ爲スカ一時清國賠償金ヲ經常費ニ使用スルカ或ハ明治二十九年以於テ陸海軍ノ擴張ヲ延期シ一般行政事務擴張費ノ内其最モ止ムヲ得サルモノ百四拾貳萬餘圓ヲ除キ其他外交費、治水築港費、收稅費、司法教育費、農工遞信費等六百七拾九萬餘圓ヲ全廢シ尙各省經常費ノ上ニ

凡ソ五分ノ減削ヲ加ヘ以テ歳入出ノ平均ヲ保ツ等是ナリ然シナカラ如此彌縫策ハ拙策中ノ拙ナルモノニシテ國家ノ長計ニアラス願クハ速ニ決スル所アリ財政ノ方針ヲ誤ルコト勿ランコトヲ

明治二十八年八月十五日

第四章 明治三十三年松方大藏大臣ノ提出セル戦後財政始末報告

緒言

明治二十七八年事件ノ結果戦後經營ノ爲メ新ニ施設セラレタルモノ甚タ多ク昔テ八千萬圓前後ニ止マリシ歳計ハ明治二十九年年度ニ於テ貳億圓ニ上リ漸次増加シテ明治三十三年度ニ至リ遂ニ貳億五千餘萬圓ノ巨額ニ達シ實ニ我財政上ノ面目ヲ一新シタリ而シテ所謂戦後經營ハ財政經濟兩ナカラ相須テ進ムニ非サレハ永遠ニ其效果ヲ收ムル能ハサルヲ以テ其財政經畫モ亦常ニ此點ニ重ヲ置キ一方ニ於テ租稅ヲ増徴シ公債ヲ募集シ以テ戦後豫算ノ整理ヲ圖ルト共ニ一方ニ於テ貨幣制度ヲ改正シ金融機關ヲ増設スル等産業ノ發達ニ資スルコトヲ努メタリ故ニ戦後ノ財政經畫ハ此等各種ノ點ニ涉リ施爲セラレタルヲ以テ其詳細ニ至リテハ各其編ヲ分チテ記述セサルヲ得スト雖モ互ニ相關聯スルヲ以テ此ニ其大要ヲ總括シテ敘述ス

明治二十九年年度以降同三十三年度ニ至ル間ニ於テ戦後經營ノ爲メ施設セラレタル事業ハ甚タ多シト雖モ其最モ重要ナルモノヲ舉クレハ陸海軍備ノ擴張製鐵所ノ創立鐵道ノ改良及敷設電話電信航海ノ擴張京都帝國大學第二高等師範學校第二高等商業學校第六高等學校高等工業學校及高等農林學校ノ創立日本勸業銀行農工銀行臺灣銀行及北海道拓殖銀行ノ設立臺灣ノ經營及農工商治水等ノ經營ニシテ孰レモ皆國力ノ充實産業ノ發達ヲ企圖スルニ出テサルモノナシ此ノ如ク戦後經營ノ爲メ諸般ノ施設ヲ要シタルカ爲メ到底從來ノ歳入ヲ以テ之ニ應スルニ足ラ

サルヲ以テ政府ハ其經常費ノ財源ニ對シテハ租稅ヲ増加シ其臨時費ノ財源ニ對シテハ公債ヲ募集シ又ハ債金ヲ使用シテ之ニ充ツルコト、シ其成案ヲ具シ前後議會ニ提出セリ然ルニ公債ノ募集及債金使用ノコトニ關シテハ豫期ノ如ク實行セラレタリト雖モ増稅ノコトニ關シテハ其第一期ノ増稅經畫ハ明治二十九年於テ直ニ成立セシニ反シ第二期ノ増稅經畫ハ政府議會ノ間ニ意見ヲ異ニシタルモノアリシカ爲メ漸ク明治三十二年於テ成立セリ而シテ増稅經畫ノ成立ト共ニ戦後經營ハ粗ホ一段落ヲ告ケ戦後豫算ノ整理ハ始メテ其緒ニ就キ明治三十三年度豫算ハ茲ニ漸ク其平調ニ復スルヲ得タリ

第一期ノ増稅經畫ハ登録稅、營業稅ヲ新設シ酒造稅ヲ増加シ及葉煙草專賣ヲ開始シ之ニ依リ新ニ參千參百五拾七萬餘圓ノ歳入ヲ得ルノ豫定ニシテ第九議會ノ協賛ヲ得明治二十九年於テ成立セリ而シテ第二期ノ増稅經畫ハ議會ニ於テ修正ヲ爲シタル結果政府當初ノ提出案ト多少ノ差異ヲ生シ結局地租所得稅、酒稅、登録稅、醬油稅、葉煙草專賣收入及郵便電信收入ヲ増加シ噸稅及兌換銀行券發行稅ヲ新設シ之ニ依リ新ニ四千貳百貳萬圓ノ歳入ヲ得ルコト、ナレリ政府ハ増稅ヲ畫策スルニ當リ其撰擇スヘキ租稅ノ種類ニ付テ深ク注意シ國庫歳入ノ基礎ヲ鞏固ニスルコトヲ計ルト共ニ地方財源ノ涵養ニ力ヲ致シ併セテ國民ノ負擔ニ偏重ヲ來スノ弊ヲ避クルニ勉メタリ故ニ營業稅ノ新設ニ對シテハ地方財源ヲ補充スルノ目的ヲ以テ菓子稅、船車稅等ヲ廢止シ地租ヲ増徴スルニ際シテハ負擔ヲシテ衡平ナラシムルカ爲メ地價ノ修正ヲ爲ス等極力之カ手段ヲ講シタリ

此ノ如ク増稅ヲ決行スルト共ニ政府ハ印紙稅法ヲ改正シ又ハ沖繩縣ノ土地整理ニ著手スル等常

ニ稅務ノ整理統一ニ注意シタリ而シテ海關稅ニ在リテハ關稅法ヲ制定シ關稅定率法ヲ施行スル等大ニ關稅制度ノ更新ヲ計リ以テ通商條約改正ノ效果ヲシテ徒爾ニ歸セサラシメンコトヲ勉メタリ

明治二十九年於テ以降公債ノ募集スヘキ額ハ明治二十九年以前ニ於テ決定セラレタル第一期線鐵道公債ヲ除キ貳億餘圓ノ巨額ニ達シタリ是レ皆戦後經營ノ爲メ要スルモノニシテ已ムヲ得サルニ出テタリト雖モ其使途ノ如何ニ依リテハ國家ノ前途ニ對シ累ヲ殘スコト尠カラサルヘキヲ以テ政府ハ之ヲ以テ陸海軍第一期擴張費ノ一部ニ充テタル外ハ運輸交通機關ノ改良擴張等悉ク殖産上ノ費途ニ使用セリ而シテ公債ノ募集ニ至リテモ内外市場ノ景況ニ應シ成ルヘク經濟社會ニ變動ヲ來サ、ルコトニ注意セリ

債金ハ戦勝ノ結果ニ依リ得タルモノナルニヨリ之カ使途ニ付テハ最モ慎重ナル注意ヲ加ヘ帝室御料ニ編入シ陸海軍擴張費、製鐵所創立費ニ使用シ、軍艦水雷艇補充基金、災害準備基金、竝教育基金ニ充用スル等國民ノ紀念ヲ表彰シ又ハ國家永久ノ利益ト爲ルヘキモノニ使用シタリ而シテ債金ノ運用回收ニ至リテハ常ニ金融市場ノ狀況ニ顧ミ適宜之カ處置ヲ爲シタリ

財政ノ基礎ヲ鞏固ナラシメント欲セハ民力ノ培養ハ固ヨリ之ヲ勉メサルヘカラサルヲ以テ政府ハ戦後經營ヲ畫策セルニ當リ國防ノ完成ヲ期スルト共ニ運輸交通機關ノ改良擴張等苟クモ産業ノ發達ニ資スルモノハ皆其遺算ナカラシムルコトヲ期シタリ而シテ金融機關ノ整否ハ産業ノ消長ニ影響ヲ及ホスコト最モ大ナルモノアルヲ以テ政府ハ日本銀行ノ兌換券保證準備發行制限額ヲ擴張シ以テ金融市場ノ需要ヲ充タシ日本勸業銀行及農工銀行ヲ設立シ以テ農工業ノ發達ヲ助ケ其

他臺灣ノ財政並經濟ノ整理發達ヲ期スルカ爲メ臺灣銀行ヲ設立シ北海道ノ拓殖事業ヲ補助スルカ爲メ北海道拓殖銀行ヲ設立スル等大ニ金融機關ノ整備ヲ爲シタリ
戰後國運ノ隆興ニ伴ヒ商業ハ益々發達シ外國貿易ハ漸次盛運ニ向ハントスルニ際シ銀貨ノ下落ハ我貨幣制度ノ基礎ニ動搖ヲ與フルコト甚シク爲メニ商業ハ擾亂セラレ外國貿易ハ阻碍セラレントスルノ狀況ヲ現ハシタルヲ以テ政府ハ爰ニ貨幣制度ヲ改正シ金貨本位ヲ採用スルニアラサレハ戰後經營ヲシテ其效ヲ完カラシムルコト能ハサルヲ認メ幣制改革ヲ企圖シ遂ニ之ヲ決行スルニ至レリ
凡ソ此數者ハ皆戰後經營ノ爲メ施爲セラレ相須テ戰後ノ財政經畫ヲ爲スモノナルカ故ニ此ニ共大要ヲ敍シ以テ其由來スル所ヲ明ニス

第一篇 豫算及特別會計

第一章 明治二十九年年度豫算

第一 歲入歲出

明治二十九年年度總豫算ハ歲入經常部壹億七百五拾五萬九千九百六拾九圓九拾七錢參厘歲入臨時部八千九百六拾參萬七千七百四拾貳圓九錢九厘ニシテ歲入總計壹億九千七百拾九萬七千七百拾貳圓七錢貳厘歲出經常部壹億四百貳拾四萬六千六百貳拾壹圓拾壹錢六厘歲出臨時部八千九百拾七萬九千九拾五圓四拾參錢六厘ニシテ歲出總計壹億九千參百四拾貳萬五千七百拾六圓五拾五錢貳厘ナリ故ニ歲入歲出相對照スルトキハ參百七拾七萬九千九百九拾五圓五拾貳錢ハ減稅其他ノ事由ニヨリ歲入豫算中減少(註)歲入超過額參百七拾七萬九千九百九拾五圓五拾貳錢ハ減稅其他ノ事由ニヨリ歲入豫算中減少

スヘキ額ニ相當スルヲ以テ之ヲ差引クトキハ明治二十九年年度豫算ハ歲入歲出過不足ナシ
本文豫算ノ外第十議會ニ豫算追加トシテ提出セラレ成立シタル明治二十九年年度豫算追加額若干圓(歲入百參拾五萬七千七百六拾圓貳拾貳錢七厘歲出千參萬貳千參百六拾參圓參拾四錢參厘ナリ但差引歲入不足額ハ前年度繰入金ヲ以テ補填スアリト雖モ多クハ一時限リノ費途ニシテ一般ノ財政經畫ニ關聯セサルヲ以テ之ヲ省ク

明治二十九年年度歲入ハ通常歲入、登錄稅收入、臺灣歲入、威海衛守備費償却金、事業公債募集金、債金繰入、前年度剩餘金繰入及臨時軍事費資金繰入ヨリ成ル共内譯左ノ如シ

一金壹億九千七百拾九萬七千七百拾貳圓七錢貳厘 歲 入 總 計

金壹億七拾九萬參千四百壹圓九拾貳錢七厘	通 常 歲 入
金六百四拾貳萬參千九百九拾參圓五拾貳錢五厘	登 錄 稅 收 入
金六百六拾八萬貳千貳百參拾六圓六拾錢參厘	臺 灣 歲 入
金七拾五萬圓	威海衛守備費償却金
金八百參拾七萬四千五百圓	事業公債募集金
金四千九萬參千參百八拾八圓六拾七錢六厘	債 金 繰 入
金千七百四拾七萬七千參百參拾貳圓五拾七錢八厘	前年度剩餘金繰入
金千六百六拾萬貳千八百五拾八圓七拾六錢參厘	臨時軍事費資金繰入

(註)通常歳入ハ從來ノ法律規則等ニ依リ收入スルモノ、登録稅收入ハ明治二十九年財政經畫ノ一トシテ制定セラレタル登録稅法ニ依リ收入スルモノ、威海衛守備費償却金ハ下ノ關媾和條約別約ニ依リ威海衛占領期間清國ヨリ毎年仕拂フヘキ五拾萬兩ヲ我貨幣ニ換算シタルモノ、償金繰入ハ下ノ關媾和條約及奉天半島還付ニ關スル條約ニ依リ清國ヨリ領收スル賠償金ヲ一般會計ニ繰入スヘキモノ、臨時軍事費資金繰入ハ明治二十九年法律第十號ニ依リ臨時軍事費特別會計ノ殘金ヲ一般會計ニ繰入スヘキモノナリ

明治二十九年歳出ハ經常歳出、通常財源支辨臨時歳出、事業公債支辨臨時歳出、償金支辨臨時歳出、臺灣及威海衛關係歳出及臨時軍事費ヨリ成ル其内譯左ノ如シ

明治二十九年歳出内譯

一金壹億九千參百四拾貳萬五千七百拾六圓五拾五錢貳厘	歳出總計
内	
金九千六拾萬七千四百參拾四圓七拾壹錢六厘	通常歳出
金千九百四拾九萬五千五百七拾參圓貳拾錢四厘	通常財源支(臺灣及威海衛關係)辨臨時歳出(係ノ分ハ除ク)
金八百貳拾壹萬四千四百拾五圓參拾七錢九厘	事業公債支辨臨時歳出
金四千貳萬貳千六百貳拾參圓六拾七錢六厘	償金支辨臨時歳出
金千八百四拾八萬九千八百拾圓八拾壹錢四厘	臺灣及威海衛關係歳出
内	
金五百九拾貳萬八千七百五圓貳拾貳錢參厘	民政費

金七百七拾壹萬四百八拾壹圓拾七錢七厘	軍備費
金四百八拾五萬六百貳拾四圓四拾壹錢四厘	臺灣臨時費
金千六百六拾萬貳千八百五拾八圓七拾六錢參厘	臨時軍事費

(註)事業公債及償金支辨臨時歳出ト前表公債募集金及償金繰入額ト符合セサルハ公債支辨ニ係ル公債募集初年ノ利子ヲ經常歳入ニ編入セルト償金支辨臨時歳出中議會ニ於テ政府提出ノ原案ニ削減ヲ加ヘタルモノアルトニ由ル

第二 歳出増加ノ原因

明治二十九年歳算ヲ以テ前數箇年度ノ豫算ニ比較スルトキハ壹億餘萬圓ノ増加ナリ是レ全ク國勢ノ一變ニ伴ヒ諸般急要ノ施設ヲ要シタルカ爲メニ外ナラス而シテ明治二十九年歳算ハ其初期ニ當ルヲ以テ所謂戦後經營ニ關スル施設ハ皆同年度豫算ニ其根底ヲ据エサルモノナク同年度豫算ハ實ニ我財政上ニ一局面ヲ開キタルモノナリ

明治二十七年事件ノ結果帝國版圖ノ増大ニ伴ヒ之カ警備ノ實ヲ完カラシメンカ爲メ軍備ノ擴張ヲ要シ新領土統治ノ續ヲ舉ケンカ爲メ各般ノ設備ヲ要スル等國費ノ増加ヲ來スハ固ヨリ已ムヲ得スト雖モ抑戦後經營ハ財政經濟兩ナカラ相須テ進ムニ非サレハ永遠ニ其效果ヲ收ムル能ハサルニヨリ當時ノ大藏大臣子爵渡邊國武ハ戦後ノ財政ヲ畫策スルニ當リ常ニ此點ニ重ヲ置キ國防ノ完成ヲ期スルト共ニ國力ノ培養ニ努メタリ故ニ明治二十九年歳算編成ニ際シテモ陸海軍擴張ニ要スル經費ヲ認ムルト共ニ運輸交通機關ノ改良等苟クモ産業ノ消長ニ關係ヲ有スル經費ハ成ルヘク之カ支出ニ吝ナラサルコトヲ力メタリ今明治二十九年歳算ニ於テ政府ノ各方面ニ於テ

著手セラレタル事業中其重要ナルモノニ就キ左ニ其經畫ノ大體ヲ記シ以テ經費増加ノ原因ヲ明ニス

一 陸海軍備ノ擴張

陸海軍現在ノ組織ハ帝國現時ノ狀勢ニ適應セサルヲ以テ之カ擴張ノ經畫ヲ定メ明治二十九年

度ニ於テ之ニ著手スルコトナレリ
陸軍擴張大體ノ方針ハ師團ノ増設砲臺ノ建築等ニシテ其軍隊ノ新設増設及編制改正並之ト相
伴フ官衙學校等ノ増設若クハ組織改正ノ爲ニハ經常費ノ増加ヲ要シ明治二十九年度ニ於テハ
貳百六拾餘萬圓ニ過キスト雖モ擴張事業ノ進行スルニ隨ヒ漸次増加シテ一箇年千四百餘萬圓
ヲ要スルノ計算ナリ其砲臺建築兵營建築並兵器陣具等ノ初度調辨兵器製造砲兵工廠工場擴張
及臨時建築部ニ係ルモノハ臨時ノ事業ニ屬シ臨時建築部費ヲ除キ其他ハ悉ク明治二十九年
以降ノ繼續費ニシテ砲臺建築費ハ鳴門海峽吳藝豫海峽及佐世保ニ砲臺ヲ建築スルノ目的ヲ以
テ明治三十四年度ニ涉リ營繕及初度調辨費兵器製造費ハ同三十二年度ニ涉リ砲兵工廠工場擴
張費ハ同三十二年度ニ涉ルノ繼續費ナリ而シテ臨時建築部費ハ之ハ繼續費トセスト雖モ明治二
十九年度以降同三十二年度ニ至ル四箇年間ノ豫定ヲ以テ經畫セラレタルモノナリ左ニ其各事
業ニ要スル擴張費ノ總額ヲ掲ク

陸軍擴張臨時費

- 一金千四百七萬千八百九拾參圓八拾九錢五厘 砲臺建築費
- 一金千七百參拾參萬四千八百九拾圓九拾貳錢六厘 營繕及初度調辨費

- 一金八百四拾八萬六千七百六拾六圓六拾錢七厘 兵器製造費
- 一金貳百九拾四萬九千七百七圓七拾四錢壹厘 砲兵工廠工場擴張費
- 一金四拾七萬九千五百七拾五圓六拾四錢 臨時建築部費

計金四千參百參拾貳萬貳千貳百參拾四圓八拾錢九厘

其明治二十九年度ニ於テ要スル陸軍擴張費ハ左ノ如シ

明治二十九年陸軍擴張費豫算

- 一金貳百六拾六萬六千四百四拾貳圓六拾六錢 經常費
- 一金千七百貳拾五萬五百五拾貳圓拾五錢五厘 臨時費

計金千九百九拾壹萬六千五百九拾四圓八拾壹錢五厘

海軍擴張經畫ノ主眼ハ軍艦水雷艇ノ勢力ヲ増加スルニ在リテ之ニ附隨シ各鎮守府ノ規模ヲ擴
張シ軍港要港其他ノ要所ニ水雷隊攻撃部及水雷隊敷設部ヲ配置シ又沿岸要所ニ望樓ヲ増設ス
ルノ方針ニシテ之カ爲メ經常費ニ増加スル所ハ明治二十九年度ニ於テ七拾七萬餘圓ニ過キス
ト雖モ擴張經畫ノ完成スルニ隨ヒ漸次増加シテ一箇年七百餘萬圓ヲ要スルノ計算ナリ而シテ
海軍擴張臨時費ハ明治二十九年度以降明治三十五年度ニ至ル繼續費ナリ左ニ其各事業ニ要ス
ル經費總額ヲ掲ク

海軍擴張臨時費

- 一金四千七百拾五萬四千五百七拾六圓拾六錢 造船費
- 一金參千參百七拾五萬千六百六拾貳圓八拾錢 兵費

一金千參百八拾七萬五百六圓八拾八錢七厘
計金九千四百七拾七萬六千貳百四拾五圓八拾四錢七厘
其明治二十九年年度ニ於テ要スル海軍擴張費ハ左ノ如シ

明治二十九年年度海軍擴張費豫算

一金七拾七萬貳千六拾四圓七拾七錢四厘
一金貳千貳百拾九萬貳千七百九圓五拾錢壹厘

建築費
經常費
臨時費

計金貳千貳百九拾六萬四千七百七拾四圓貳拾七錢五厘

陸海軍備ノ擴張ハ其臨時費ノミニテ壹億參千八百餘萬圓ノ巨額ニ達シ之ニ加フルニ他年其經常費ハ貳千百餘萬圓ノ増加ヲ來スヘキ計算ナルヲ以テ其規模ノ大ナル其費額ノ多キ戰後經營中最モ重要ナル事項ノ一タリシナリ

二 京都帝國大學ノ創立

國運ノ伸張ニ伴ヒ學術技藝ノ發達進步ヲ計ランカ爲メ益最高教育ノ府タル大學ノ必要ヲ感スト雖モ現在唯一ノ帝國大學ハ此等希望ヲ滿スニ十分ナラサルニヨリ更ニ關西地方ニ一大學ヲ創立スルノ經畫ヲ以テ明治二十九年年度以降同三十一年年度ニ至ル繼續事業トシ明治二十九年年度ニ於テ之ニ著手セリ即チ其創立費總額貳拾萬圓ニシテ其明治二十九年年度ニ於テ要スル所ハ貳萬圓ナリ

三 河川ノ修築

河川法ニ依リ澱川及筑後川ノ改修ヲ要シ繼續事業トシテ明治二十九年年度ニ於テ之ニ著手セリ

即チ其修築費總額千五拾七萬八千圓ニシテ其明治二十九年年度ニ於テ要スル所ハ百拾五萬千參百圓ナリ

大井川阿武隈川信濃川天龍川及富士川ハ從來或ハ局所工事ヲ施行シ或ハ修築工事ノ一部ヲ施行セリト雖モ洪水ニ際シ尙ホ危險ノ虞尠カラサルヲ以テ更ニ完全ナル修築工事ヲ施行センカ爲メ繼續事業トシテ明治二十九年年度ニ於テ之ニ著手セリ即チ其修築費總額百七拾八萬五千九百七拾貳圓六拾八錢五厘ニシテ其明治二十九年年度ニ於テ要スル所ハ五拾參萬五千圓ナリ

四 北海道ノ拓殖

北海道ノ拓殖事業ヲ資クルカ爲メ北海道ノ中央部ヲ貫通スル所ノ鐵道ヲ敷設シ道路及排水路ヲ開鑿シ堤防ヲ築造スルノ經畫ヲ定メ明治二十九年年度ニ於テ之ニ著手セリ北海道鐵道ハ北海道炭礦鐵道線空知太ノ終點ニ起リ雨龍ノ原野ヲ經旭川ニ達スルノ經畫ニシテ其延長線路三十五哩餘其工費總額百拾七萬八千參百拾壹圓ヲ以テ明治二十九年年度以降二箇年度間ノ繼續事業トシテ企圖セラレ其明治二十九年年度ニ於テ要スル所ハ九拾萬參千貳百圓四拾四錢九厘ナリ而シテ其道路及排水路ノ開鑿堤防築造ノ爲メ明治二十九年年度ニ於テ要スル經費ハ貳拾壹萬八千百四拾貳圓參拾四錢參厘ナリ

五 鐵道ノ改良及電話交換ノ擴張

官設鐵道ノ運輸事業ハ逐年増進シ現在ノ線路ト車輛トヲ以テシテハ遂ニ其需求ニ應スルコト能ハス加フルニ一旦非常ノ事變ニ際會スルトキハ一般公衆ノ運輸ハ殆ント之ヲ停止セサルヲ得サルノ實況ナルニヨリ東海道幹線ノ全部ヲ復線ト爲シ同線及信越線ニ關スル停車場ニ必要

ナル改築ヲ施シ其他車輛ヲ増加シ以テ旅客貨物ノ運輸上ニ満足ヲ與フルノ目的ヲ以テ明治二十九年年度以降同三十五年年度ニ至リ繼續事業トシ明治二十九年年度ニ於テ之ニ著手セリ即チ其改良費總額貳千六百五拾五萬參千圓ニシテ其明治二十九年年度ニ於テ要スル所ハ四百五拾萬圓ナリ

(註本文鐵道改良費ノ外明治二十六年年度及明治二十八年年度ニ於テ著手セラレタル第一期線鐵道建築費總額五千九百九拾貳萬千六百六拾參圓ナリ

電話交換事業ハ明治二十三年年度ニ於テ東京横濱ノ兩市ニ同二十五年年度ニ於テ大阪神戸ノ兩市ニ開設セシ以來其加入ヲ望ム者逐年増加スト雖モ現在ノ設備ヲ以テシテハ其需求ニ應スルコト能ハス且前記四市ノ外各地方ニ於テ之カ開設ヲ熱望スルモノ甚タ多キニヨリ其最モ急施ヲ要スル京都外三十五箇所ニ之ヲ開設シ其他既設電話交換ニ於ケル從來ノ單線式ヲ復線式ニ改ムル等電話交換事業ノ擴張ヲ經畫シ明治二十九年年度以降同三十五年年度ニ至ル繼續事業トシ明治二十九年年度ニ於テ之ニ著手セリ即チ其擴張費總額千貳百八拾萬貳千六百六拾四圓九拾參錢壹厘ニシテ其明治二十九年年度ニ於テ要スル所ハ六百六拾七萬七千九百六拾四圓九拾參錢壹厘ニ鐵道改良及電話交換擴張事業ハ陸海軍備擴張ニ次キ戰後經營中最モ重要ナル事項ノ一タリシナリ

六 農事試驗場及蠶業講習所ノ設置

農事試驗場ハ從來其本場ヲ東京ニ支場ヲ大阪宮城石川廣島德島及熊本ノ各地方ニ設置シ専ラ農産ノ改良増殖ニ從事セリト雖モ産業ノ隆興ニ伴ヒ益々農事ヲ鼓舞獎勵スルノ必要アルヲ以テ

更ニ山陰奥羽東海三地方ニ支場ヲ設置スルノ經畫ヲ定メ明治二十九年年度ニ於テ其經費貳萬四千八百六拾壹圓七拾四錢八厘ヲ豫算セリ

本邦ノ蠶絲ハ逐年増殖シ外國貿易品中主要ノ位置ヲ占ムルモノナリト雖モ養蠶ノ術ニ至リテハ尙ホ多クハ舊慣ニ泥ミ學理ヲ應用スルモノ甚タ少ク未タ幼稚ノ域ニ在ルヲ免レス依テ其改良ヲ企圖スルカ爲メ斯道ノ技術者ヲ養成シ一般養蠶家ノ指導者タラシムルト共ニ蠶業ニ關スル諸般ノ試驗ヲ實施シ以テ蠶業ノ前途ニ對シ便宜ヲ與フルノ目的ヲ以テ蠶業講習所設置ノ經畫ヲ定メ明治二十九年年度ニ於テ其經費壹萬四千八百七拾壹圓六拾錢ヲ豫算セリ

七 外國貿易ノ擴張及貿易品陳列館ノ設置

本邦製産品ノ販路擴張ノ爲メ海外ニ商況視察員ヲ派遣シ實業練習生ヲ渡航セシメ其他商品見本ヲ發送スル等外國貿易擴張ノ目的ヲ以テ明治二十九年年度以降毎年六萬圓ヲ支出スルノ豫定ヲ以テ明治二十九年年度ニ於テ之ニ著手セリ

外國貿易品ノ標本ヲ蒐集シ内外商ノ觀覽ニ供シ以テ其取捨撰擇ノ參考ニ資スルハ外國貿易ノ發達ヲ企圖スル上ニ於テ極メテ必要ナルヲ以テ貿易品陳列館設置ノ爲メ明治二十九年年度ニ於テ壹萬九千六百九拾貳圓八拾五錢ヲ豫算セリ

八 製鐵所ノ創立

近年鐵材ノ需要頓ニ増加シタルノミナラス軍備擴張ノ經畫ヲ實行スルト共ニ軍艦兵器ノ主要材料タル鐵材ハ一朝有事ノ日ニ於テハ之ヲ内地ノ供給ニ須タサル可ラサルヲ以テ製鐵所創立ノ經畫ヲ定メ明治二十九年年度以降同三十二年年度ニ至ル繼續事業トシテ明治二十九年年度ニ於テ

之ニ著手セリ即チ其創立費總額四百九萬五千七百九拾參圓四拾錢ニシテ其明治二十九年
於テ要スル所ハ五拾七萬九千七百六拾貳圓貳錢ナリ

製鐵所創立事業モ亦戰後經營中重要ナル事項ノ一タリシナリ

以上ニ列記シタルモノハ明治二十九年於テ企圖セラレタル事業中其重ナルモノトス就中陸
海軍擴張鐵道電話改良擴張製鐵所創立ハ特ニ戰後經費ノ爲メ經畫セラレタルモノニシテ經費増
加ノ主因ヲ爲スモノナリ

右ノ外明治二十七八年事件直接ノ結果トシテ經費ノ増加ヲ來シタルモノハ臺灣ノ經營並威海衛
ノ駐兵ニ關スル諸費軍事公債元利軍人恩給及賞勳年金等ノ増加ナリ

臨時軍事費特別會計ヲ明治二十九年三月三十一日限り閉鎖シテ其殘務ヲ一般會計ノ整理ニ移シ
タルカ爲メ明治二十九年總豫算ニ於テ千六百餘萬圓ノ増加ヲ見ルト雖モ之カ財源ハ臨時軍事
費特別會計資金ノ繰入金ヲ以テ之ニ充テタルカ爲メ臨時軍事費ノ増加ハ歲入歲出相償フモノト
ス

第三 歲入補填ノ經畫

明治二十九年豫算ニ於ケル歲出増加ノ原因ハ前ニ述フル所ノ如シ抑明治二十七八年事件以來
國運ノ發達ハ一層甚シク國家ノ施設スヘキ事業ハ曩日ニ比シ益々多キヲ加ヘタルカ爲メ明治二十
九年度豫算ニ於テハ此等普通行政事務ノ擴張ニ伴フ經費ノ増加モ頗ル多カリシト雖モ此等ハ通
常歲入ヲ以テ支辨スルヲ得タリ然レトモ戰後經營ノ爲メ特ニ經畫セラレタル陸海軍擴張鐵道電
話改良擴張及製鐵所創立ノ如キ又明治二十七八年事件直接ノ結果タル臺灣並威海衛ニ關スル諸

費軍事公債元利軍人恩給及賞勳年金ノ増加ノ如キハ明治二十九年豫算ニ於テ歲出増加ノ特種
ノ原因ヲ爲スモノニシテ歲入不足ヲ來シタル原因亦全ク此ニ存ス

明治二十九年通常歲入壹億七拾餘萬圓ヲ以テ其歲出總額壹億九千參百四拾餘萬圓ニ對照スル
トキハ九千貳百六拾餘萬圓ノ歲入不足ヲ生ス此不足額中臨時軍事費資金繰入額臺灣歲入及威海
衛守備費償却金ヲ以テ補足スヘキ額合計貳千四百餘萬圓ヲ差引キ殘額約六千八百六拾萬圓ハ全
ク歲入不足トナルノ計算ニシテ此不足額ニ對シテハ何處ニカ補填ノ途ヲ求メサル可ラス

軍備擴張經常費軍事公債元利軍人恩給賞勳年金及臺灣並威海衛ニ關スル諸費ハ概ネ經常ノ費途
ニ屬スルヲ以テ之カ財源トシテハ永久ノモノヲ求メサルヘカラス之ニ反シテ陸海軍擴張臨時費
鐵道敷設改良電話交換擴張費及製鐵所創立費ハ臨時ノ費途ニ屬スルヲ以テ之カ支辨ノ途ヲ臨
時ノ財源ニ仰クモ固ヨリ不可ナシ故ニ經常費ノ財源ニ對シテハ増稅ノ方法ニ據リ臨時費ノ財源
ニ對シテハ公債ヲ募集シ償金ヲ繰入レ以テ歲入ノ不足額ヲ補填スルノ經畫ヲ定メタリ

軍備擴張經常費軍事公債元利金軍人恩給及臺灣並威海衛ニ關スル諸費ノ明治二十九年於テ
要スル額左ノ如シ

- 一金參百四拾參萬八千五百六圓
- 一金五百五拾壹萬四百拾六圓
- 一金參拾五萬參千八百四拾四圓
- 一金千五百萬七千五百七拾四圓
- 計金貳千參拾六萬參百四拾圓

陸海軍備擴張經常費
軍事公債利子
軍人恩給

臺灣及威海衛(臺灣歲入及威海衛
衛關係支出)守備費償却金支辨
(當ル分ヲ差引ク)

(註)賞勳年金九拾四萬餘圓ハ全ク明治二十七八年事件ノ結果ニ依ルモノニシテ當初ハ増税ニ依リ支辨スル經畫ナリシト雖モ豫算決定ニ至リ通常歳入ニ餘裕ヲ生シ之ヲ支辨スルヲ得タルヲ以テ本計算ニ之ヲ省ク

右ハ明治二十九年年度ニ於テ要スル額ナリ此内臺灣ニ關スル諸費ノ如キハ當時草創ノ際ニ於テ將來ノ經費ヲ豫定スルハ頗ル難事ニ屬スルカ故ニ之カ經畫ハ後日ノ詮議ニ讓リ暫ク之ヲ省クモノトスルモ軍備擴張經常費ハ擴張事業ノ進行スルニ從ヒ漸次増加シ一箇年貳千百餘萬圓ニ達シ又軍事公債元利ハ漸次元金償還ノ時期ニ到達スヘキヲ以テ是亦増加シ一箇年八百五拾萬圓ヲ要スル計算ナルヲ以テ補填ヲ要スル經費ノ總額ハ約參千萬圓ニ達スルノ計算ナリシナリ

(註)本文經費ノ外本年度ニ於テ決行セラレタル事業公債ノ利子四百五拾萬圓(事業公債總額壹億參千五百萬圓ニ對スル利子ハ六百七拾五萬圓ナルモ内鐵道電話ノ改良擴張ニ要スル公債ノ利子貳百貳拾萬圓ニ對シテ其餘萬圓ハ其事業ノ收益ヲ以テ支辨スルニ足ルモノト認メ之ヲ差引キタル殘高ナリ)増税徵收費約百五拾萬圓合計六百萬圓ハ他年經常費ノ増加ヲ來スヘキモノナリト雖モ此等ハ歳入自然ノ増加額ヲ以テ支辨スルヲ得ル見込ナリ

右ハ純然タル經常費ノ増加ニ屬スルヲ以テ其財源ハ之ヲ租税ニ求ムルコトニ決シ新ニ登録稅營業稅ヲ賦課シ葉煙草專賣ヲ開始シ及酒造稅ノ稅率ヲ増加スルノ經畫ヲ定メ其法案ヲ第九議會ニ提出シ其協贊ヲ得テ之ヲ決行スルニ至レリ此等諸稅ニ依リ得ル所ノ歳入ハ一箇年約參千四百萬圓ノ豫定ナリト雖モ同時ニ廢稅ヲ斷行シタルモノアリシカ爲メ減稅額ヲ差引貳千六百餘萬圓ノ豫定ナリシナリ

註當時ノ經畫ニ依レハ増稅收入左ノ如シ

一金六百四拾貳萬參千九百九拾參圓	登 錄 稅
一金七百五拾五萬千參百七拾七圓	營 業 稅
一金九百貳拾八萬四千五百四拾四圓	酒 稅
一金千參拾壹萬六千參百七拾九圓	葉 煙 草 專 賣 收 入
計 金 參 千 參 百 五 拾 七 萬 六 千 貳 百 九 拾 參 圓	
一金七百五拾五萬貳千參百九拾七圓	廢 稅 ノ 爲 メ 減
差 引	
金 貳 千 六 百 貳 萬 參 千 八 百 九 拾 六 圓	純 收 入

此ノ如ク増稅ノコトハ決行セラレタリト雖モ明治二十九年年度ニ於テ直ニ實行シ得ヘキモノハ登録稅ノミニシテ其他ノ諸稅ハ次年度ニ至リ初メテ實施セラレ明治三十一年度ニ至ラサレハ全收入口得ル能ハサリシニヨリ明治二十九年年度歳入ノ不足額ハ登録稅ノ外尙ホ前年度剩餘金ヲ以テ補填スルコトハナレリ其概計左ノ如シ

一金貳千參拾六萬圓	二十七八年事件ノ
右ニ對スル財源	爲メ經常費增加ノ
一金貳百七拾貳萬圓	登録稅收入(減稅ニ當ル分)
一金千七百四拾七萬圓	前年度剩餘金繰入
計 金 貳 千 拾 九 萬 圓	差 引

金拾七萬圓

財源不足

註財源不足額拾七萬圓ハ事業公債初年利子約拾七萬圓ヲ事業公債募集金ヲ以テ仕拂フコト、ナシタルカ爲メ通常歳入ニ餘裕ヲ生スルニヨリ全體ノ歳計上ニ於テハ不足ヲ生セサル計算ナリ

陸海軍備擴張製鐵所創立鐵道敷設改良及電話交換擴張ハ戰後經營ノ爲メ特ニ經畫セラレタルモノニシテ其費額ハ總計壹億八千餘萬圓ニ上リ到底尋常ノ手段ヲ以テシテハ之カ成功ヲ期スヘカラサルニヨリ清國債金ヲ繰入シ及公債ヲ募集シ以テ其財源ニ充テ明治二十九年年度以降同三十五年度ニ至ル七箇年間に之ヲ完成セシムルノ經畫ヲ定メタリ而シテ經常歳入ノ不足ヲ補フ爲メ葉煙草專賣ヲ開始スルコト、爲シタルカ爲メ之ニ要スル起業費千貳百萬圓モ併セテ公債ヲ以テ支辨スルコトニ定メタリ其計算左ノ如シ

- 陸軍擴張臨時費 一金四千參百參拾貳萬貳千貳百參拾四圓
 - 海軍擴張臨時費 一金九千四百七拾七萬六千貳百四拾五圓
 - 製鐵所創立費 一金四百九萬五千七百九拾參圓
 - 官設既成鐵道改良費 一金貳千六百五拾五萬參千圓
 - 電話交換擴張費 一金千貳百八拾萬貳千六百圓
 - 北海道鐵道敷設費 一金百拾七萬八千參百參拾壹圓
 - 專賣起業費 一金千貳百貳拾壹萬參千五百五拾圓
- 計金壹億九千四百九拾四萬千貳百五拾九圓

- 一金四千貳萬貳千六百貳拾參圓
 - 一金壹億參千參百七拾貳萬千九百貳拾圓
 - 計金壹億七千參百七拾四萬四千五百四拾參圓
- 差引

金貳千百拾九萬六千七百拾六圓

財源不足

(註財源不足額貳千百拾九萬六千七百拾六圓ハ一般歳入ヲ以テ支辨ノ見込ナリ)

公債ハ總額壹億參千五百萬圓ヲ募集シ内百貳拾七萬八千八拾圓ハ電話鐵道ニ係ル公債初年利子ノ仕拂ニ充ツル經畫ナリシニヨリ本文公債募集金ハ其募集總額ヨリ之ヲ差引タル額ニ相當スルモノナリ

陸海軍擴張臨時費製鐵所創立費等ノ明治二十九年度ニ要スル額ハ左ノ如シ

- 陸軍擴張臨時費 一金千七百貳拾五萬五百五拾貳圓
- 海軍擴張臨時費 一金貳千貳百拾九萬貳千七百九圓
- 製鐵所創立費 一金五拾七萬九千七百六拾貳圓
- 官設既成鐵道改良費 一金四百五拾萬圓
- 電話交換擴張費 一金百六拾七萬七千九百六拾四圓
- 北海道鐵道敷設費 一金九拾萬參千貳百圓
- 專賣起業費 一金百拾參萬貳百五拾圓
- 計金四千八百貳拾參萬四千參拾七圓

右ノ内陸海軍擴張臨時費及製鐵所創立費ハ償金ヲ以テ其他ハ公債募集金ヲ以テ支辨ノ經畫ナリシナリ
此ノ如クニシテ明治二十九年年度歳入不足額六千八百六拾萬圓ハ補填セラレタリ之ヲ約言スレハ經常費ノ財源ハ増稅ノ方法ニ依リ臨時費ノ財源ハ償金ヲ繰入シ及公債ヲ募集シ以テ之ヲ補填スト曰フニ歸ス

第二章 明治三十年年度豫算

第一 歳入歳出

明治三十年年度總豫算ハ歳入經常部壹億貳千四百拾貳萬八千五百七拾圓四拾八錢六厘歳入臨時部壹億貳千八百九萬六千九拾九圓七拾五錢八厘ニシテ歳入總計貳億四千九百五拾貳萬四千六百七拾圓貳拾四錢四厘歳出經常部壹億千貳百參拾壹萬七百九拾八圓參拾四錢參厘歳出臨時部壹億參千七百貳拾參萬六千四百八拾七圓六拾貳錢ニシテ歳出總計貳億四千九百五拾四萬七千貳百八拾五圓九拾六錢參厘ナリ

明治三十年年度歳入ハ通常歳入、威海衛守備費償却金、事業公債募集金、償金繰入及前年度剩餘金繰入ヨリ成ル其内譯左ノ如シ

一金貳億四千九百五拾貳萬四千六百七拾圓貳拾四錢四厘	歳入	總計
内	通常	歳入
金壹億貳千六百拾貳萬八百六拾參圓四拾四錢九厘	通常	歳入

金七拾五萬圓	威海衛守備費償却金
金六千六百參拾貳萬九千五百圓	事業公債募集金
金五千五百拾萬九千貳拾圓五拾五錢九厘	償金繰入
金千八拾壹萬五千八百八拾六圓貳拾參錢六厘	前年度剩餘金繰入

(註)通常歳入中ニハ第九議會ニ於テ成立シ施行セラレタル營業稅、登錄稅及葉煙草專賣收入ヲ包含ス

明治三十年年度歳出ハ經常歳出、通常財源支辨、臨時歳出、公債支辨、臨時歳出、償金支辨、臨時歳出、臺灣及威海衛關係歳出及臨時軍事費ヨリ成ル其内譯左ノ如シ

一金貳億四千九百五拾四萬七千貳百八拾五圓九拾六錢參厘	歳出	總計
内	經常	歳出
金壹億四百貳拾參萬四千百拾壹圓六拾七錢六厘	經常	歳出
金貳千五百拾八萬五千四百五拾壹圓七錢壹厘	通常財源支辨	臨時歳出
金六千六百參拾貳萬九千四百七拾七圓六拾參錢五厘	公債支辨	臨時歳出
金參千六百四拾五萬千六百九拾八圓六拾四錢九厘	償金支辨	臨時歳出
金千五百五拾四萬四千四百七拾參圓六拾貳錢六厘	臺灣及威海衛關係	歳出
内	臺灣	軍備費
金八百八萬七千八百五拾九圓七拾貳錢五厘	臺灣	軍備費

金五百九拾五萬九千四拾八圓參拾壹錢七厘
金百四拾九萬七千五百六拾五圓五拾八錢四厘
金六百八拾萬貳千七拾參圓參拾錢六厘

臺灣總督府特別會計補足費
威海衛駐兵費
臨時軍事費

註價金繰入額ト償金支辨臨時歲出額ト差引繰入超過額千四百五萬七千四百貳拾壹圓九拾壹錢

ハ臺灣總督府特別會計補充金臨時軍事費及陸軍運輸通信部費ニ使用シタルナリ

明治二十九年九月正義任ヲ大藏大臣ノ職ニ承ケタリ此時ニ方リ戰後經營ハ益々其歩ヲ進メ其財政經畫モ愈々慎重ヲ要スルニ至リ幣制改革及關稅定率法ノ制定等財政上ノ重要事項ニシテ明治三十年年度ニ於テ創定セラレタルモノ尠シトセス而シテ直接豫算ニ關係ヲ有スルモノニ在リテハ所謂第二期軍備擴張北海道鐵道第一期線敷設及臺灣總督府特別會計設置ノ如キ孰レモ重要ノ事項タリシナリ

第二期軍備擴張ハ第一期軍備擴張ト相須テ戰後經營ニ伴フ國防事業ノ完成ヲ期スルカ爲メ畫策セラレ前年度來當局者間ニ於テ提唱セラレタルモノナリト雖モ其財政經畫ノ未タ熟セサルモノアリシカ爲メ明治三十年年度豫算ニ於テ始メテ發表セラレタルモノナリ第二期軍備擴張ニ要スル經費ノ總額ハ陸海軍ヲ併セテ壹億五千萬圓ニ達シ償金ヲ以テ之カ財源ニ充ルノ經畫ニシテ明治三十年年度ニ於ケル財政經畫中最モ重要ナルモノタリシナリ

北海道鐵道第一期線敷設ノコトハ明治二十九年年度ニ於テ北海道鐵道敷設法成立ノ結果明治三十年年度ヨリ著手スルコトナリタルモノニシテ明治三十年年度以降同四十一年度ニ至ル繼續費トシ其總額千八百餘萬圓ヲ要スル計算ナリ而シテ之カ財源ハ公債ニ依ルノ經畫ニシテ是亦明治三十

年度ニ於ケル財政經畫中重要ナル事項ノ一タリシナリ
臺灣總督府特別會計ノ設置ハ臺灣ヲシテ漸次獨立自營ノ域ニ達セシメンカ爲メニシテ是亦當局者間ニ於テハ夙ニ唱道セラレタルモノナリシカ愈明治三十年年度ニ於テ之ヲ實行スルコトナレリ而シテ其施行以來ノ實績ニ徵スルトキハ當初豫期シタルカ如ク漸次國庫補充金ヲ減シ今後十年ノ後ハ全ク獨立自營ノ期ニ到達スルヲ得ヘキ見込ニシテ臺灣特別會計ノ設置ハ財政上ニ尠カラサル利便ヲ與ヘタリ

明治三十年年度ニ於テ新ニ豫算セラレタルモノハ第二期軍備擴張費北海道鐵道第一期線敷設費ノ外日本勸業銀行並農工銀行ノ補助金京都帝國大學醫科大學創立費葉煙草專賣起業費公使館領事館設置費稅關事務擴張費及港灣修築費補助等ナリト雖モ其多クハ前年度ニ於テ經畫セラレ本年

度ニ於テ實行ニ著手セラレタルモノナリトス
明治三十年年度ニ於テモ前述ノ如ク新ニ各種ノ經費ヲ豫算シタルカ爲メ其歲出豫算ハ殆ント貳億五千萬圓ニ達シ前年度豫算ニ比スルトキハ四千餘萬圓ノ増加ナリト雖モ前年度ニ於テ增稅經畫ノ成立シタルカ爲メ營業稅酒稅及葉煙草專賣收入ニ於テ新ニ千六百餘萬圓(減稅ニ當ル額ヲ差ノ引純收入千餘萬圓)ノ歲入ヲ得タルト舊來ノ財源ニ於テ收入歩合ノ増進シタル等ノ爲メ通常歲入モ亦前年度ニ比シ貳千五百餘萬圓ヲ増加シタルカ爲メ明治三十年年度豫算ハ然カク増大シタルニ拘ラス其歲計ハ明治二十九年年度ニ於テ設定セラレタル經畫内ニ於テ之ヲ維持スルコトヲ得タリ然レトモ新稅ノ收入ハ明治三十一年年度ニ至ラサレハ其全部ヲ徵收スルヲ得サルニヨリ其不足額ニ對シテハ前年度剩餘金及償金ヲ繰入レ之ヲ支辨スルコトセリ

今更ニ明治三十年度ニ於ケル償金使用ノ經畫ニツキ一言セン明治三十年度ニ於テ償金支辨トナシタル經費ハ第二期軍備擴張費、臺灣民政費補充金、臨時軍事費及陸軍臨時運輸通信部費ナリトス抑第二期軍備擴張費ハ全ク臨時ノ費途ニ屬スルノミナラス其費額ハ極メテ巨大ナルカ故ニ到底通常歳入ノ能ク支辨シ得ヘキニアラサルヲ以テ之ヲ臨時ノ歳入タル償金ノ支辨ニ歸セシメタリ臨時軍事費及陸軍臨時運輸通信部費モ亦一時ノ費途ニ屬スルヲ以テ同ク償金ヲ繰入レ以テ之ヲ支辨スルノ經畫ヲ立テタリ獨リ臺灣ノ民政費ニ至リテハ經常ノ費途ニ屬スルカ故ニ臺灣ニシテ獨立自營ノ域ニ達セサル限リハ連年之カ補充ヲ爲スノ必要アルヘシト雖モ臺灣ノコトタル當時ニ在リテハ未タ速カニ將來ヲ豫測シ能ハサル事情アリシヲ以テ暫ク其經費ノ補充ヲ臨時ノ財源ニ讓リシモノナリ明治三十年度豫算ニ於ケル償金ノ使途ハ此ノ如シ而シテ同年度豫算ノ決定ニ伴ヒ將來ニ於ケル償金ノ使途モ亦決定セラレタルモノナリ

明治三十年度豫算ニ於ケル公債支辨ノ費途ハ既定ノ經畫ニ基ツケル陸海軍擴張臨時費製鐵所創立費、官設鐵道改良費、空知太旭川間鐵道敷設費、電話交換擴張費及專賣起業費ノ外北海道鐵道敷設法ニ依リ北海道鐵道第一期線ノ工事ニ著手ヲ要シタルカ爲メ其年割額百萬圓ヲ豫算シタリ抑戰後經營ノ爲メ諸般ノ施設ニ伴ヒ財源ノ補充ヲ要スルニ當リ政府ハ常ニ其經常費ノ財源ニ對シテハ増稅ヲ畫策シ其臨時費ノ財源ニ對シテハ償金ヲ使用シ及公債ヲ募集シ以テ歲計ノ維持ニ勉メタリ是實ニ戰後財政經畫ノ大綱ナリ而シテ第一回ノ增稅經畫ハ明治二十九年於テ成立シタルハ前章ニ述フル所ノ如シ償金ニ至リテハ明治二十八年於テ七千八百九拾五萬餘圓ヲ臨時軍事費特別會計ニ繰入タルト明治二十九年於テ第一期軍備擴張費及製鐵所創立費ノ同

年度ノ年割額ニ使用シタル外償金ノ使途ニ付テハ未タ決定セラレタルモノアラサリシカ明治三十年度ニ於テ第二期軍備擴張費全體ヲ之カ支辨ト爲スコトニ定メタリ而シテ事業公債ハ明治二十九年於テ募集總額壹億參千五百萬圓ノ豫定ヲ以テ經畫セラレタリシカ明治三十年度ニ至リ更ニ北海道鐵道第一期線敷設ノ爲メ北海道鐵道公債千八百五拾六萬貳千五拾圓ヲ募集スルト、ナリタルニヨリ戰後經營ニ伴フ公債募集總額ハ壹億五千參百五拾六萬貳千五拾圓ニ改定セラレタリ

(註第一期線鐵道建設費ニ要スル公債募集高ハ本文計算ノ外ナリ)

之ヲ約言スレハ明治三十年度豫算ハ通常歳入ノ補足トシテハ前年度剩餘金ヲ使用シ陸海軍第二期軍備擴張費、臨時軍事費、臨時陸軍運輸通信部費及臺灣民政費補充金ノ財源トシテハ償金ヲ充當シ而シテ其公債支辨ニ係ルモノハ既定經畫以外ニ北海道鐵道第一期線敷設費ヲ添加シタリト曰フニ歸ス

第二 重要事項

明治三十年度豫算中軍備外交其他教育勸業等ニ關スル施設ハ皆以テ政府ノ戰後經營ニ對スル方針ヲ觀ルニ足ルモノアルヲ以テ左ニ各事業ノ梗概ヲ記ス

一 陸海軍備ノ擴張

明治二十九年於テ決定シタル陸海軍第一期軍備擴張ニ伴ヒ更ニ第二期軍備擴張ノ經畫ヲ立テ明治三十年度ヨリ著手スルコト、ナレリ
陸軍第二期擴張ハ第一期擴張ニ繼キ砲臺建築、兵營建築、兵器製造其他東京大阪砲兵工廠並千住

製絨所作業据置運轉資本ノ補足等ニシテ作業据置運轉資本ノ補足ヲ除キ其他ハ皆明治三十年
度以降ノ繼續費ナリ即チ砲臺建築費ハ對馬長崎舞鶴及函館ニ砲臺ヲ建築スルノ目的ヲ以テ明
治三十四年度ニ涉リ營繕及初度調辨費ハ同三十六年度ニ涉リ兵器製造費ハ同三十五年度ニ涉
ル繼續費ナリ而シテ作業据置運轉資本補足費ハ明治三十年度及同三十一年度ニ於テ全部補
足ノ豫定ナリ其各事業ニ要スル擴張費ノ總額ハ左ノ如シ

陸軍第二期擴張費

- 一金六百四拾六萬五百貳拾圓四拾錢九厘
 - 一金千九百參拾六萬參千七百四拾六圓九拾貳錢六厘
 - 一金九百八拾五萬四千五百參拾八圓四拾九錢九厘
 - 一金貳百六拾七萬九千七百九拾圓貳拾錢八厘
- 計金參千八百參拾五萬八千五百九拾六圓四錢貳厘

砲臺建築費
營繕及初度調辨費
兵器製造費
作業据置運轉資本補足費

(註)本文第二期擴張費ニ第一期擴張臨時費四千參百參拾貳萬貳千貳百參拾四圓八拾錢九厘ヲ合
ストキハ陸軍擴張費總額ハ八千六百六拾八萬八百參拾圓八拾五錢壹厘ナリ
其明治三十年度ニ於テ要スル第二期擴張費總計ハ千貳百五拾七萬九千五百四拾四圓七拾九錢
八厘ナリ

海軍第二期擴張ハ第一期擴張ヲ補足シタルモノニシテ明治三十年度以降同三十八年度ニ至ル
繼續費ナリ其各事業ニ要スル擴張費ノ總額ハ左ノ如シ

海軍第二期擴張費

- 一金七千八百八拾九萬參千參百九拾九圓貳錢
 - 一金參千參百拾七萬六千參百貳拾九圓七拾八錢
 - 一金六百貳拾五萬四千九百九拾圓九錢四厘
- 計金壹億千八百參拾貳萬四千七百拾八圓九拾九錢四厘

造船費
造兵費
建築費

(註)本文第二期擴張費ニ第一期擴張臨時費九千四百七拾七萬六千貳百四拾五圓八拾四錢七厘ヲ
合ストキハ海軍擴張費總額ハ貳億千參百拾萬九百六拾四圓八拾四錢壹厘ナリ

其明治三十年度ニ於テ要スル第二期擴張費總計ハ貳千參百七拾九萬六千九百四拾七圓七拾錢
八厘ナリ

陸海軍第二期擴張ノ外明治三十年度ニ於テ下瀬火藥製造所設立ニ著手シタルカ如キ亦軍事上
ニ於ケル一重要經畫タリシナリ該事業ハ明治三十年度以降三箇年間ノ繼續費トシ總額貳拾貳
萬五千六拾壹圓七拾八錢五厘ニシテ其明治三十年度ニ於テ要スル所ハ拾七萬九千七拾圓九拾
壹錢ナリ

二 公使館領事館ノ増設

明治二十九年年度ニ於テ清國及朝鮮國ニ領事館ヲ設置シタリシカ明治三十年度ニ至リ更ニ外交
上又ハ貿易上ノ必要ヨリシテ布哇「メキシコ」ブラジル「暹羅」四箇國ニ公使館「シドニー」アンウ
エルス「チカゴ」マニラ「牛莊」ニ領事館ヲ設置スルコト、ナリ其經費貳拾九萬九千七百貳拾圓ヲ
明治三十年度ニ於テ豫算セリ

三 教育事業ノ擴張

明治三十年度ニ於テモ教育事業ノ擴張セラレタルモノ尠シトセス就中京都帝國大學醫科大學及帝國圖書館ノ創立ハ其最モ著ルシキモノトス

京都帝國大學創立ハ前年度ニ於テ決行セラレタリト雖モ其醫科大學ニ依ル分ハ前年度ニ於テハ其土地買収及地均ニ著手シタルニ止マリ其創立費全體ハ明治三十年度ニ於テ之ヲ豫算セリ即チ明治三十年度以降同三十四年度ニ至ル繼續費トシ其總額七拾貳萬九千參百五拾五圓ニシテ其明治三十年度ニ於テ要スル所ハ八萬圓ナリ

現在ノ東京圖書館ハ其規模狹少ニシテ文運ノ發達ニ伴ヒ洽ネク國民ノ需要ニ應スルニ足ラサルヲ以テ更ニ完全ナル中央圖書館ヲ設立スルノ經畫ヲ定メ明治三十年度以降同三十七年度ニ至ル繼續事業トシ其創立費總額參拾貳萬圓ヲ以テ之カ創立ニ著手セリ而シテ其明治三十年度ニ於テ要スル所ハ四萬圓ナリ

右ノ外地方視學ノ設置外國留學生ノ増遣等モ亦明治三十年度ニ於ケル教育ニ關スル事業中重要ナルモノナリ

四 築港費ノ補助

長崎港ハ近年土砂港内ニ堆積シ船舶ノ碇繋ニ不便ナルヲ以テ長崎市ニ於テ之カ修築ヲ企圖セシモ其費額貳百七拾六萬餘圓ニ上リ同市ノ負擔ニ堪ヘサルヲ以テ明治三十年度以降六箇年間ニ八拾萬圓ヲ補助スルコト、ナリタルヲ以テ明治三十年度ニ於テ其補助額五萬圓ヲ豫算セリ

右ノ外大阪市ニ於テ築港ヲ企圖セシモ其修築費千八百四拾萬餘圓ノ巨額ヲ要スルニヨリ明治三十四年度以降十箇年間ニ四百六拾八萬圓(本文補助額ノ外官有河岸地見積價格百九拾七)ヲ補

助スルコト、セリ

五 北海道ノ拓殖

明治二十九年年度ニ於テ北海道鐵道敷設法ノ成立シタルカ爲メ北海道ニ鐵道ヲ敷設スルヲ要シ石狩國旭川ヨリ十勝國十勝太釧路國厚岸ヲ經テ北見國網走ニ至ル線路釧路國厚岸ヨリ根室國根室ニ至ル線路及石狩國旭川ヨリ北見國宗谷ニ至ル線路ヲ第一期線トシ之カ工事ニ著手スルト又第一期線以外ニ屬スル線路測定ヲ要スルトニ依リ其工費總額千八百五拾六萬貳千五拾圓ヲ以テ明治三十年度以降同四十一年度ニ至ル繼續費トシ之カ起業ニ著手セリ而シテ其明治三十年度ニ於テ要スル所ハ百萬圓ナリ

小樽港ハ北海道西北部ノ要地ニシテ同道ノ拓殖上ニ至大ノ關係ヲ有スト雖モ其地勢西北ニ面スルヲ以テ冬期烈風ノ日ニ當リテハ船舶碇繋ノ安全ヲ關クニ依リ之ヲ修築スルカ爲メ其修築費總額貳百拾八萬八千六百拾八圓參拾六錢九厘ヲ以テ明治三十年度以降同三十九年度ニ至ル繼續費トシ之カ工事ニ著手セリ而シテ其明治三十年度ニ於テ要スル所ハ貳拾五萬圓ナリ

六 關稅事務ノ擴張

條約改正ニ伴ヒ新稅率實施準備等ノ爲メ關稅事務ノ擴張ヲ要シ其經費四萬六千七百八拾八圓ヲ明治三十年度ニ於テ豫算セリ

七 日本勸業銀行及農工銀行ノ補助

日本勸業銀行及農工銀行ノ設立ハ前年度ニ於テ決定セラレタルカ爲メ明治三十年度ニ於テ其補助費貳百六萬圓ヲ豫算セリ

八 臺灣鐵道會社ノ補助

臺灣縱貫鐵道ハ臺灣ノ經營上極メテ必要ナルヲ以テ其敷設ヲ臺灣鐵道會社ニ許可シ營業開始後十二箇年間其資本千五百萬圓拂込額ニ對シ年六分ヲ補助スルコト、シ明治三十年度ニ於テ其補助費拾七萬六千貳百五拾圓ヲ豫算セリ

九 電信線ノ架設

東京札幌間東京ヨリ甲府松本名古屋津赤間關熊本ヲ經テ鹿兒島ニ至ル間及東京ヨリ宇都宮仙臺ヲ經テ青森ニ至ル間ニ電信線ヲ増架スルカ爲メ各明治三十年度以降同三十一年度ニ至ル繼續事業トシ其費額合計貳拾九萬六千七百四拾六圓六錢參厘ヲ以テ之ニ著手セリ而シテ其明治三十年度ニ於テ要スル所ハ貳拾參萬四千貳百八拾圓六拾四錢參厘ナリ
右ノ外東京大阪間大阪徳島間大阪丸龜間及小樽稚内間等ニ電信線ヲ新設若クハ増設スルカ爲メ四拾萬八千五百九拾貳圓八拾四錢ヲ豫算セリ

十 水産講習所ノ設置

水産事業ノ發達ニ伴ヒ其改良獎勵ヲ指導スヘキ技術者ヲ養成スルノ必要アルヲ以テ水産講習所ヲ設置スルカ爲メ其經費貳萬八千四百貳拾四圓拾七錢ヲ明治三十年度ニ於テ豫算セリ
以上ハ明治三十年度豫算中最モ重要ナル歳出ニ屬スルモノヲ列舉シタルモノニシテ孰レモ戰後經營ノ爲ニ施設セラレタルモノニ外ナラサルナリ

第三章 明治三十一年度豫算

第一 不成立豫算

明治三十一年度豫算ハ第十一議會解散ノ爲メ不成立ニ歸シ前年度豫算ヲ施行シタルカ爲メ第十二議會及第十三議會ニ於テ成立シタル同年度追加豫算ノ外別ニ記スヘキコトナシト雖モ當初第十一議會ニ提出ノ經畫ニ係ル明治三十一年度總豫算ハ戰後經營ニ關スル財政上ノ沿革ヲ識ルニ便ナルヲ以テ左ニ其梗概ヲ記ス

第十一議會ニ提出セラレ又ハ提出セラレントシタル明治三十一年度總豫算ハ歳入貳億千貳百拾壹萬四千百拾九圓歳出貳億參千參百七拾貳萬參千七百八圓ニシテ歳入歳出相對照スルトキハ貳千百六拾萬九千五百八拾九圓ノ歳入不足ヲ生ス

(註)歳入ハ第十一議會ニ提出セラレタル豫算額ニ依リ歳出ハ同議會ニ提出セラレタル豫算額ニ

臺灣特別會計補充金四百貳拾八萬五千百貳拾壹圓ヲ加ヘタルモノナリ

抑明治三十一年度ノ歳出ハ前年度ニ比シ千五百萬圓以上ヲ減少シタリト雖モ是全ク償金及公債支辨ニ係ル臨時軍事費ノ減少ニ基因スルモノニシテ歳出ノ減少ト共ニ歳入モ亦減少スルモノナルカ故ニ敢テ歳計上ニ異動ヲ來スコトナク之ニ反シテ通常歳入ヲ以テ支辨スヘキ經費ニ於テ大ニ増額シタルモノアルカ爲メ遂ニ其歳入ニ對シ貳千百餘萬圓ノ超過ヲ見ルニ至レリ
當時政府ニ於テハ比年歳出増加ノ後ヲ承ケタルカ故ニ正義ハ明治三十一年度豫算ヲ調製スルニ當リテハ成ルヘク歳入歳出ノ平均ヲ得セシメシコトヲ力メ既定ノ經畫ヲ維持スルノ外新事業ノ如キハ已ムヲ得サルモノヲ除キ其他ハ皆他日ノ詮議ニ讓ルノ方針ヲ採リタリト雖モ既定ノ經費中意外ノ増加ヲ來シタルモノ等アリシカ爲メ遂ニ歳入ノ不足ヲ見ルニ至リシモノナリ即チ航海獎勵及航路擴張費ノ増加及臺灣經費ノ補充ハ歳入不足ヲ來シタル原因ナリシナリ

航海獎勵法制定ノ當時ニ在リテハ航海獎勵費ハ最高一箇年百萬圓ノ豫定ナリシニ反シ同法發布後ノ實況ニ徴スルトキハ船舶ハ俄ニ増加シ既ニ明治三十年度ニ於テ百七拾餘萬圓ヲ要シ遂ニ明治三十一年度ニ至リ航海獎勵及航路擴張費ノ總額ハ五百萬圓以上ニ達セリ臺灣ニ關スル諸經費ハ明治二十九年以來國庫剩餘金又ハ債金ヲ使用スル等常ニ臨時歲入ヲ以テ支辨シ來リシト雖モ臺灣ノ經營モ漸ク緒ニ就キ其經費モ年年千餘萬圓ノ國庫補充ヲ要スルコト明瞭ト爲リタルト共ニ國庫剩餘金ハ悉皆使用シ盡シ債金ハ夫夫使途ノ確定シタルカ爲メ最早之カ支辨ノ途ヲ通常歲入ニ仰カサルヲ得サルニ至リタリ

此ノ如ク一方ニ於テ新ニ航海獎勵及航路擴張費臺灣諸經費補充ヲ要スルト共ニ一方ニ於テ登錄稅法中戶籍登錄ノ項ヲ削除シタルト製糖費補足金ヲ廢止セラレタルト其他營業稅ノ收入豫期ニ達セサルトノ爲メ既定歲入五百餘萬圓ノ減少ヲ來シタルヲ以テ正義ハ地租並酒稅ヲ増加シテ以テ其歲入不足額ヲ補填セントシ第十一議會ニ其成案ヲ提出スルノ經畫ヲ定メタリ然ルニ不幸ニシテ衆議院ハ開會ノ翌日ニ於テ解散セラレ明治三十一年度豫算ハ不成立ト爲リタルカ爲メ其經畫ヲ實行スルニ至ラザリキ今左ニ當時ノ經畫ニ成ル増稅收支對照表ヲ掲載シテ參照ニ資ス

增稅收支對照表

一金九百九拾七萬貳千四百六拾五圓	田租
一金貳百貳萬七千八百八拾五圓	畑租
一金百七拾九萬八千參百四拾七圓	市街宅地租
一金千百貳拾貳萬千四百貳拾圓	酒稅

計金貳千五百貳萬百拾七圓

減稅

一金六拾五萬九千六百七圓	自家用酒稅減
一金百參拾八萬千七百六拾四圓	戶籍登錄稅免除
一金百七拾壹萬七千貳百五拾貳圓	營業稅減收
計金參百七拾五萬八千六百貳拾參圓	

差引

金貳千百貳拾六萬千四百九拾四圓

增稅支辨經費

一金千參百七拾壹萬七千五百拾九圓	臺灣諸經費
一金五百貳拾五萬六千六百參拾六圓	航海獎勵及航路擴張費
一金拾七萬貳千九百七拾六圓	徵稅費
一金參百五拾五萬五千四百九圓	監獄費國庫支辨

計金貳千貳百七拾萬貳千五百四拾圓

(註)增稅收入ハ明治三十二年度ニ至ラサレハ其全收入ヲ得ル能ハサルニ依リ本表員數ハ明治三十二年度ノ計數ナリ

製糖費補足金廢止ハ明治三十一年度ニ於テ既定歲入ニ減少ヲ來スモノナリト雖モ明治三十二年以後ハ當然廢止ニ歸スヘキ豫定ナリシカ故ニ本表ニ其計數ナシ

監獄費圖庫支辨ハ明治三十二年度ヨリ實行ノ豫定ナリシナリ

第二 追加豫算

明治三十一年度追加豫算ノ第十二議會ニ於テ成立シタルモノノ歳入參拾壹萬四百八圓九拾九錢九厘歳出千參百八拾五萬千貳百參拾六圓六拾錢及第十三議會ニ於テ成立シタルモノノ歳入四百八拾九萬參百拾八圓七拾錢歳出千百九拾六萬五千六百六拾九圓七拾六錢八厘合計歳入五百貳拾萬七百貳拾七圓六拾九錢九厘歳出貳千五百八拾壹萬六千九百六圓參拾六錢八厘ナリ其歳入歳出對照歳入不足額貳千六拾壹萬六千七百七拾八圓六拾六錢九厘ハ償金及一時借入金ヲ以テ支辨スルノ經畫ナリシナリ

明治三十一年度追加豫算ハ第十一議會ニ於テ増稅經畫ノ實行セラレサリシカ爲メ遂ニ歳入ニ巨額ノ不足ヲ生シ償金又ハ一時借入金ヲ以テ之ヲ補填スルノ已ムヲ得サルニ至レリ
明治三十一年度追加豫算ハ頗ル多額ニ上リシト雖モ是主トシテ府縣災害費其他法律ノ結果又ハ政府ノ義務ニ屬スル經費若クハ既定經畫ニ伴フ經費ノ増加ニ基因スルモノニシテ其新事業ニ屬スルモノハ條約改正又ハ法典實施等ノ結果已ムヲ得サルモノ一二ヲ除キ殆ント之レ無シト謂フモ可ナリ只同年度追加豫算中特筆スヘキモノハ製鐵所創立費追加及京仁鐵道引受組合貸付金はナリ而シテ製鐵所創立費追加額六百四拾七萬四千五百圓ノ豫定ヲ以テ經畫セラレタル事業公債募集額ハ此ニ至リ更ニ増加シテ壹億四千參拾五萬八千九百八拾九圓ト爲リ之ニ北海道鐵道公債千八百五拾六萬貳千五拾圓ヲ合ストキハ戰後經營ノ爲メ募集スヘキ公債總額ハ壹億五千八百九拾貳萬千參

拾九圓トナレリ

(註)明治二十九年年度ノ經畫ニ依レハ電話鐵道ニ係ル公債初年利子百貳拾七萬八千八拾圓ハ公債

募集金ノ内ヨリ支辨ノ見込ナリシト雖モ明治三十年年度以降ハ之ヲ通常歳入ノ負擔ニ歸セシメタルカ爲メ三十年年度以降ノ利子相當額百拾壹萬五千七拾參圓ヲ事業公債募集總額壹億參千五百萬圓中ヨリ控除シタルモノニ本文製鐵所創立費追加額六百四拾七萬四千五百圓及當初切捨計算シタル圓以下ノ端數六圓ヲ算入スルトキハ事業公債改定總額壹億四千參拾五萬八千九百八拾九圓トナルナリ

製鐵所創立費追加及京仁鐵道引受組合貸付金ヲ要スル事由ハ左ノ如シ

製鐵所創立費ハ明治二十九年年度ニ於テ總額四百九萬五千七百九拾參圓四拾錢ヲ以テ同年度以降三十二年度ニ至ル繼續費トシテ決定セラレタルモノナリト雖モ更ニ歐米斬新ノ方法ニ據リ精査スルニ現在ノ費額ヲ以テシテハ到底創立ノ目的ヲ達スル能ハサルニ依リ當初ノ經畫ヲ變更シ繼續年限ヲ明治三十四年度マテ延長スルコト、シ其創立費六百四拾七萬四千五百圓ヲ増額シタリ故ニ製鐵所創立費ハ總額千五百八拾九圓四拾九圓四拾錢トナリタリト雖モ明治三十一年度ニ於ケル年割額ハ既定ノ員數ニ依リタルヲ以テ實際豫算ニ増加ヲ來スハ明治三十二年度以降ニ在リ

京仁鐵道ハ曩ニ米人モールスカ朝鮮政府ヨリ特許ヲ得テ敷設ニ著手シタルモ資力ノ給セサルカ爲メ中途ニシテ之ヲ他ニ讓リ渡サンコトヲ欲セリ然ルニ此鐵道ハ貿易ノ關係上帝國ノ利害ヲ感スルコト最モ深キヲ以テ京濱ノ實業家相集リテ京仁鐵道引受組合ヲ組織シモールスヨリ

京仁鐵道ヲ讓受タルコトニ締約セリ然ルニ組合ニ於テ遽ニ巨額ノ資金ヲ集ムルハ當時金融上ノ狀況ニ於テ困難ノ事情アルヲ以テ右資金ノ内百八拾萬圓ヲ一時政府ヨリ貸付セラレンコトヲ出願シタルニ依リ其願意ヲ容レ之ヲ貸付シタルモノナリ

第三 第十二議會提出増稅經畫

政府ハ曩ニ航海獎勵及航路擴張費臺灣諸經費監獄費國庫支辨ノ財源ニ充ツルカ爲メ地租及酒造稅ヲ增加スル經畫ヲ定メ第十一議會ニ其成案ヲ提出セントシタリシモ衆議院ノ解散ニ接シ其經畫ヲ實行スルヲ得サリシヲ以テ明治三十一年度ノ歲計ハ遂ニ多額ノ歲入不足ヲ生シ僅ニ債金又ハ一時借入金ヲ以テ之ヲ維持スルノ已ムヲ得サルニ至レリ而シテ明治三十一年度ノ歲計ハ此ノ如クナルヲ以テ明治三十二年度ノ歲計モ亦不足ヲ告クルニ至ルヘキハ之ヲ豫想スルニ難カラサルノミナラス戰後官民事業ノ勃興ハ經濟界ノ調和ヲ紊リ爲ニ物價賃銀ハ非常ニ騰貴シ延テ一般政費ノ不足ヲ感スルニ至リタリ是ニ於テ當時ノ大藏大臣伯爵井上馨ハ明治三十二年度ノ歲計ヲ維持スルニハ豫メ歲入補填ノ途ヲ講スルノ必要ナルヲ感シ第十二議會ニ向テ増稅法案ヲ提出シタリ然ルニ衆議院ハ地租ノ増徴ニ關シ政府ト意見ヲ異ニシ之ヲ否決シタルカ爲メ復又解散ノ否運ニ遭遇シ政府ノ經畫ハ再ヒ畫餅ニ歸シタリ

第十二議會ニ提出シタル政府ノ増稅經畫ハ當時増稅案參考トシテ議員ニ配付シタル理由書ニ詳ナルヲ以テ左ニ之ヲ抄録ス

抑明治三十二年度ノ歲計ハ未タ正式ノ豫算ヲ編成スルノ場合ニ至ラスト雖モ三十一年度ノ歲計ニ依リ推算スルニ公債及債金ノ繰入ヲ除キ通常ノ歲入壹億四千參百餘萬圓内經常歲入壹億

四千貳百餘萬圓臨時歲入百餘萬圓ナリ又歲出ハ公債及債金支辨ニ屬スル費途ヲ除キ通常ノ歲出壹億四千貳百餘萬圓内經常歲出壹億千八百餘萬圓臨時歲出貳千參百餘萬圓ナリ故ニ歲入歲出差引百五拾餘萬圓ノ歲入超過トナルノ計算ナルモ右歲出中ニハ臺灣諸經費航海獎勵及航路擴張費其他新ニ經畫ニ係ル公債償還監獄費國庫支辨物價騰貴等ニ伴フ經常費增加等合計參千七百餘萬圓ヲ除キアルヲ以テ今此金額ヲ前記歲入超過額百五拾餘萬圓ト差引トキハ參千五百餘萬圓ノ歲計不足トナルノ計算ナリ

前記ノ如ク三十二年度ノ歲計ハ歲入歲出差引概算百五拾餘萬圓ノ歲入超過トナルノ計算ナリ然ルニ此計算ニハ臺灣諸經費航海獎勵及航路擴張費ヲ除キアルヲ以テ是等ノ經費ニ對スル財源及新ニ經畫ニ係ル公債償還監獄費國庫支辨物價騰貴等ニ伴フ經常費增加ニ對スル財源ハ新ニ之ヲ求メサルヲ得ス其計算左ノ如シ

- 金千貳拾四萬圓
- 金四百八拾七萬圓
- 金七百萬圓
- 金參百五拾五萬圓
- 金五拾萬圓
- 金四拾六萬圓
- 金六百八拾六萬圓
- 金貳百五拾萬圓

- 臺灣諸經費
- 航海獎勵及航路擴張費
- 公債償還
- 監獄費國庫支辨
- 罹災救助基金
- 復祿公債利子
- 條約改正新事業等

合計金參千七百餘萬圓

歲入超過ト差引
金參千五百餘萬圓

歲入 不足

臺灣諸經費ハ臺灣民政費補足及臺灣ニ要スル陸海軍諸經費ヲ包含スルモノニシテ此經費ハ年
年千五百餘萬圓ヲ要シタルモ前途節減ノ經畫ヲ立テ三十二年度ニ於テハ千餘萬圓ト豫算セ
リ其財源ハ從來臨時ノ歲入タル債金繰入前年度剩餘金等ヲ以テ充テタルカ是一時ノ經畫ニ止
マルヲ以テ三十二年度以降通常財源ニ依ルノ必要アリ

航海獎勵及航路擴張費ハ二十九年年度ノ經畫ニ於テハ凡ソ百萬圓ニ止ルノ見込ナリシカ航海獎
勵法實施以來外國通航ノ船舶非常ニ増加シ從テ獎勵費ニ巨額ヲ要スルヲ以テ航海獎勵法ニハ
相當ノ改正ヲ加ヘ獎勵費ノ増加ヲ制限スルノ見込ナルモ既ニ生シタルモノニ對シテハ獎勵金
ノ支出ヲ止ムル能ハサルヲ以テ三十一年度ノ豫算ニ百萬圓ヲ加ヘ四百八拾七萬圓トシテ算定
セリ其財源ハ新ニ之ヲ求メサルヲ得ス

公債ノ償還ハ年年七百萬圓ノ豫算ナルモ日清戰爭以來軍事公債事業公債鐵道公債非常ニ増加
シ將來尙既定ノ經畫ニ屬スル分ニシテ壹億六千餘萬圓募集ノ必要アリ其元利償還ハ二十九年
度ノ財政經畫ニ於テ定ムル所アリ凡ソ四十二箇年度間ニ償却ノ計算ナルモ昨年來金融社會ノ
情況ヲ察スルニ公債ノ償還ヲ増加スルハ目今ノ金融逼迫ヲ緩和スル上ニ於テ頗ル必要アリ且
將來募集スヘキ壹億六千餘萬圓ノ公債中生産的事業費ニ屬スル部分ノ内幾分ハ或ハ外國市場
ニ於テ募集ノ必要アルヘシ然ルトキハ國債ノ償還ヲ確實ニスルハ外國市場ニ於ケル本邦公債

ノ信用ヲ厚ウスル所以ナリ

從來府縣經濟ノ支辨ニ屬スル監獄費ヲ國庫支辨ニ移サントスルノ議ハ多年其必要ヲ認ムルト
雖モ財政上許サ、ル所アリ今日ニ及ヒタルモ改正條約ノ實施ハ最モ獄政改良ノ急ヲ促セリ而
シテ獄政改良ヲ圖ルハ監獄費ヲ國庫支辨ニ移スヨリ先ナルハナシ府縣監獄費ハ一箇年凡ソ四
百五拾餘萬圓ニシテ監獄附屬收入百餘萬圓ヲ差引一箇年參百五拾餘萬圓トス

罹災救助基金ハ從來ノ備荒儲蓄法ニ依ル中央備荒儲蓄金ハ三十年度ニ於テ悉皆拂切トナリ前
年度來府縣備荒儲蓄金ノ支出ニ對シ國庫ヨリ補助スルコト能ハス府縣儲蓄金ニ減少ヲ來シ救
荒ノ目的ヲ或ハ中止スルノ已ムヲ得サルニ至ラントスルノ虞アルヲ以テ罹災基金法ヲ制定シ
國庫ヨリ年年凡ソ五拾萬圓ヲ支出シ罹災救助ノ目的ヲ永續セシメントス

復祿公債利子ハ第十議會ニ於テ決定ノ復祿處分法ノ結果ニ據リ發行スヘキ公債ニ對スル利子
ヲ粗ホ見込タルモノナリ

物價騰貴ニ伴フ經常費ノ増加ハ二十九年年度以來ノ景況ニ徴スルニ物價ハ一般ニ騰貴シ俸給及
諸給應費修繕費旅費雜給及雜費等ニ不足ヲ告ケ相當ノ増費ハ到底避ク可ラサルモノナルヲ以
テ蒞給官吏ニ相當ノ増俸ヲ爲シ又應費修繕費旅費雜給及雜費等一割五分乃至三割ノ増加ヲ見
込算出セリ

新事業費ハ改正條約實施ニ伴ヒ稅關ノ擴張其他諸般行政ノ改良等ノ費用ヲ見込タルモノナリ
右ノ如ク三十二年度ニ於テハ歲入歲出差引參千五百餘萬圓ノ歲入不足トナリ新ニ增稅ヲ必要
トスルモ此内千六百餘萬圓ハ臺灣諸經費航海獎勵及航路擴張費ニシテ新ニ生シタルモノニア

ラス其他罹災救助基金復祿公債利子公債償還監獄費國庫支辨物價騰貴等ニ伴フ經常費増加及改正條約實施等ニ伴フ新事業費ハ經濟ノ變動改正條約實施法律ノ結果等ニヨルモノニシテ實際萬已ムヲ得サルナリ

地租	金千七百五拾五萬圓
所得稅	金百六拾四萬圓
酒稅	金千貳百四拾壹萬圓
電信收入	計金參千六百拾餘萬圓
鐵道益金	金四拾參萬圓
	金參百貳拾四萬圓
	計金參百六拾餘萬圓
	合計金參千五百貳拾餘萬圓

第十一議會ニ對シ政府ノ經畫シタル増稅案ハ航海獎勵及航路擴張費臺灣諸經費及監獄費國庫支辨ノ財源ニ充ツル爲メ地租及酒稅ヲ増加シテ貳千五百餘萬圓ヲ得ントシ第十二議會提出ノ増稅經畫ハ右諸費ノ外向ホ公債償還罹災救助基金復祿公債利子及物價騰貴ニ伴フ經常費増加等ノ財源ニ充ツルカ爲メ地租所得稅及酒稅並電信及鐵道收入ヲ増加シテ參千五百餘萬圓ヲ得ントシタルモノニシテ二者時勢ニ依リ少異ナキ能ハスト雖モ其之ニ依リ戰後經營ノ完成ヲ期セントシタル

ルハ則チ一ナリ而シテ前後相次テ不成立ニ終リタルカ爲メ遂ニ第十三議會ニ向テ復増稅案ヲ提出スルノ已ムヲ得サルニ至レリ

第四章 明治三十一年度豫算

第一 歳入歳出

明治三十二年度總豫算ハ歳入經常部壹億七千八百五拾五萬八千九百四拾四圓歳入臨時部六千八百參拾九萬四千百參拾圓五拾七錢貳厘ニシテ歳入總計貳億四千六百九拾五萬參千七拾四圓五拾七錢貳厘歳出經常部壹億四千九拾六萬貳千八百壹圓六錢五厘歳出臨時部壹億五百四拾八萬八千九百五圓五拾錢七厘ニシテ歳出總計貳億四千六百四拾五萬千七百六圓五拾七錢貳厘ナリ故ニ歳入歳出相對照スルトキハ五拾萬千參百六拾八圓ノ歳入超過ナリ

(註)歳入超過額五拾萬千參百六拾八圓ノ内貳拾六圓ハ公債募集額ヲ額面ニ切上タルカ爲メ生スル計算上ノ超過額ナルヲ以テ之ヲ控除スルトキハ歳入超過額ハ五拾萬千參百四拾貳圓ナリ然ルニ一方ニ於テ廢稅等ノ爲メ歳入ニ百萬千參百四拾貳圓ヲ減少スヘキモノアルヲ以テ之ヲ歳入超過額ト差引トキハ却テ五拾萬圓ノ歳入不足ヲ來ス計算ナリト雖モ公債支辨ノ費途中同額ヲ翌年度ニ繰越スモノアルカ爲メ實際ニ於テ不足ヲ生スルコトナシ本文豫算ノ外第十四議會ニ豫算追加トシテ提出セラレ成立シタル明治三十二年度豫算追加額若干圓(歳入歳出各五百六拾四萬六千參百參拾九圓七拾錢壹厘)アリト雖モ多クハ一時限リノ費途ニシテ一般ノ財政經畫ニ關聯セサルヲ以テ之ヲ省ク

明治三十二年度歳入ハ通常歳入、新稅等收入、公債募集金、債金繰入及債金繰替ヨリ成ル其内譯左ノ

如シ

明治三十二年歳入内譯

一金貳億四千六百九拾五萬參千七拾四圓五拾七錢貳厘

歳入總計

内	金壹億四千五百六拾萬參千七拾壹圓	通常歳入
	金參千五百拾五萬千九百壹圓	新稅等收入
	金貳千四百六拾六萬六千九百圓	公債募集金
	金參千八百八拾壹萬八千參百六拾四圓	債金繰入
	金九百七拾壹萬貳千八百參拾八圓五拾七錢貳厘	債金繰替
(註) 通常歳入中ニハ本年度ヨリ新ニ豫算セラレタル森林資金繰入八拾壹萬參千九百五拾八圓ヲ包含ス		
新稅等收入ノ内譯左ノ如シ		
	金七百七萬八千五百八拾參圓	地租
	金百四拾九萬四千五百拾六圓	所得稅
	金千五百拾壹萬四千四百六拾六圓	酒稅
	金百貳拾五萬貳千七拾圓	醬油稅
	金六拾萬五千六拾圓	海關稅
	金參拾壹萬七千參百拾五圓	噸稅

金百拾五萬九千五百六拾圓	兌換銀行券發行稅
金百六拾萬參千八百八拾貳圓	登錄收入
金百七拾萬九千貳百八拾九圓	葉煙草專賣收入
金貳百拾五萬九千百六拾圓	郵便電信收入
金百八拾貳萬六千貳百五拾圓	鐵道益金
金八拾參萬千七百五拾圓	煙草賣買及製造免許料
計金參千五百拾五萬千九百壹圓	
公債募集金ノ内譯左ノ如シ	
金九百貳拾壹萬貳千九百圓	鐵道公債
金千百貳拾五萬四千圓	事業公債
金百萬圓	北海道鐵道公債
金參百貳拾萬圓	臺灣事業公債
計金貳千四百六拾六萬六千九百圓	

明治三十二年歳出ハ通常財源及新稅支辨公債募集金支辨債金繰入支辨及債金繰替支辨ヨリ成ル其内譯左ノ如シ

明治三十二年歳出内譯

一金貳億四千六百四拾五萬千七百六圓五拾七錢貳厘

歳出總計

金壹億七千九百七拾五萬參千六百五拾貳圓四拾參錢四厘 通常財源及新稅支辨
 金貳千五百拾六萬六千八百五拾壹圓八拾八錢 公債募集金支辨
 金參千八百八拾壹萬八千參百六拾參圓六拾八錢六厘 債金繰入支辨
 金九百七拾壹萬貳千八百參拾八圓五拾七錢貳厘 債金繰替支辨

第二 歳入補填ノ經畫

明治三十二年度ノ豫算ハ本豫算提出後更ニ追加豫算トシテ提出シタルモノ十有餘ノ多キニ達シ其關係頗ル錯綜セルノミナラス共歳入補填ノ經畫モ數變更シタルヲ以テ本豫算提出ノ當初ニ溯リ記述スルニ非サレハ其脈絡系統ハ得テ釋ヌ可ラサルモノアルニヨリ左歳ニ入補填ノ顛末ニ關シ次ヲ逐テ記載スヘシ

明治三十一年十一月閣下ノ内閣ヲ組織セラル、ヤ正義復入テ現職ヲ奉スルニ至レリ時當ニ第十三議會開會ノ期ニ迫リシヲ以テ前内閣ノ調製シタル明治三十二年豫算ヲ調査シ其儘之ヲ議會ニ提出シタリ即チ歳入壹億八千八百七拾參萬八千四百參拾七圓歳出貳億貳千六百參拾四萬四千七百九拾貳圓ニシテ差引歳入不足額參千七百六拾萬六千參百五拾五圓ナリ是全ク航海獎勵及航路擴張費、臺灣諸經費、陸海軍費、條約及法典施行ニ伴フ經費、教育事業ニ要スル經費及物價騰貴等ニ伴フ一般政費ノ増加シタルカ爲ニ外ナラス

航海獎勵及航路擴張費、臺灣諸經費及物價騰貴ニ伴フ經費ノ増加ニ付テハ前年來之カ財源ニ不足ヲ感シ既ニ第十一議會及第十二議會ニ對シ交其補填經畫ヲ提出シタルコトハ前章ニ述フル所ノ如シ又陸海軍費ノ増加ハ第七師團ノ完成對馬基隆澎湖島ノ砲臺建築及軍艦水雷艇ノ竣工ニ伴フ

モノナルヲ以テ是亦國防上已ムヲ得サルノ經費ナリ其他條約改正、法典施行ニ伴フ經費ノ如キ孰レモ避ク可ラサル經費ノ増加ナリ左ニ其各事項金額ヲ列記ス

- 一金參百七拾九萬四千六百六拾貳圓 航海獎勵及航路擴張費
- 一金千貳百拾貳萬五千五百九拾七圓 臺灣諸經費
- 一金百貳拾七萬五千參百拾圓 陸軍軍費(既定外増加)
- 一金參百五拾七萬八千參百六拾八圓 海軍軍費(既定外増加)
- 一金五百拾四萬七百九拾八圓 陸軍擴張費(既定外増加)
- 一金四拾四萬四百參拾貳圓 軍艦水雷艇臨時修理費
- 一金百九拾六萬四千四百貳拾五圓 條約改正及法典施行費
- 一金百五拾萬八千參百拾圓 教育事業ニ要スル經費
- 一金六百拾四萬五千五百六拾貳圓 各省諸般經費ノ増加
- 計金參千五百九拾五萬八千貳百六拾四圓

(註)陸海軍費既定外増加ハ明治三十年豫算決定額ニ基ツキ調製シタル十箇年間歳出概計表ノ額ニ對スル増加額ナリ

條約改正及法典實施ニ伴フ經費ハ外交事務費、警察、監獄、官練習所費、橫濱港灣浚渫費、稅關事務費、橫濱及神戸稅關陸揚場等改良費及裁判事務ニ要スル經費ヲ總稱シタルナリ
 本文金額ノ外稅法改廢ノ爲メ廢稅ト爲ルモノ百萬千參百四拾貳圓及増稅ノ爲メ新ニ要スル所ノ徵收費百六拾四萬八千九拾壹圓アルヲ以テ之ヲ本文ノ金額ニ合スルトキハ總計參千八

百六拾萬七千六百九拾七圓トナルト雖モ其幾分ハ通常歳入ノ餘裕等ヲ以テ支辨スルヲ得ルカ爲メ差引前記ノ通常歳入不足額參千七百六拾萬六千參百五拾五圓トナルナリ

本文金額ハ提出豫算ニ據リタルモノナルカ故決定豫算ノ金額ト多少ノ差異アリ

明治三十二年度ハ此ノ如クニシテ其歳入ニ參千七百餘萬圓ノ不足ヲ告クルノミナラス多年朝野ノ宿題タリシ監獄費國庫支辨其他罹災救助基金等ハ早晚之ヲ實行セサルヲ得サルヲ以テ彼此相算當スルトキハ新ニ四千六七百萬圓ノ財源ヲ得ルニ非サレハ以テ戰後ノ經營ヲ完済スルヲ得サルニ至レリ顧ミテ債金及公債ノ狀況ヲ察スルニ債金ハ既ニ其用途確定シ其未定ニ屬スルモノモ公債證書等ニ變形シ現金ヲ以テ存スルモノ甚タ少ク公債ハ内地金融ノ逼迫ニヨリ募集ノ目的ヲ達スルコト難ク皆以テ財源ト爲スニ足ラス況ンヤ補填ヲ要スル經費ハ殆ント總テ經常ノ性質ニ屬シ債金若クハ公債ヲ以テ一時ヲ彌縫スルカ如キハ財政ノ基礎ヲシテ益々薄弱ナラシムルモノナルニ於テテヲヤハ是ニ於テ正義ハ之カ補填ノ途ヲ増稅ニ求メ閣議ノ決裁ヲ請ヒ其成案ヲ第十三議會ニ提出セリ即チ地租所得稅酒稅噸稅登錄稅葉煙草專賣收入及日本銀行納付金ヲ增徵若クハ新設シ之ニ依リテ一箇年四千六百餘萬圓ノ歳入ヲ得ルノ計算ナリト雖モ明治三十二年度ニ於テハ納期等ノ關係ニテ全年分ノ收入ヲ得ル能ハス參千四百餘萬圓ヲ徵收シ得ルニ過キササルヲ以テ其不足額ハ一時債金ヲ以テ繰替支辨スルノ經畫ヲ立テタリ其増稅ノ種目ハ左ノ如シ

- 一金千七百六拾四萬四千百拾參圓
- 地租
- 一金百四拾九萬四千五百拾六圓
- 所得稅
- 酒稅
- 一金貳千貳百五拾五萬六千四百九圓
- 稅

明治財政史第一卷

- 一金四拾七萬五千九百七拾貳圓
- 噸稅
- 一金百六拾萬參千八百八拾貳圓
- 登錄稅
- 一金百八萬貳千百參拾參圓
- 葉煙草專賣收入
- 一金百貳拾參萬七千五百拾圓
- 日本銀行納付金
- 計金四千六百九萬四千七百七拾五圓

明治財政史第一卷

然ルニ議會ハ地租案ニ關シ政府原案ノ改正田畑地租稅率百分ノ四ヲ修正シテ百分ノ三分三厘ト爲シ其增徵期間ヲ五箇年ニ限リタリ此稅率修正ノ爲メニ政府ノ經畫ニ比シ九百餘萬圓ヲ減少スルコト、ナリタルニ付キ更ニ第二補填案トシテ家屋稅ノ新設醬油造石稅及郵便收入ノ増加ニ依リ六百餘萬圓ノ歳入ヲ得ルノ經畫ヲ立テ其法案ヲ議會ニ提出シタリ然レトモ家屋稅ニ關シテハ頗ル非難ノ聲喧ク容易ニ通過ノ望ナキニ際シ恰モ衆議院ハ政府提出ノ葉煙草專賣法改正案ヲ修正シタルカ爲メ葉煙草專賣收入ノ増加ヲ來スコト、ナリタルニヨリ之ヲ以テ家屋稅ニ代フルノ目的ヲ以テ該法案ハ之ヲ撤回シタリ是ニ於テ議會ハ總テ歳入補填ニ關スル政府提出案ヲ協賛シ多年ノ難問題タリシ增稅經畫ハ茲ニ漸ク成立ヲ見ルニ至レリ其決定額ハ左ノ如シ

- 一金八百四拾七萬五千九百五拾八圓
- 地租
- 一金百四拾九萬四千五百拾六圓
- 所得稅
- 酒稅
- 一金貳千貳百五拾五萬六千四百九圓
- 噸稅
- 登錄稅
- 稅
- 一金百八拾四萬六千七百五拾九圓
- 稅

一金貳百拾四萬五千五百五拾圓
 一金百拾五萬九千五百六拾圓
 一金百五拾九萬八千參百八拾七圓
 一金八拾參萬千七百五拾圓
 一金百六拾七萬參千參百四拾四圓
 計金四千貳百貳萬貳百拾九圓

葉煙草專賣收入
 兌換銀行券發行稅
 醬油造石稅
 煙草營業免許料
 郵便電信收入

(註) 噸稅、登錄稅ノ政府提出案ノ員數ト差異アルハ議會ニ於テ該法案ヲ修正シタル結果ニヨル
 右ハ全年分ノ計算ヲ掲ケタルモノニシテ之ヲ以テ政府提出原案ノ金額ニ比スルトキハ四百餘萬圓ノ減少ナリ而シテ決定額ニ依レハ明治三十二年度ハ參千貳百八拾餘萬圓(輸出稅廢止延期ノ爲メ加算ス)ヲ徵收シ得ルニ過サルヲ以テ其不足額ハ更ニ債金ヲ以テ繰替支辨スルノ計算ナリ然ルニ本豫算提出後追加豫算ノ提出セラレタルモノ頗ル多カリシカ爲メ同年度ノ歲計ハ遂ニ九百七拾餘萬圓ノ債金繰替ヲ見ルニ至レリ
 以上ハ明治三十二年度ニ於ケル歲入補填經畫ノ概要ニシテ其政府ノ提出案ニ比シ議定額ノ四百餘萬圓ヲ減少シタルハ頗ル遺憾ナリト雖モ増稅案ノ成立ハ戦後豫算ヲ整理シ財政ノ基礎ヲ頗ル鞏固ナラシメタリ
 明治三十二年度ニ於テハ歲入補填ノ目的以外ニ於テ電信料金及鐵道運賃ノ改正ヲ行ヒ之ニ依リテ新ニ貳百貳拾餘萬圓ノ歲入ヲ得テ以テ電信機械ヲ増置シ電信線ヲ増設スル等通信機關ノ改良ヲ行ヘリ

抑日清事件ノ局ヲ結ヒシヨリ既ニ四年其間所謂戦後經營ノ爲メ増稅ヲ畫策シタルモノ前後二回ニシテ其第一回ハ第九議會ニ於テ直ニ成立シタリシト雖モ其第二回ハ第十一議會及第十二議會ニ於テ相次テ敗レ漸ク第十三議會ニ於テ成立ヲ見ルニ至リ戦後經營モ爰ニ粗ホ一段落ヲ告クルニ至レリ左ニ増稅總額ヲ掲ケ以テ其結末ヲ知ルニ便ス

一金參千參百五拾七萬六千貳百九拾參圓 第一回 增稅
 一金四千貳百貳萬貳百拾九圓 第二回 增稅
 計金七千五百五拾九萬六千五百拾貳圓

第三 公債

明治三十二年度ニ於テ公債支辨ニ係ルモノハ事業公債鐵道公債北海道鐵道公債ノ外新ニ臺灣事業公債ノ支辨ニ係ルモノヲ増シタリ
 事業公債支辨ノ經費ハ既定經畫ノ外明治三十二年度ニ於テ製鐵所創立費ニ八百六拾參萬貳千八百四拾五圓ヲ増加シタルヲ以テ事業公債募集總額ハ此ニ至リ壹億四千八百九拾九萬千八百參拾四圓ニ改定セラレタリ

北海道鐵道敷設費ハ既定ノ經畫通リナルヲ以テ北海道鐵道公債ノ募集額ハ變更スルコトナシ臺灣事業公債ハ明治三十二年度ニ於テ決定シタル臺灣鐵道敷設土地調査築港及官廳舍新營ノ事業費ニ充ツルカ爲メ募集スルモノニシテ其總額ハ參千五百萬圓ナリ以上各公債ハ明治二十九年以來決行セラレタルモノニシテ悉ク戦後經營ニ關係セサルモノナシ今其總額ヲ左ニ掲ク
 一金壹億四千八百九拾九萬千八百參拾四圓六拾壹錢壹厘 事業公債支辨事業費

内

- 金千八百四拾五萬九千四百八拾參圓八拾錢四厘
- 陸軍擴張費
- 金五千八百九拾九萬九千四百貳拾參圓拾九錢六厘
- 海軍擴張費
- 金千八百六拾貳萬貳千九百參拾貳圓參拾八錢
- 製鐵所創立費
- 金百拾七萬八千參百參拾壹圓
- 空知太旭川間鐵道建設費
- 金千貳百貳拾壹萬參千五百五拾圓
- 葉煙草專賣起業費
- 金千貳百八拾萬貳千六百七拾參錢壹厘
- 電話交換擴張費
- 金貳千六百五拾五萬參千圓
- 官設鐵道改良費
- 金拾六萬參千七圓五拾錢
- 北海道鐵道敷設費
- 一金千八百五拾六萬貳千五拾圓
- 臺灣事業公債支辨事業費
- 一金參千五百萬圓

内

- 金貳千八百八拾萬圓
- 臺灣鐵道建設及改良費
- 金貳百萬圓
- 基隆築港費
- 金參百萬圓
- 臨時臺灣土地調查費
- 金百貳拾萬圓
- 官廳舍新營費

合計金貳億貳百五拾五萬參千八百八拾四圓六拾壹錢壹厘
 鐵道公債支辨ノ第一期線鐵道建設費ハ前年度マテハ特別會計ノ整理ニ屬セシト雖モ本年度ヨリ

他ノ公債支辨ノ經費ト同ク之ヲ一般會計ノ整理ニ移シタルモノナリ

抑第一期鐵道敷設ノコトハ明治二十五年法律第四號鐵道敷設法ニ依リ決定セラレタルモノニシテ其敷設費ニ充ツル爲メ六千萬圓ヲ限リ鐵道公債ヲ募集スルモノナリ而シテ明治二十六年度ニ於テ工費千八百四拾五萬千八百八拾圓ヲ以テ福島青森間及敦賀富山間ノ線路ニ著手シ同二十八年年度ニ於テ工費四千四百四拾七萬五千八百八拾參圓ヲ以テ八王子名古屋間海田市吳間八代鹿兒島間姫路境間及篠ノ井鹽尻間ノ線路ニ著手セリ然ルニ其後明治三十年度ニ至リ海田市吳間ノ線路ニ對シテハ私設ヲ許可シ又敦賀富山間及八王子名古屋間ノ工費ニ増加ヲ要スルニ至リタルカ爲メ差引八百拾萬參千參百八拾壹圓ヲ増加シ明治三十二年度ニ至リ更ニ敦賀富山間及篠ノ井鹽尻間ノ工費ニ五百拾參萬參千貳百八拾壹圓ヲ増加シタルヲ以テ鐵道建設費總額ハ七千參百拾五萬八千參百貳拾五圓トナレリ其各線路工費ハ左ノ如シ

- 福島青森間 金千貳百六拾八萬六千貳拾九圓
- 敦賀富山間 金九百四拾九萬八千六百六拾八圓
- 八王子名古屋間 金貳千七百拾貳萬七百七拾壹圓
- 篠ノ井鹽尻間 金七百六拾七萬七千七百五拾壹圓
- 八代鹿兒島間 金八百貳拾貳萬六千七百九拾貳圓
- 姫路境間 金七百九拾四萬八千七百拾四圓
- 計金七千參百拾五萬八千參百貳拾五圓

第四 債 金

明治三十二年度ニ於テ債金支辨ノモノハ陸海軍第二期擴張費及陸軍第一期擴張費ニシテ孰レモ既定經畫ニ依ルモノナリ而シテ本年度ニ於テ債金ノ使途未定ノモノニ對シテハ貳千萬圓ヲ帝室御料ニ編入シ五千萬圓ヲ軍艦水雷艇補充基金教育基金及災害準備基金ニ繰入シテ以テ債金ノ處分ヲ了セリ今當初ヨリノ債金ノ使途ヲ左ニ掲ク

一金參億六千五百拾九萬四千九百九拾七圓六拾貳錢

債 金

内

金七千八百九拾五萬七千六百六拾四圓九拾八錢九厘

臨時軍事費特別會計繰入

金五千六百八拾貳萬千參百八拾參圓貳拾四錢九厘

陸 軍 擴 張 費

金壹億參千九百貳拾六萬參千四百貳拾參圓拾九錢七厘

海 軍 擴 張 費

金五拾七萬九千七百六拾貳圓貳錢

製 鐵 所 創 立 費

金參百貳拾壹萬四千四百八拾四圓八拾四錢六厘

臨時軍事費及運輸通信部費

金千貳百萬圓

臺 灣 經 費

金貳千萬圓

帝 室 御 料 編 入

金參千萬圓

軍 艦 水 雷 艇 補 充 基 金

金千萬圓

教 育 基 金

金千萬圓

災 害 準 備 基 金

計金參億六千八拾參萬六千貳百八拾八圓參拾錢壹厘

差引

金四百參拾五萬八千七百七拾九圓參拾壹錢九厘

使 用 殘

(註)臨時軍事費及運輸通信部費並臺灣經費ニ使用シタル分ハ決算上當初ノ豫算ニ比シ多少ノ差異アリ

異アリ

第三編第四章債金ノ部ニ掲ケタル數ト本文員數トノ間ニ差異アルハ本文員數ハ豫算經畫ニ據リタルニヨレリ

據リタルニヨレリ

第五 重要事項

明治三十二年度ニ於テ決定セラレタル財政上ノ重要事項ハ増稅案ノ成立ヲ初トシ軍備ノ擴張稅務ノ整理關稅制度ノ更新軍艦水雷艇補充基金教育基金及災害準備基金ノ設置罹災救助基金法ノ制定兌換銀行券發行制限額ノ擴張臺灣銀行ノ補助及拓殖銀行ノ設立航海獎勵法ノ改正及定期航海ノ補助製鐵事業ノ擴張森林特別經營臺灣特別事業第六高等學校ノ創立及橫濱稅關擴張等頗ル多シ今稅務其他金融又ハ債金ノ始末ト相關係スルモノハ各其篇ニ讓リ右以外ノモノニ關スル經畫ノ大體ヲ左ニ掲ケテ以テ戰後經營ノ顛末ヲ知ルニ便ス

一 第七師團完成及對馬基隆澎湖島砲臺建築

屯田兵ノ制タル北海道ノ人煙稀少ニシテ其開拓洽カラサル昔時ニ在リテハ實ニ兵備拓殖ノ兩圖ヲ兼ネタル便法ナリト雖モ單ニ軍事上ノ一方ヨリ細ニ屯田兵ノ效果ヲ查覈スルトキハ未タ其要求ヲ滿タス能ハサルモノ多アリ然ルニ今ヤ北海道ノ兵備ハ一日モ忽諸ニ付スル能ハサル時運ニ際會シタルヲ以テ漸次屯田兵ノ制ヲ廢シ以テ第七師團ノ完備ヲ速ニスルノ經畫ヲ立テ明治三十二年度ニ於テ之ニ著手セリ而シテ第七師團完成ノ曉ハ其經常費平均額貳百拾五萬

餘圓ヲ要スルノ計算ニシテ其明治三十二年度ニ於テ要スル所ノ經常費ハ四拾九萬參千九百五拾四圓五拾九錢參厘ナリ

〔註第七師團ノ完備ニ伴ヒ屯田兵ノ制ヲ縮少スルニヨリ屯田兵費ハ漸次減少スルモノトス又第七師團完備ニ要スル臨時費ハ對馬基隆澎湖島砲臺建築ニ伴フ營繕及初度調辦費ト併セテ豫算シテ

對馬ハ兵略上ノ要地ニ當リ臺灣及澎湖島ハ帝國南門ノ鎖鑰ニ當ルヲ以テ共ニ之カ防備ヲ嚴ニスルノ必要アリ依テ砲臺ヲ増築シ若クハ新築スルノ經畫ヲ定メ明治三十二年度ニ於テ之ニ著手セリ而シテ之カ爲メ要スル所ノ砲臺建築費及營繕及初度調辦費第七師團ノ分ヲ含ムハ各明治三十二年度以降同三十八年度ニ至ル繼續費ニシテ其總額左ノ如シ

一金九百八拾貳萬九千九百參拾四圓參拾四錢
砲臺建築費
營繕及初度調辦費

計金千八百四萬九千七百七拾七圓四拾六錢貳厘

其明治三十二年度ニ於テ要スル費額ハ左ノ如シ
一金參拾六萬九千五百六拾九圓拾七錢
砲臺建築費
營繕及初度調辦費

一金貳百參拾壹萬參千九百四拾壹圓四拾九錢壹厘
營繕及初度調辦費

計金貳百六拾八萬參千五百拾圓六拾六錢壹厘

〔註右ノ外本年度ニ於テ陸軍擴張費ハ物價騰貴ノ爲メ既定ノ營繕及初度調辦費ニ五百貳拾萬八千四百七拾八圓貳拾貳錢七厘臨時建築部費ニ參千五百四拾壹圓五拾錢參厘ヲ增加シ又工事

ノ都合ニ依リ藝豫海峽砲臺建築費既定額中參百參拾五萬千參百五拾壹圓九錢九厘ヲ減少シタリ又海軍擴張費ハ爲替差金ヲ減シタル爲メ百四拾五萬八千四拾八圓四拾九錢參厘ヲ減少セリ

陸海軍擴張ハ明治二十九年年度ニ始マリ其第一期第二期ヲ經テ今回第七師團設備及對馬基隆澎湖島ノ砲臺建築ニ至リ爰ニ漸ク戰後經營ニ伴フ國防事業ノ完成ヲ告クルニ至レリ其間前後四年度ニ財政上ノ重要問題タリシナリ今左ニ擴張費總額ヲ掲ケテ參照ニ資ス

陸海軍擴張費

一金壹億百五拾九萬千貳百拾六圓九拾四錢四厘

陸軍擴張臨時費

內

金貳千七百壹萬百九拾七圓五拾四錢五厘

砲臺建築費

金五千拾貳萬七千六百九拾九圓貳拾錢壹厘

營繕及初度調辦費

金千八百參拾四萬千參百五圓拾錢六厘

兵器製造費

金貳百九拾四萬九千七百七拾四錢壹厘

砲兵工廠擴張費

金貳百六拾七萬九千七百九拾圓貳拾錢八厘

作業場据置運轉資本補足額

金四拾八萬參千百拾七圓四錢參厘

臨時建築部費

一金貳億千六百六拾五萬百拾六圓參拾四錢八厘

海軍擴張臨時費

內

金壹億貳千五百拾六萬九千五百四拾七圓五拾九錢七厘

造船費

金六千六百參拾五萬五千七拾壹圓六拾七錢	造	兵	費
金貳千拾貳萬五千四百九拾七圓八錢壹厘	建	築	費
計金參億千參百貳拾四萬千參百參拾參圓貳拾九錢貳厘			
右ニ對スル財源			
一金七千七百四拾五萬八千九百七圓	公	債	
一金壹億九千六百八萬四千八百六圓四拾四錢六厘	債	金	
一金參千九百六拾九萬七千六百拾九圓八拾四錢六厘	普	通	
計金參億千參百貳拾四萬千參百參拾參圓貳拾九錢貳厘	入	歲	

二 航海獎勵法ノ改正定期航海ノ補助

航海獎勵法ノ實施以來航海業大ニ興リ有力ナル船舶増加セシヲ以テ政府ハ一方ニ於テハ右船舶ヲ一層有益ノ定期航海ニ使用シ一方ニ於テハ獎勵費ノ支出ニ制限ヲ加フルノ目的ヲ以テ明治三十三年以降同四十二年ニ至ル滿十箇年間歐洲線ニシヤトル線、桑港線ノ三航路定期航海補助トシテ毎年歐洲線ニ對シテハ貳百六拾七萬參千八百九拾四圓、シヤトル線ニ對シテハ六拾五萬四千參拾圓、桑港線ニ對シテハ百壹萬參千八百八拾圓以內ヲ斯業者ニ下附スルコトニ決定シ之ト同時ニ航海獎勵法ノ規定ヲ改正シ明治三十二年十月一日以後外國製造ノ船舶ニ對シテハ航海獎勵金ヲ半減スルコト、且航海獎勵法ノ適用ヲ明治二十九年十月一日以降十八箇年間ニ限リタリ

三 罹災救助基金法ノ制定

從來府縣ニ於テ不時ノ災害ノ爲メ多額ノ窮民救濟費ヲ支出スルニ當テハ中央備荒儲蓄金ヨリ相當ノ補助ヲ爲シ以テ救荒ノ目的ヲ達スルニ遺憾ナカラシメンコトヲ期セリ然ルニ中央備荒儲蓄金ハ明治三十一年度限り悉皆使用シ盡シタルニ依リ又從來ノ如ク補助ノ途ナキニ至レリ依テ政府ハ適當ノ方法ヲ設ケ以テ府縣ヲシテ不時ノ災害ニ處シテ救荒ノ目的ヲ誤ラサシメシムコトヲ期シ新ニ罹災救助基金法ヲ制定シ中央備荒儲蓄金ノ制度ヲ廢シテ府縣ニ於テ貯蓄スヘキ罹災救助基金ノ最低額ヲ定メ國庫ヨリ十箇年間毎年參拾萬圓ヲ各府縣ニ分付シテ基金ノ蓄積ヲ獎勵シ且府縣基金ノ百分ノ五ヲ超過シタル支出額ニ對シ國庫補助額ヲ其三分ノ一ニ制限スル等地方備荒儲蓄金ノ基礎ヲ鞏固ニシ併セテ地方自治ノ精神ヲ發揮セシムルノ趣旨ヲ以テ該法案ヲ議會ニ提出シ其協贊ヲ經タリ

四 家祿賞典處分法ノ制定

家祿賞典處分法ハ第十議會ニ於テ衆議院提出ノ法案成立發布セラレタルモノニシテ其第一條ノ規定ニ依レハ單ニ明治三年九月藩制施行以後家祿又ハ賞典祿ヲ有シタルモノニシテ明治九年公債處分ノ際藩制施行以後ニ於ケル祿高ノ錯誤ニ基ツキ其祿高ニ對スル全部又ハ一部ノ給與ヲ受ケサリシモノニ對シ給與未濟額ヲ給與スヘシトノミアリテ其所謂錯誤トハ如何ナル意義ニシテ之ヲ判斷スルノ標準ハ如何ナルモノナルヤヲ明示セサルカ故ニ往往解釋上ノ疑義ヲ生スルノ恐アリ其他家祿賞典處分法ノ規定ハ不備ノ點少カラサルヲ以テ此等ノ缺點ヲ補足シ立法ノ精神ヲ發揮センカ爲メ家祿賞典處分法施行法案ヲ提出シ議會ノ協贊ヲ得タリ抑家祿賞典處分ノコトハ財政上竝一般行政上非常ノ難問題タリシカ施行法ノ規定ニ依リ處分

上大ニ便益ヲ得ルニ至レリ

五 製鐵事業ノ擴張

製鐵所ハ明治二十九年ニ於テ總額四百九萬餘圓ノ豫算ヲ以テ明治二十九年以以降同三十二年
度ニ至ル四箇年間ノ繼續事業トシ共創立ニ著手シ其後明治三十一年度ニ於テ更ニ六百四拾七
萬餘圓ヲ追加セリ爾來創立ノ事業ハ漸次其歩ヲ進メ三十二年度ニ於テハ既ニ試製ニ著手シ得
ヘキノ時期ニ達シタルヲ以テ作業ヲ開始スルカ爲メ据置運轉資本ヲ置クノ必要アリ又製鐵所
ノ事業ハ遠大ノ經畫ニ屬シ鐵鑛石炭及石灰等ノ原料ハ到底民間少數ノ鑛業家ノ供給シ得ヘキ
所ニアラス且經濟上ヨリ其得失ヲ講究スルモ寧ロ製鐵所自ラ其原料鑛山ヲ有スルノ利ナルニ
若カサルヲ以テ原料鑛山買入ノ費用ヲ要スルカ如キ其他製品運搬ノ要口ニ當ル若松築港工事
ヲ速成セシメ以テ其運搬ノ利便ヲ計ルカ爲メ若松築港會社ニ相當ノ補助ヲ爲ス等製鐵所ノ事
業ヲシテ完全ナル效果ヲ得セシメントセハ尙ホ相當經費ノ増額ヲ爲サ、ルヘカラス依テ明治
三十二年度ニ於テ更ニ八百六拾參萬貳千八百四拾五圓ヲ増加シ製鐵所創立費ノ總額千九百貳
拾萬貳千六百九拾四圓四拾錢ニ改定セラレタリ而シテ其明治三十二年度ニ於テ要スル所ハ貳
百八拾四萬五千六百六拾八圓ナリ今製鐵所創立費ヲ財源ニ依リ區別スルトキハ左ノ如シ
一金千九百貳拾萬貳千六百九拾四圓四拾錢

製鐵所創立費

金五拾七萬九千七百六拾貳圓貳錢
金千八百六拾貳萬貳千九百參拾貳圓參拾八錢

債 金 支 辨
公 債 支 辨

六 森林特別經營

國有林野ノ經營ニ對シ大體ノ方針ヲ確定スルハ今日ノ急務ニ屬スルヲ以テ政府ハ爰ニ國有林
野ノ特別經營ヲ爲スニ決シ明治三十二年度以降同四十七年度ニ至ル十六箇年間ニ之ヲ大成ス
ルノ目的ヲ以テ之カ經畫ヲ立テタリ即チ國有林野ノ處分國有林ノ實測國有林ノ施業案編成國
有林中無立木地ノ造林及森林買上ノ五種ニ大別シ漸次之ヲ完成スルノ經畫ニシテ其成功ノ曉
ニ於テハ完全ナル森林ヲ形成シ毎年巨額ノ收入ヲ得ルノ見込ナリ國有林野經營ノコトタル十
六箇年間ニ亘ル大事業ナルヲ以テ之ヲ完全ニ遂行セントセハ必ス確實ナル財源ノ之ニ伴フモ
ノナカラサルヘカラス依テ經營事業ノ進行ニ隨テ生スヘキ不用林野ノ處分ニ依リ收入シ得ヘ
キモノヲ以テ之カ經費ニ充ツルコト、シ其歲入歲出ヲ區分スル爲メ特別會計ヲ設置セリ國有
林野經營費ノ明治三十二年度ニ於テ要スル所ハ八拾壹萬參千九百五拾八圓ナリ

七 臺灣特別事業

政府ハ臺灣島治ノ刷新ヲ圖リ吏員ヲ淘汰シ官衙ノ廢合ヲ行ヒ普通政費ノ節約ヲカムルト共ニ
臺灣歲入ノ増殖ヲ謀リ又ハ新ニ地方稅ヲ興ス等大ニ臺灣ノ財政ヲ整理シタルカ爲メ嘗テ六百
萬圓ニ上リシ民政費ノ國庫補充金モ明治三十二年度ニ於テ參百萬圓ニ下リシノミナラス漸次
遞減シ明治四十三年度ニ至レハ全ク之ヲ要セサルノ計算トナレリ
此ノ如ク一方普通政費ノ節約ヲカメ臺灣ヲシテ漸次自營ノ域ニ達セシムルコトヲ期スルト共
ニ一方新領地ノ經營ニ必要ナル事業ハ之ヲ等閑ニ付ス可ラサルヲ以テ政府ハ新ニ鐵道敷設土
地調査築港及水道ノ工事並官廳舍新營ノ事業ヲ總費額四千萬圓ノ豫算ヲ以テ各數箇年間ニ亘

ル繼續事業トシテ第十三議會ニ提出シ其協賛ヲ求メタリ蓋シ臺灣ノ縱貫鐵道ハ軍事上將タ殖
 産上極メテ必要ナルモノト認メ政府ハ曩ニ其敷設ヲ私設會社ニ許可セシモ會社ハ之カ敷設ニ
 著手セス在苒今日ニ至リ到底成功ノ見込ナキニヨリ之ヲ官設ニ移スノ外他ニ途ナキニ至レリ
 臺灣ノ土地ハ嘗テ精密ナル踏査ヲ經タルコトナキヲ以テ其地籍ノ紛糾錯雜セルノミナラス大
 租權小租權等特種ノ事情ノ存スルカ爲メ土地制度施行上不便ヲ感スルコト尠カラス結局詳細
 ナル調査ヲ爲スニアラサレハ之カ整理ヲ期ス可カラサルナリ臺灣ノ港灣ハ一二ヲ除外ハ殆
 ント港灣トシテ認ムルニ足ルモノナク且其一二ノ港灣ニ至リテモ尙ホ幾多ノ改良ヲ施スニ非
 ナレハ安全ニ船舶ヲ碇繫セシムルニ任ヘス然ルニ臺灣ノ帝國ノ領有ニ歸シテヨリ内地船舶ノ
 臺灣ニ往來スルモノ月月増加スルノミナラス臺灣貿易ハ漸次發達ノ運ニ向フヲ以テ今日ニ於
 テ其港灣ヲ改築シ安全ナル碇繫地ト爲スハ洵ニ其急務ナリト謂ハサルヘカラス其他水道工事
 及官廳舍新築ノ如キ皆臺灣ノ經營上直接間接ニ必要ナルモノナリ
 以上ニ列記シタル事業ハ臺灣ノ經營上一日モ緩ウスヘカラサルモノナルヲ以テ政府ハ水道工
 事ヲ除外ハ皆明治三十二年以以降同三十五年度又ハ同四十一年度ニ至ル繼續事業トシ明治
 三十二年度ニ於テ之ニ著手スヘキコトニ決シ其總費額四千萬元ニ對シテハ臺灣事業公債ヲ募
 集シテ之ニ充ツルコトヘシテ公債ノ償還及利子ノ支拂ハ總テ臺灣歲入ヲ以テ之ニ充ツ
 ルノ經畫ニシテ要スルニ今回ノ事業ニ對シテハ臺灣ヲシテ獨力其負擔ニ任セシムルノ方針ヲ
 執レリ

議會ハ審査討議ヲ經タル末水道工事ノ全部ヲ削除シ官廳舍新營費ニ削減ヲ加ヘ鐵道敷設費ニ

修正ヲ施シ總費額四千萬元ヲ參千五百萬元ニ減額セリ然レトモ土地調査築港工事ハ原案ヲ費
 成シ鐵道敷設費ハ僅少ノ削減ヲ加ヘタルニ過キササルヲ以テ敢テ事業ノ進行ニ支障ヲ生スルコ
 トナカルヘク特別事業費ノ成立ハ臺灣ノ經營ニ資スルコト蓋シ鮮少ナラサル可シ其各事業ニ
 要スル費額ハ左ノ如シ

一金貳千八百八拾萬圓

臺灣鐵道建設及改良費

一金貳百萬圓

基隆築港費

一金參百萬圓

臨時臺灣土地調査費

一金百貳拾萬圓

官廳舍新營費

計金參千五百萬圓

其明治三十二年度ニ於テ要スル費額ハ左ノ如シ

一金貳百萬圓

臺灣鐵道建設及改良費

一金參拾五萬圓

基隆築港費

一金五拾萬圓

臨時臺灣土地調査費

一金參拾五萬圓

官廳舍新營費

計金參百貳拾萬圓

八 教育事業ノ擴張

明治三十二年度ニ於テ外國留學生ヲ増派シ又ハ地方視學制度ヲ擴張スル等教育事業ノ擴張ニ
 勉メタルモノ頗ル多シ就中其最モ著シキモノハ第六高等學校ノ創立ナリ

近年教育ノ進歩ニ伴ヒ中學校ノ卒業生著シク増加シ高等學校ニ入ラントスル者モ亦大ニ其數ヲ増加セシヲ以テ到底現在ノ各高等學校ノミニテハ其來學ニ應スル能ハス斯ノ如ク校舍不足ノ爲メ青年學生ノ進學ヲ障碍スルハ國家教育上最モ憂慮スヘキコトナルヲ以テ政府ハ此際第六高等學校ヲ創立シ以テ刻下焦眉ノ急ニ應スルカ爲メ其創立費總額貳拾萬九千貳拾八圓七拾五錢ヲ以テ明治三十三年度ニ渉ル繼續費トシ明治三十二年度ニ於テ之ニ著手セリ而シテ其本年度ニ於テ要スル所ハ貳萬圓ナリ

九 横濱税關ノ擴張

横濱税關ノ外國貿易ハ逐年増進シ輸出入ノ貨物ハ將來著シキ増加ヲ爲スノ見込アルニ拘ハラズ現在ノ同關用地ハ甚タ狹隘ニシテ出入貨物ノ輻湊スルトキハ之カ處理上不便ヲ感スルノミナラス事務ノ敏捷ヲ妨クル場合尠カラス依テ同關地先ノ海面ヲ埋立テ倉庫上屋貨物揚卸場等ノ増築ヲ爲シ其他貨物ノ運搬ヲ一層便利ナラシムル設備ヲ爲ス等大ニ横濱税關擴張ノ必要アルヲ以テ其第一著手トシテ海面埋立ノ設計ヲ爲シ其總費額貳百參拾四萬五千五百九拾圓參拾八錢參厘ヲ以テ明治三十二年度以降同三十六年度ニ至ル繼續費トシ明治三十二年度ニ於テ之ニ著手セリ而シテ其本年度ニ於テ要スル所ハ拾八萬圓ナリ

右ノ外法典施行ノ結果區裁判所及同出張所ノ増設警察監獄官練習所ノ設置其他京都蠶業講習所設置ノ如キ皆明治三十二年度ニ於ケル重要事項ナリ

第五章 明治三十三年度豫算

第一 歳入歳出

明治三十三年度總豫算ハ歳入經常部壹億九千參百七拾參萬百八拾四圓歳入臨時部六千八拾壹萬九千六百參拾八圓ニシテ歳入總計貳億五千四百五拾四萬九千八百拾八圓歳出經常部壹億五千貳百四拾萬八千五百參拾四圓六拾四錢七厘歳出臨時部壹億貳百拾四萬千貳百八拾參圓拾壹錢五厘ニシテ歳出總計貳億五千四百五拾四萬九千八百拾七圓七拾六錢貳厘ナリ

明治三十三年度歳入ハ通常歳入公債募集金及債金繰入ヨリ成ル其内譯左ノ如シ

明治三十三年度歳入内譯

一金貳億五千四百五拾四萬九千八百拾八圓

歳入總計

内

金壹億九千八百六拾壹萬參千四百貳拾九圓

通常歳入

金參千貳百拾八萬參千六百五拾圓

公債募集金

金貳千參百七拾五萬貳千七百參拾九圓

債金繰入

(註)公債募集金ノ内譯左ノ如シ

金千貳百八拾五萬參千圓

鐵道公債

金千九拾參萬六百五拾圓

事業公債

金百萬圓

北海道鐵道公債

金六百四拾萬圓

臺灣事業公債

計金參千貳百拾八萬參千六百五拾圓

明治三十三年度歳出ハ通常財源支辨公債募集金支辨及債金繰入支辨ヨリ成ル其内譯左ノ如シ

明治三十三年度歳出入内譯

一金貳億五千四百五拾四萬九千八百拾七圓七拾六錢貳厘	歳出	總計
---------------------------	----	----

金壹億九千八百六拾壹萬參千四百六拾貳圓六拾八錢七厘	通常財源支辨
金參千貳百拾八萬參千六百拾六圓九拾六錢八厘	公債募集金支辨
金貳千參百七拾五萬貳千七百參拾八圓拾錢七厘	債金繰入支辨

戰後經營ノ爲メ畫策セル第二ノ増稅經畫モ遂ニ第十三議會ニ於テ成立シ戰後財政ノ整理モ粗ホ一段落ヲ告ケシヲ以テ今後ハ漸次國力ノ増進ト相須テ徐徐ニ戰後經營ヲ完成シ國家財政ノ基礎ヲ鞏固ニシ併セテ民力休養ヲ圖ルノ極メテ適切ナルヲ認メ正義ハ明治三十三年度豫算ヲ調製スルニ當リテハ成ルヘク既定ノ經畫ニ據リ財源ノ許ス範圍内ニ於テ新事業ニ著手スルコト、シ以テ歳入歳出ノ平均ヲ得セシムルニ勉メタリ故ニ明治三十三年度豫算ハ數年來ノ豫算ニ於ケルカ如ク債金ヲ繰替使用シ若クハ一時借入金ヲ爲シテ以テ漸ク歳入不足ヲ補填シタルカ如キコトナク始メテ平調ニ復シタルモノナリ

此ノ如ク明治三十三年度ノ豫算ハ勉メテ既定ノ經畫ニ據リ以テ歳入歳出ノ平均ヲ計リタリト雖モ亦殖産興業其他國民ノ福利ヲ増進スヘキ事業ニ對シテハ財源ノ許ス範圍内ニ於テ之カ經畫ヲ立テ以テ戰後經營ノ效果ヲシテ益々完美ノ域ニ達セシメンコトヲ力メタリ故ニ運輸交通教育治水等明治三十三年度豫算ヲ以テ新ニ著手セラレタル事業頗ル多シ

明治三十三年度ニ於ケル債金支辨ノ費途ハ既定ノ經畫ニ據リ別ニ増減スル所ナシ公債支辨ノ費

途ニ至リテモ亦第一期線鐵道敷設費ニ若干ノ増額ヲ見タルノ外既定ノ經畫ト異ナル所ナシ但客年六月倫敦ニ於テ募集シタル外國債ノ額面不足額千三百六拾餘萬圓ヲ補充スルカ爲メ明治三十三年度以降年年既定ノ公債募集額ノ内百萬圓ヲ限リ通常歳入ヲ以テ振換フルコト、ナシタルニヨリ明治三十三年度ニ於ケル公債募集金ハ既定經畫ニ比シ百萬圓ヲ減スルコト、ナレリ蓋シ倫敦募集ノ外國債壹千萬磅ニ對シ實際國庫ニ收入シタル高ハ八百六拾萬磅ナルヲ以テ百四拾萬磅即チ我通貨ニ換算シ千參百六拾餘萬圓ノ額面不足額ヲ生スト雖モ一方ニ於テハ該外國債ハ四分利ナルヲ以テ之ヲ内地募集ノ公債ノ通例五分利ナルニ比スルトキハ其利子ニ於テ一箇年約百萬圓ノ差益アリ十數年ノ後ニ至レハ優ニ額面不足額ヲ償ウテ餘リアルニヨリ之ヲ以テ公債支辨ノ費途ニ振換使用スルコト、ナシタルモノニシテ此方法ニ依ルトキハ額面ノ補充ニ對スル公債募集ヲ要セサル計算ナリ

第一期線鐵道建設費ハ福島青森間線路ニ關シ千九百五拾貳萬九千八百八拾六圓及海田市吳間ノ鐵道ヲ敷設スルコト、ナシタルカ爲メ貳百拾五萬六千貳百四拾八圓ヲ既定額ニ増加シタルニヨリ第一期鐵道建設費總額ハ九千四百八拾四萬四千四百五拾九圓トナレリ

第二 重要事項

明治三十三年度ニ於テ經畫セラレタル各事業中其重要ナルモノヲ舉クレハ左ノ如シ

一 公使館ノ設置

西班牙國政府ハ明治初年以來既ニ其公使ヲ我東京ニ駐劄セシメタルモ帝國政府ハ維新後日尙ホ淺クシテ公使館設置ノ數多カリシカ爲メ今日尙ホ未タ公使ヲ派遣セス國際上ノ禮儀ニ適セ

ル所アルヲ以テ明治三十三年十月ヨリ同國ニ公使館ヲ設置スルコト、シ其經費五萬九千七百六拾圓ヲ豫算セリ

二 在外帝國專管居留地ノ經營

清國ニ於テ帝國專管居留地ヲ設置シタルモノ既ニ七箇所ニ及ヒ目下尙ホ交渉中ノモノ一箇所アリト雖モ概ネ皆草莽ノ地ニシテ開市港場ノ體裁ヲ具フルモノナシ依テ之カ設備ヲ完成シテ帝國ノ體面ヲ保全シ貿易ノ擴張ヲ計ルハ極メテ緊要ナルモノト認メ明治三十三年度ニ於テ其經營ヲ立テタリ即チ專管居留地經營ニ關スル特別會計ヲ設置シ國庫ヨリノ一時借入金ヲ以テ之カ資金トシ漸次居留地ノ經營ヲ完成シ設備ノ成ルニ隨ヒ地區ヲ公賣シ一面國庫ノ借入金ヲ返済シ一面居留地經濟自營ノ基礎ヲ建テシムルノ目的ヲ以テ其法案ヲ第十四議會ニ提出シ其協賛ヲ得タリ

三 監獄費ノ國庫支辨

府縣監獄費ヲ國庫支辨ニ移スコトハ多年ノ經畫ナリシト雖モ財政ノ許サ、リシカ爲メ未タ之ヲ實行スルヲ得サリキ然ルニ第十三議會ニ於テ増稅經畫ノ成立シタルカ爲メ本年十月ヨリ愈之ヲ實施スルコト、ナシ其半箇年分ニ要スル經費貳百貳拾壹萬四千貳百九拾四圓ヲ明治三十三年度ニ於テ豫算セリ

四 河川ノ改修

抑我邦洪水ノ被害ハ連年甚シク毎年水害復舊工事費トシテ國庫及地方經濟ヨリ支出スルモノ平均千萬圓ヲ下ラス多キハ殆ント貳千萬圓ノ上ニ出テタリ此他荒地免租ノ爲メ歳入ノ減少シ

及難民救済ノ爲メ支出スルモノヲ計算スルトキハ實ニ驚クヘキ金額ナリ況ンヤ水害ノ爲メ人民直接ノ損害ニ屬スルモノニ至リテハ殆ント量ルヘカラサルモノアルニ於テヤ實ニ國家非常ノ損耗ニシテ畢竟スルニ治水ノ道未タ悉クサ、ル所アルニヨラスンハアラス依テ明治三十三年度ニ於テ利根川庄川及九頭龍川ノ改修ニ著手スルコト、セリ即チ利根川ハ明治三十三年度以降同三十八年度ニ至ル繼續工事ニシテ其工費總額參百九拾六萬八千四百七拾八圓四拾貳錢八厘庄川ハ明治三十三年度以降同三十八年度ニ至ル繼續工事ニシテ其工費總額貳百九拾貳萬貳千四百參拾貳圓及九頭龍川ハ明治三十三年度以降同四十二年度ニ至ル繼續工事ニシテ其工費總額參百八拾壹萬千貳百拾圓ナリ故ニ三川改修費總額ヲ合スルトキハ千七拾萬貳千七百貳拾圓四拾貳錢八厘ノ巨額ニ上ルト雖モ右ノ内地方分擔ニ屬スル額參百七拾萬貳千七百參拾參圓貳拾壹錢ヲ除クトキハ全ク國庫ニ於テ支出スヘキ額ハ六百九拾九萬九千參百八拾七圓貳拾壹錢八厘ナリ而シテ其明治三十三年度ニ於テ豫算シタルモノハ利根川參拾萬貳千參百五拾四圓四拾九錢七厘庄川拾四萬貳千圓九頭龍川拾貳萬五千圓ニシテ俱ニ地方分擔金ヲ以テ支辨スルモノナリ

五 水道ノ補助

近年傳染病流行ノ害ハ益々甚クシク之カ爲メ國庫及地方經濟ニ於テ毎年支出スル所ノ金額漸ク巨額ニ上リ且各個人ノ負擔ニ屬スル損害ニ至リテハ頗ル驚クヘキモノアリ若シ此儘ニ放任スルトキハ國家ノ經濟ヲ損傷シ貿易ノ頓挫ヲ招クニ至ルヘク一般公衆ノ衛生就中飲料水ヲ改良シ以テ病毒傳播ノ根源ヲ絶ツハ實ニ今日ノ急務ナリト謂フヘシ依テ水道築造費補助トシテ長崎

市ニ工費ノ約三分ノ一四拾貳萬七千圓赤間關市ニ工費ノ約三分ノ一貳拾五萬圓及岡山市ニ工費ノ約四分ノ一貳拾萬七千圓ヲ明治三十三年度以降數箇年度ニ涉リ補助スルコト、シ明治三十三年度ニ於テ各壹萬圓ヲ豫算セリ

六 税關ノ擴張

神戸港ノ貿易ハ近來頓ニ増進シ昨明治三十二年ノ如キハ輸出入總額壹億九千五百餘萬圓ニ達シ之ヲ五箇年以前ノ貿易額ニ比スルトキハ殆ント二倍ノ巨額ニ達セリ然ルニ神戸税關ノ規模今日ノ現況ニ伴ハサルカ爲メ輸入貨物ノ荷揚等ニ差支ヲ生シ延テ貿易ノ發達ニ妨害ヲ與フルノ虞アリ依テ相當ニ其規模ヲ擴張シ完全ナル設備ヲ爲スノ必要アリト雖モ一時ニ之ヲ經畫スルコトハ到底歲計ノ許サ、ル所ナルニヨリ先以テ此際應急ノ設備ヲナスカ爲メ民有土地建物ノ買收及上屋倉庫等ノ建築費トシテ明治三十三年度ニ於テ拾參萬參千九百五拾貳圓海面波止新設費トシテ明治三十三年度ヨリ明治三十四年度ニ涉ル繼續費總額拾五萬圓共明治三十三年度ニ於テ要スル年割額八萬六千五百圓ヲ豫算セリ

七 教育事業ノ擴張

明治三十三年度ニ於テ教育事業ノ擴張ヲ爲セシモノ頗ル多シ就中第二高等師範學校第二高等商業學校高等工業學校高等農林學校ノ創立及普通教育費ノ補助ハ其最モ著シキモノナリ國運ノ伸張ニ伴ヒ普通教育ノ擴張改頁ヲ施スハ極メテ必要ナリト雖モ現時ノ狀況タル小學並中學ノ教員及師範學校ノ教員ニ缺乏ヲ感スルコト甚シキヲ以テ先ツ此等教員ノ補充ヲ爲スノ要アリ到底現在ノ一高等師範學校ヲ以テシテハ此目的ヲ達スル能ハサルニヨリ更ニ第二高等

師範學校ヲ創立スルノ經畫ヲ定メ創立費總額參拾貳萬六千九百拾圓ヲ以テ明治三十三年度以降同三十九年度ニ至ル繼續費トシ之ニ著手セリ但創立費中拾五萬圓ハ設立地方ノ寄付ニ係ルヲ以テ實際國庫ノ支出額ハ拾七萬六千九百拾圓ナリ而シテ明治三十三年度ニ於テ要スル創立費ハ壹萬圓ニシテ地方寄付金ヲ以テ支辨スルモノナリ

内地商業ノ發達海外貿易ノ擴張ニ從ヒ商業教育ノ發達ヲ圖ルハ刻下須要ノ事業ニ屬ス然ルニ高等ノ商業教育ヲ施ス所ハ東京ニ唯一ノ高等商業學校アルノミナルヲ以テ全國幾多ノ商業ニ志ス者ヲシテ其希望ヲ達スルコト能ハサラシメ隨テ商業教育ノ發達ヲ企圖スル上ニ於テ遺憾尠カラサルニ依リ更ニ第二高等商業學校ヲ創立スルノ經畫ヲ定メ創立費總額拾九萬七千四百貳圓ヲ以テ明治三十三年度以降同三十七年度ニ至ル繼續費トシ之ニ著手セリ但創立費中五萬圓ハ設立地方ノ寄付ニ係ルヲ以テ實際國庫ノ支出額ハ拾四萬七千四百貳圓ナリ而シテ明治三十三年度ニ於テ要スル創立費ハ貳萬五千圓ニシテ地方寄付金ヲ以テ支辨スルモノナリ

美術工藝ノ製作品ハ本邦固有ノ物産ナリト雖モ之カ製作家ニシテ斯道ノ教育ヲ受ケタル者尠キカ爲メ其意匠圖案等未タ巧妙ノ域ニ達セス爲ニ海外ニ於ケル本邦製作品ノ聲譽ニ缺クル所アルハ頗ル遺憾トスル所ナリ依テ斯道ノ教育ヲ施ス爲メ高等工業學校ヲ創立スルノ經畫ヲ定メ創立費總額貳拾七萬六千圓ヲ以テ明治三十三年度以降同三十七年度ニ至ル繼續費トシ之ニ著手セリ但創立費中五萬圓ハ設立地方ノ寄付ニ係ルヲ以テ實際國庫ノ支出額ハ貳拾貳萬六千圓ナリ而シテ明治三十三年度ニ於テ要スル創立費ハ五萬圓ニシテ地方寄付金ヲ以テ支辨スルモノナリ

近時農耕畜産等ノ事業ノ發達ニ伴ヒ學術ヲ應用スルノ必要益、加ハリ現在ノ農學校ノミニテハ之カ需要ヲ充タス能ハサルニ依リ更ニ高等農林學校ヲ創立スルノ經畫ヲ定メ創立費總額拾六萬七千圓ヲ以テ明治三十三年度以降同三十五年度ニ至ル繼續費トシ之ニ著手セリ但創立費中拾萬圓ハ設立地方ノ寄付ニ係ルヲ以テ實際國庫ノ支出額ハ六萬七千圓ナリ而シテ其明治三十三年度ニ於テ要スル創立費ハ五萬圓ニシテ地方寄付金ヲ以テ支辨スルモノナリ

第十三議會ノ協贊ヲ經成立シタル教育基金特別會計法ニ依ル教育基金ノ利殖金五拾萬圓ヲ以テ各地方ノ市町村立尋常小學校ノ設備並教員獎勵費ニ充ツルノ經畫ヲ定メ明治三十三年度ニ於テ之ヲ豫算セリ又從來ノ小學校教員年功加俸ニ關スル制度及客年成立シタル小學校教育費國庫補助法ハ共ニ現時ノ狀勢ニ照ラシ不完全ノ點アルヲ免レテ右ノ兩法ニ代フルノ目的ヲ以テ更ニ市町村立小學校教育費國庫補助法案ヲ第十四議會ニ提出シ其協贊ヲ得テ成立シタルカ故ニ小學校教育費ノ補助トシテ明治三十三年度ニ於テ百萬圓ヲ豫算シタリ多年ノ宿題タリシ普通教育費ノ補助ハ此ニ至リ始メテ實行ヲ見ルニ至レリ

以上ニ述ヘタルモノ、外尙ホ從來ノ諸學校ノ規模ヲ擴張シ其他外國留學生ヲ増遣スル等明治三十三年度ニ於テ教育事業ノ擴張ヲ爲シタルモノ頗ル多シ

八 種牛改良、燐礦調査、工業試驗所設置

明治三十三年度ニ於テモ亦種牛ノ改良、燐礦ノ調査及工業試驗所ノ設置等農工業ノ改良發達ヲ企圖シテ經畫シタルモノ頗ル多シ今其重要ナルモノヲ左ニ記述セン

產牛ハ國家ノ産業上必要缺クヘカラサルモノニシテ其改良ノ成否ト蕃殖ノ盛衰トハ大ニ國家

經濟ノ消長ニ關スルモノアリ然ルニ今日ノ實況ヲ觀察スルニ生産ト消耗トハ大ニ其平衡ヲ失フノミナラス種類ト血統トハ益、劣惡ニ陷ラントスルヲ以テ斯業ノ振興ヲ圖ルハ目下ノ急務タルヲ認ム依テ種牛場ヲ設置シ良種牛供給ノ途ヲ開キ廣ク產牛ノ改良蕃殖ヲ獎勵スル目的ヲ以テ其經費七萬八千七百六拾五圓拾五錢ヲ明治三十三年度ニ於テ豫算セリ

農業ノ發達ニ伴ヒ益、肥料ノ精選ヲ要スルヲ以テ肥料ノ原料タル燐礦ノ調査ヲ爲スノ目的ヲ以テ其經費壹萬六千四百八拾參圓拾錢ヲ明治三十三年度ニ於テ豫算セリ

近時本邦ノ工業漸ク刷新ノ運ニ向ヒ舊慣古法ヲ改良シ新規ノ方法ヲ採用シ以テ内外ノ需用ニ適應セシメントスルニ當リ輸入原料又ハ輸出製品ニ就テ其分析試驗ヲ要スルモノ甚タ多ク確實ナル試驗ノ成績ニ基ツキ改良ノ方法ヲ立ツヘキモノ一ニシテ足ラス依テ新ニ工業試驗所ヲ設立シ廣ク官民ノ請求ニ應シテ諸般ノ試驗檢定ヲ施シ其成績ヲ公ニシテ技術上ノ指導ヲ爲シ以テ本邦工業ノ發達ヲ裨補セントシ工業試驗所設置ニ要スル經費五萬五千五百貳拾壹圓五拾五錢ヲ明治三十三年度ニ於テ豫算セリ

以上ニ述ヘタルモノ、外尙ホ水産實習場設置、種馬所増設其他商品陳列所漁業組合ノ補助等明治三十三年度ニ於テ産業ノ發達ニ關シ施設シタルモノ頗ル多シ

九 鐵道建設費ノ増額

官設鐵道第一期線中福島青森間ノ線路ハ明治二十六年ニ於テ工費總額千五百八拾五萬七千六百五拾八圓ノ豫算ヲ以テ敷設ニ著手シタリ然ルニ爾來物價勞銀ノ昂騰シタルト多少設計ニ變更ヲ要スルモノアルトノ爲メ既定ノ工費ヲ以テシテハ到底敷設ヲ完ウスルヲ得サルニ至リタ

ルヲ以テ明治三十三年度ニ於テ更ニ既定工費ニ千九百五拾貳萬九千八百八拾六圓ヲ追加シタリ而シテ其明治三十三年度ニ於テ要スル改定年割額ハ參百五拾萬圓ナリ

八王子名古屋間ノ線路ハ工事ノ都合ニヨリ明治三十七年度ノ年割額百七拾貳萬七百七拾壹圓ヲ繰上ケ明治三十三年度以降同三十六年度ニ至ル各年割額ニ分割増加シタリ而シテ其明治三十三年度ニ於テ要スル改定年割額ハ四百參拾萬圓ナリ

海田市吳間ノ線路ハ曩ニ私設鐵道會社ニ其敷設ヲ許可セシモ尙ニ其成功ヲ見ルニ至ラサルヲ以テ政府ニ於テ之ヲ敷設スルコト、シ工費總額貳百拾五萬六千貳百四拾八圓ヲ以テ明治三十三年度以降同三十五年度ニ至ル繼續費トシ之ニ著手セリ而シテ其明治三十三年度ニ於テ要スル年割額ハ參拾五萬圓ナリ

十 定期航路ノ補助

政府ハ日本郵船株式會社ニ對シ明治十八年九月下付ノ命令書ニ基ツキ毎年八拾八萬圓ヲ補助シ以テ橫濱上海神戶天津神戶牛莊神戶浦鹽斯德神戶小樽橫濱四日市青森室蘭及北海道沿革ノ諸線ニ於ケル定期航路ヲ開始セシメタリ然ルニ該命令書ノ有效期限ハ明治三十三年九月ヲ以テ滿了スルニヨリ此際定期航路ニ對シ將來ノ方針ヲ確定スルノ必要アリ依テ既往現在ノ狀況ニ顧ミ十分廟議ヲ悉シタル結果橫濱上海線神戶韓國線神戶北清線神戶韓國北清線及神戶浦鹽斯德線ハ帝國ト露國清國及韓國トノ間ニ於ケル交通上樞要ノ航路ニ屬シ神戶小樽線又青森室蘭線ハ帝國ノ交通上至要ノ關係ヲ有シ本島及北海道ニ於ケル産業ノ發達上重大ノ影響ヲ有スル航路ナルヲ以テ此線路ニ於ケル定期航海ヲ扶殖スルハ極メテ緊要ノコトナルヲ認メ右諸線

ニ對シ明治三十三年十月ヨリ同三十八年九月マテ滿五箇年間毎年五拾八萬圓以內ヲ補助支出スル爲メ豫算外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ結フノ件ヲ第十四議會ニ提出シ其協贊ヲ得タリ

函館根室間小樽稚內間根室網走間及根室擇捉間ニ於ケル北海道沿岸線モ亦同道ノ拓殖上重大ナル關係ヲ有スルヲ以テ其定期航海ノ保護ヲ必要ト認メ明治三十三年十月ヨリ同三十八年九月マテ滿五箇年間毎年函館根室線ニ四萬四千參百四拾圓以內小樽稚內線ニ四萬參千四百七拾貳圓以內根室網走線ニ壹萬七千百拾貳圓以內根室擇捉線ニ貳萬貳千四百七圓以內ヲ補助支出スル爲メ豫算外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ結フノ件ヲ第十四議會ニ提出シ其協贊ヲ得タリ

以上ノ外楊子江航路ハ既往ノ實踐ニ徵シ使用船舶ノ増加ヲ要スルニ依リ既定補助額ヲ改メ更ニ明治三十四年度ニ於テ貳拾九萬千八百四拾八圓六錢貳厘以內明治三十五年度ヨリ同三十九年度マテ毎年參拾五萬四千九百四拾貳圓五拾貳錢四厘以內明治四十年度ニ於テ貳拾六萬六千貳百六圓八拾九錢參厘以內ヲ補助支出シ又上海蘇州間及上海杭州間ノ航路ハ明治三十一年度ニ於テ相當補助ヲ與ヘ開始シ來リシモ蘇州杭州間ノ聯絡ナキヲ以テ航路ノ完全ヲ缺クノ嫌アリ且此線路ハ極メテ樞要ノモノナルヲ以テ既設航路ニ聯絡シテ定期航路ヲ開始セシムルカ爲メ上海蘇州杭州間ノ航路ニ對シ明治三十四年度及同三十五年度ニ於テ毎年五萬七千八百七拾參圓以內明治三十六年度ニ於テ壹萬四千四百六拾八圓貳拾五錢以內ヲ補助支出スルコト、シ共ニ豫算外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ爲スノ件ヲ第十四議會ニ提出シ其協贊ヲ得タリ

(註本文楊子江航路補助金額ハ議會ニ於テ削減シタルモノナルニヨリ政府ノ原案ト多少ノ差異アリ)

十一 臺灣鐵道建設及改良費年割額ノ變更

臺灣鐵道建設及改良費ハ前年度ニ於テ明治三十二年度以降同四十一年度ニ至ル繼續事業トシテ決定セラレタルモノナリ然ルニ爾來工事進行ノ實況ニ徴スルトキハ明治三十三年度ノ年割額ハ不足ヲ告クルノ見込ナルヲ以テ明治四十一年度ノ年割額ノ内貳百萬圓ヲ繰上ケ支出スルコト、ナシ明治三十三年度ノ既定年割額貳百五拾萬圓ヲ四百五拾萬圓ニ改定シタリ

第六章 特別會計

明治二十三年作業條例ニ據ル歲入歳出其他一般會計以外ニ關スル收支ニシテ必要ナルモノニ對シ各特別會計法ヲ制定シ以テ各自獨立ノ經濟ヲ立テシメタルモノヲ概括スレハ作業會計ニ屬スルモノ九官立學校及圖書館會計ニ屬スルモノ十七資金會計其他ニ屬スルモノ六合計三十二アリ即チ左ノ如シ

作業會計

- 一 造幣局
- 一 印刷局
- 一 富岡製絲所
- 一 電信燈臺用品製造所
- 一 廣島鑛山
- 一 東京砲兵工廠
- 一 大阪砲兵工廠

- 一 千住製絨所
- 一 官設鐵道

官立學校及圖書館會計

- 一 帝國大學
- 一 高等師範學校
- 一 女子高等師範學校
- 一 第一高等中學校
- 一 第二高等中學校
- 一 第三高等中學校
- 一 第四高等中學校
- 一 第五高等中學校
- 一 山口高等中學校
- 一 鹿兒島高等中學造士館
- 一 高等商業學校
- 一 東京工業學校
- 一 東京美術學校
- 一 東京音樂學校
- 一 東京盲啞學校

一 東京圖書館
一 東京農林學校

資金會計其他

- 一 鎮守府造船材料資金(横須賀鎮守府)
- 一 整理公債金
- 一 紙幣交換基金
- 一 鎮店銀行紙幣交換基金
- 一 中央備荒儲蓄金
- 一 預金利子

今明治三十三年以降ニ於ケル特別會計ノ廢興ヲ述フレハ左ノ如シ

明治二十三年度ニ於テ農商務省ノ所管タリシ東京農林學校ヲ帝國大學ニ合併シタリ
 明治二十六年度ニ於テ鐵道敷設法ニ依ル鐵道公債金ヲ特別會計トナシ而シテ富岡製絲所ヲ拂下
 ケ其處分ヲ結了シタルヲ以テ該特別會計ヲ終結シ鎮守府造船材料資金ノ内ヲ以テ佐世保鎮守府
 ニ造船事業ヲ開始セリ又各高等中學校ヲ高等學校ト改稱シタリ
 明治二十七年年度ニ於テ官設鐵道ノ運轉資本ヲ割キ官設鐵道用品資金トナシ以テ特別會計ヲ設置
 シタリ又日清戰役ニ關スル臨時軍事費ヲ特別會計トナシ明治二十九年三月三十一日ヲ以テ之カ
 終結ヲ告ケタリ又東京音樂學校ヲ高等師範學校附屬トナシタル爲メ明治二十七年年度限リ兩校ノ
 經濟ヲ合併シタリ

明治二十八年年度ニ於テ清國ヨリ領收スヘキ債金及前年度マテ内務省ノ所管ニシテ一般會計ノ經
 濟タリシ札幌農學校ヲ文部省ノ直轄トナシ特別會計ヲ設置シタリ

明治二十九年年度ニ於テ營業滿期トナルヘキ國立銀行アルヲ以テ之カ紙幣ノ交換整理ヲナスノ必
 要ヲ生シ該交換基金ノ特別會計ヲ設置シ又大阪工業學校ノ授業ヲ開始シタルヲ以テ之カ特別會
 計ヲ設置シタリ而シテ鹿兒島高等中學造士館ノ特別會計ヲ同年度限リ廢止シタリ

明治三十年度ニ於テ京都帝國大學ノ授業ヲ開始シ又葉煙草ヲ專賣トシ該資金ヲ置キ又臺灣總督
 府ノ經濟ヲ分離シタルカ爲メ各特別會計ヲ設置シタリ而シテ帝國大學ヲ東京帝國大學東京圖書
 館ヲ帝國圖書館ト改稱セリ

明治三十一年度ニ於テ整理公債金特別會計ヲ同年度限リ廢止セリ

明治三十二年度ニ於テ製鐵所作業、森林資金、軍艦水雷艇補充基金、災害準備基金、教育基金ニ關シ各
 特別會計ヲ設置シ又鐵道公債金ニ事業公債ヲ加ヘ事業公債及鐵道公債金ト改メタリ

又中央備荒儲蓄金及鎮店銀行紙幣交換基金ノ兩特別會計ハ同年度限リ自然廢止ニ歸セリ

明治三十三年度ニ於テ在外國帝國專管居留地ノ經營ニ關シ特別會計ヲ設置シ海軍造兵材料資金
 ニ關スル特別會計ヲ設置シ及第六高等學校ヲ授業ヲ開始スルヲ以テ之カ特別會計ヲ設置セリ又
 葉煙草專賣資金ヲ明治三十二年度限リ廢シ作業會計トナシタリ又高等師範學校ヨリ東京音樂學
 校ヲ分離シ高等商業學校ヨリ東京外國語學校ヲ分離シ各特別會計ヲ設置セリ
 今明治三十三年度ニ於ケル各特別會計ノ種類名稱ヲ掲クレハ左ノ如シ

作業會計

- 一 造幣局
- 一 印刷局
- 一 專賣局
- 一 東京砲兵工廠
- 一 大阪砲兵工廠
- 一 千住製絨所
- 一 廣島鑛山
- 一 製鐵所
- 一 官設鐵道
- 一 電信燈臺用品製造所

計十

官立學校及圖書館會計

- 一 東京帝國大學
- 一 京都帝國大學
- 一 高等師範學校
- 一 女子高等師範學校
- 一 札幌農學校
- 一 高等商業學校

- 一 第一高等學校
- 一 第二高等學校
- 一 第三高等學校
- 一 第四高等學校
- 一 第五高等學校
- 一 第六高等學校
- 一 山口高等學校
- 一 東京工業學校
- 一 東京外國語學校
- 一 東京美術學校
- 一 東京音樂學校
- 一 大阪工業學校
- 一 東京盲啞學校
- 一 帝國圖書館

計二十

資金會計其他

- 一 北海道官設鐵道用品資金
- 一 特別資金

一 貨幣整理資金
一 軍艦水雷艇補充基金
一 災害準備基金
一 教育基金
一 橫須賀鎮守府造船材料資金
一 吳鎮守府造船材料資金
一 佐世保鎮守府造船材料資金
一 海軍造兵材料資金
一 森林資金
一 官設鐵道用品資金
一 在外國帝國專管居留地
一 臺灣總督府
一 預金利子
一 事業公債及鐵道公債金
一 紙幣交換基金
一 營業滿期國立銀行紙幣交換基金
計十八
合計四十八

又前記ノ各特別會計ニ屬スル資本資金及明治三十三年度ノ豫算ヲ掲クレハ左表ノ如シ

各特別會計資本及資金一覽表

區分	金額
造 作 業 會 計 局	一、五六八、二九九、六〇六
運 轉 資 本	九、九八、二一一、七一九
固 定 資 本	五、七〇〇、八六八、八八七
印 刷 局	一、二六五、七四四、二四八
運 轉 資 本	三、七〇〇、〇〇〇、〇〇〇
固 定 資 本	八、九五七、七四四、二四八
專 賣 局	五、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇
運 轉 資 本	五、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇
固 定 資 本	四、八〇三、七二三、三一七
東 京 砲 兵 工 廠	二、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇
運 轉 資 本	二、八〇三、七二三、三一七
固 定 資 本	三、六〇二、六九一、四一〇
大 阪 砲 兵 工 廠	一、五〇〇、〇〇〇、〇〇〇
運 轉 資 本	二、一〇二、六九一、四一〇
固 定 資 本	〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇

千住製絨所	運轉資本	一三,一三六,五八〇	九,三三四
廣島鑛山	運轉資本	六〇〇,〇〇〇	〇〇〇
製鐵所	運轉資本	七一三,六五八	九,三三四
官設鐵道	運轉資本	一八二,五五八	五,三三〇
電信燈臺用品製造所	運轉資本	一七〇,九六〇	九,六六九
官立學校及圖書館會計	運轉資本	一一,五九七	五,六一
官立學校及圖書館會計	運轉資本	二,〇〇〇,〇〇〇	〇〇〇
官立學校及圖書館會計	運轉資本	二,〇〇〇,〇〇〇	〇〇〇
官立學校及圖書館會計	運轉資本	九八,四八五,八九二	五,七五〇
官立學校及圖書館會計	運轉資本	二〇〇,〇〇〇	〇〇〇
官立學校及圖書館會計	運轉資本	九八,二八五,八九二	五,七五〇
官立學校及圖書館會計	運轉資本	一六四,三五七	九,四〇〇
官立學校及圖書館會計	運轉資本	一一三,四五七	八,〇九〇
官立學校及圖書館會計	運轉資本	五〇,九〇〇	一,三一
官立學校及圖書館會計	運轉資本	一一八,三八六,九二六	五,六〇〇
官立學校及圖書館會計	運轉資本	一二,九五二,六三一	四,九七〇
官立學校及圖書館會計	運轉資本	一〇五,四三四,二九五	〇,六三三

官立學校及圖書館會計	現物	三,六〇八,〇四七	一,二二二
官立學校及圖書館會計	現物	五三六,九五五	七,九九九
官立學校及圖書館會計	現物	三五,九二四	三,四二二
官立學校及圖書館會計	現物	三,〇三五,一六六	九,八一
官立學校及圖書館會計	現物	一〇〇,〇〇〇	〇〇〇
官立學校及圖書館會計	現物	三〇〇,〇〇〇	〇〇〇
官立學校及圖書館會計	現物	一〇〇,〇〇〇	〇〇〇
官立學校及圖書館會計	現物	一〇〇,〇〇〇	〇〇〇
官立學校及圖書館會計	現物	二六五,〇〇〇	〇〇〇
官立學校及圖書館會計	現物	九〇〇,〇〇〇	〇〇〇
官立學校及圖書館會計	現物	二〇五,〇〇〇	〇〇〇
官立學校及圖書館會計	現物	三,三二五,三〇四	〇〇〇
官立學校及圖書館會計	現物	五九,〇二五,三〇四	〇〇〇
官立學校及圖書館會計	現物	一八,一〇二,〇二七	七,六八五
官立學校及圖書館會計	現物	一一八,三八六,九二六	五,六〇〇
官立學校及圖書館會計	現物	一二,九五二,六三一	四,九七〇
官立學校及圖書館會計	現物	一〇五,四三四,二九五	〇,六三三

官立學校及圖書館會計
資金會計其他

三、六〇八、〇四七、一二二
五九、〇二五、三〇四、〇〇三

備考

一 作業會計ノ運轉資本ハ既定額固定資本ハ明治三十二年三月末日ノ現在額ヲ揭ク但專賣局及製鐵所ノ固定資本ハ未定ナルヲ以テ省ク
 一 官立學校及圖書館會計ノ資金ハ明治三十二年三月末日ノ現在額ヲ揭ク
 一 資金會計ノ資金ハ既定額預金利子仕拂元金ハ明治三十三年三月末日ノ現在額ヲ揭ク
 一本表ノ外既定ノ經畫ニ從ヒ漸次使消セラレヘキモノ最近ノ調査ニ依レハ償金特別資金八千六百貳拾參萬四千六百四拾五圓七拾六錢九厘貨幣整理資金九拾九萬七千八百七拾五圓九拾五錢壹厘森林資金參拾萬貳千四百參拾七圓九拾錢參厘事業公債及鐵道公債金六百六拾壹萬八千四百參拾壹圓五拾六錢參厘紙幣交換基金參百拾八萬九千九百八拾圓貳拾錢營業滿期國立銀行紙幣交換基金九拾七萬四千九百九拾九圓合計九千八百參拾壹萬參百七拾圓參拾八錢六厘アリ

種別	明治三十三年度各特別會計歲入歲出豫算總括	
	歲入	歲出
外務省所管 在外國帝國專管居留地	1,013,307.00	1,013,307.00

種別	歲入	歲出
內務省所管 臺灣總督府 北海道官設鐵道用品資金 內務省所管合計	22,126,483.045 3,000,000.000 22,426,483.045	22,126,483.045 3,000,000.000 22,426,483.045
大藏省所管 造幣局 印刷局 專賣局 大藏省預金利子 特別資金 貨幣整理資金 事業公債及鐵道公債金 軍艦水雷艇補充基金 災害準備基金 教育基金 大藏省所管合計	1,442,148.000 1,556,559.000 2,022,945.000 2,692,896.000 0.000 2,760.000 32,683,650.000 453,038.000 465,188.000 518,750.000 6,044,439.000 6,095,513.915	1,208,265.000 1,404,539.000 1,130,314.000 2,478,370.000 23,752,739.000 3,000.000 32,683,650.000 0.000 0.000 700,000.000 7,353,704.000 6,003,991.412
陸軍省所管 東京砲兵工廠		

大阪砲兵工廠	五九三〇、三七九〇、四八	五、九一八、三七九〇、四八
千住製絨所	二、四三一、五九八〇、一八	二、四二九、一〇二、九二五
陸軍省所管合計	一、四四五七、四九〇、九八一	一、四、三五、一、四七三、三八五
海軍省所管		
橫須賀鎮守府造船材料資金	七六五、一三五〇〇〇	八五〇、〇〇〇〇〇
吳鎮守府造船材料資金	七九三、四二九九〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇〇〇
佐世保鎮守府造船材料資金	四四七、八二五〇〇〇	五一九、六七六〇〇〇
海軍造兵材料資金	二、〇四七、五〇〇〇〇〇	一、九五〇、〇〇〇〇〇
海軍省所管合計	四、〇五三、八八九九〇〇	四、三一、九、六七六〇〇〇
文部省所管		
東京帝國大學	九五六、五八五〇、六一	九五六、五八五〇、六一
京都帝國大學	四四八、〇八七、一三七	四四八、〇八七、一三七
高等師範學校	一六三、四六七、七七六	一六三、四六七、七七六
女子高等師範學校	八九、二八四、一七九	八九、二八四、一七九
札幌農學	六二、一六三、〇四九	六二、一六三、〇四九
高等商業學校	五七、二二六、二五〇	五七、二二六、二五〇
第一高等學校	一二九、五六二、九五二	一二九、五六二、九五二
第二高等學校	八九、〇六五、二六五	八九、〇六五、二六五

第三高等學校	一〇八、一九〇、三四七	一〇八、一九〇、三四七
第四高等學校	八〇、五五二、七八五	八〇、五五二、七八五
第五高等學校	一二九、一六七、四五二	一二九、一六七、四五二
第六高等學校	三三、一三八、二〇〇	三三、一三八、二〇〇
山口高等學校	四五、四二九、〇〇〇	四五、四二九、〇〇〇
東京工業學校	一二六、四九六、五三七	一二六、四九六、五三七
東京外國語學校	六三、〇一〇、八〇八	六三、〇一〇、八〇八
東京美術學校	七六、一一二、六二九	七六、一一二、六二九
東京音樂學校	二九、一五五、八五六	二九、一五五、八五六
大阪工業學校	六四、二四九、二七八	六四、二四九、二七八
東京官廳學校	一三、九六二、九八〇	一三、九六二、九八〇
帝國圖書館	二四、一九一、一七五	二四、一九一、一七五
資本金		
東京帝國大學	一六二、九〇一	一〇、六五〇、〇〇〇
京都帝國大學		一四、三三九、二一七
高等師範學校		六五四、六七三
女子高等師範學校		一九九、二二七〇
札幌農學		三、八〇五、五八九

高等商業學校	一、五五一、五五四	四〇〇、〇〇〇
第一高等學校	二九〇、九三二	五六一、八二一
第二高等學校	一〇一、七〇〇	二四五〇、八六〇
第三高等學校	一、一六七、一八四	五四五〇、六〇〇
第四高等學校	〇、三九〇	一、一二六、〇九一
第五高等學校	一四一、〇〇〇	四〇五六、〇〇五
東京工業學校	七一九、三六一	六、二四〇、〇〇〇
東京美術學校	五五〇、〇〇〇	五七八〇、五五〇
大阪工業學校	〇	二、三六七、八九八
東京官立醫學校	五八〇、〇〇〇	五、六五〇、〇〇〇
帝國圖書館	一五〇、〇〇〇	六〇五、一三六
農商務省所管合計	二、八〇三、〇六一、四二二	二、八五五、〇三三、五三一
廣島鑛山	九二、六七七、〇〇〇	九二、四九五、〇〇〇
製鐵所	六〇〇、〇〇〇、〇〇〇	二、四〇〇、〇〇〇、〇〇〇
森林資金	二、三〇二、二〇五、〇〇〇	一、七七八、七七七、二三五
農商務省所管合計	二、九九四、八八二、〇〇〇	四、二七一、二七二、二三五
遞信省所管		

官設鐵道用品資金	一八、二三四、〇〇八、三〇二	一一、四七二、〇三八、〇九九
官設鐵道用品製造所	八、七三七、三二二、六二一	八、七三七、三二二、六二一
電信燈臺用品製造所	二四一、〇七九、七一	二四〇、一二九、七一
遞信省所管合計	二七、二二二、四一〇、六三三	二〇、四四九、四九〇、四三一
總計	一三五、〇〇五、九〇八、七〇二	一四三、二二〇、四三九、六二七

第二篇 租稅及葉煙草專賣制度

第一章 總論

租稅ニ關スル經畫ニ關シテハ各事項ニ付キ更ニ章ヲ分チ記述スル所アルヘシト雖モ茲ニ税法ノ統一及稅務ノ整理ニ付キ豫メ其要ヲ掲クルヲ便トスルヲ以テ左ニ其梗概ヲ舉クヘシ

戰後經營ノ前ニ在リテ直稅ニ屬ストセシモノハ地租所得稅其額二十八年度ノ決算ニ依レハ四千拾八萬九千九百餘圓間稅ニ屬ストセシモノハ酒稅醬油稅賣藥稅證券印稅鑛業稅取引所稅制限外兌換銀行發行稅狩獵免許稅沖繩縣酒類出港稅北海道水產稅酒精營業稅醫藥營業稅煙草稅菓子稅國立銀行稅船稅車稅牛馬賣買免許稅及海關稅ニシテ其額參千四百五拾萬七千六百餘圓ナリトス

顧ニ各種ノ税法ハ維新ノ後地租改正ニ依リテ地租ト雜稅トヲ區分シタルニ起リ其雜稅ハ封建因襲ノ名ニシテ各藩ノ擅制ニ原因シ其雜實ニ名狀スヘカラス明治八年ニ於テ第二十三號布告ヲ以テ廢止セラレ地方限リ徵收スヘキコトニ定メラレタルモノナリ而シテ爾後國稅トシテ賦課セラレタル船稅車稅牛馬賣買免許稅ノ如キ酒造免許稅醫藥免許稅煙草免許稅ノ如キハ前記雜稅ノ中ヨリ國稅中ニ留存セシモノニ過キス

地租改正ハ廢藩置縣ト共ニ始メテ行ハレタル一大重典ニシテ爾後所得稅ヲ興シタリト雖モ其納稅者ハ十數萬人ニ過キス即チ從來地租ヲ以テ殆ント國家常存ノ資源ト爲シ負擔一偏ニ傾キ公權利ノ享受モ又一部ノ人民ニ限レリ
夫レ國家ノ經費ハ一般人民ノ負擔ニ資ルヘクシテ其及フ所普ネキヲ以テ主トスルト共ニ公權利ノ享受モ亦一偏ニ限ルヘカラス
曩ニ二十九年ニ於テ第一期ノ經營トシテ營業稅ノ新設ハ收入増加ヲ得ルヲ目的トシタルト共ニ左ノ結果ヲ見ルニ至レリ

一 從來地方稅中營業稅雜種稅ノ賦課ノ不均一ナルモノハ附加稅トシテ成ルヘク均一ノ結果ヲ得ルニ至ラシメタルコト

二 國稅トシテ徵收ノ費多ク府縣稅トスルヲ便トスルモノヲ府縣ノ課稅ニ移シ一般租稅ノ整理ヲ計リシコト

三 商工業者ハ實際巨額ノ税金ヲ負擔スルモ國ニ對スル公權利ヲ有セザリシカ明治二十九年勅令第二百六十三號ヲ以テ衆議院議員選舉法及貴族院令ニ於ケル資格トセラレ既ニ施行ニ係レリ

而シテ之ト共ニ煙草營業稅、菓子稅、船稅、車稅、牛馬賣買免許稅、營繕營業稅法ヲ廢シ其結果地方ニ對シ約百四拾貳萬圓ノ財源ヲ與ヘタリ

又明治三十二年ニ於テハ沖繩縣船稅沖繩縣砂糖買上制度ヲ廢スルヲ得タリ是ト共ニ同縣土地整理ニ關スル法律ノ制定アリ將來内地ト課稅ノ基礎ヲ同一ニシ土地所有權ノ明確ヲ得ルト共ニ其

公權利ノ享受ヲモ確保スルコト、ナレリ

又營業稅ノ制定ニ次キ第二期ノ經營ニ於ケル所得稅ノ改正ニ於テ納稅者ノ全數參拾四萬千五百七拾九人ニ上リ營業稅ノ結果ニ於ケルト同一ニ公權利ノ享受ヲ均一ニスルヲ得タリ

又第一期ノ經營ニ於テ酒稅法ヲ改正シ煙草印紙稅ヲ廢シテ葉煙草專賣法ヲ設ケタルハ第二期ノ經營ニ於テ明治三十二年法律第十八號關稅定率法附屬輸入稅表中改正法律及同年法律第二十八號專賣法改正ニ依テ始メテ完成スルヲ得タリ

夫レ内國間稅モ關稅モ皆同性質ニ係ルヲ以テ單リ内國酒稅ノ增率ヲ爲セハ外國酒ノ輸入ハ從テ増進スヘシ是ヲ制セスシテ内國ノ間稅ヲ増加スルハ能ハサル所ナリ是明治二十六年ニ於テ酒精營業稅法ノ制定アリシト雖モ殆ント其效乏シカリシ所以ナリ然リト雖モ姑息ノ法律改正ハ外國ニ對シ大ニ帝國ノ利益ヲ害スルアルヲ以テ爲ニ慎重ナル態度ヲ守リ關稅制度ノ確立ヲ俟チ始メテ愛ニ酒精ノ關稅率ヲ原價ノ二倍半トシ其他高度酒精ヲ含有スル酒類ヲ十割トシテ内地間稅ト權衡ヲ得ルニ至ラシメタリ

又製造煙草ノ關稅ヲ十割トシ葉煙草ハ政府獨リ之ヲ輸入スルコト、爲セリ
如斯ハ實ニ間稅關稅制度ニ始メテ統一連絡ヲ得シモノト言ハサルヘカラス爾來是等ノ輸入ニ於テ噸ニ法律ノ效力ヲ現ハシ將來内國稅ノ權衡宜キヲ得ルニ至ラン

上來陳スル如ク内國間稅ノ海關稅ト權衡ヲ得ルニ至リタルハ曩ニ關稅定率法ノ制定ヲ見タルニ由レルナリ抑關稅ニ對スルノ自主權ノ回復ハ維新以來ノ國是ナリト雖モ明治二十七八年ニ於テ始メテ其鞏固ヲ得條約稅目ノ範圍ニ關シ列國ノ妥協當ヲ得ルニ至レリ即チ關稅ノ有稅品目四百

九十七種ノ中協定ニ係ルモノハ百二十五種ナリ又其稅額ニ就キテ概算スレハ國定稅目ノ六割三分五厘ニ居ル而シテ內國稅目トノ權衡ニ於テハ今其宜キヲ得タリ

尋キテ保稅倉庫法ノ制定ハ貿易機關ノ便利ニ資シ又第二期ノ經營トシテ關稅法ノ制定ハ將來制度ノ基礎ヲ鞏固ニシ又同法ニ於テ條約アル稅目ハ是ニ由ルコトヲ明ニセリ

又第一期ノ經營ニ於テ民法商法ノ施行ニ先チ登錄稅ノ制定アリシハ第二期ニ於ケル同稅率增加ト共ニ完整ヲ得タリ登錄稅法ノ制定ニ嗣キテ印紙制度ノ統一ト便利トヲ計リ明治三十一年第四百十號勅令ヲ以テ總テノ印紙ハ郵便切手ヲ除キ皆收入印紙ヲ以テスルコトニ規定セラレタリ即チ賣藥印紙證券印紙煙草印紙紙稅用印紙登記印紙ヲ廢止シタリ

如斯稅法ノ革新ト共ニ制度モ亦更新スルコトヲ得タリ即チ明治三十二年第六十一號勅令ヲ以テ稅關官制ヲ改正セラレ沿岸ノ監視ハ特ニ稅關監視署ヲ置カレ又稅務署ヲシテ之ヲ兼ネシメ犯則ノ爲メ必要アルニ方リテハ海軍艦船ノ公力ヲモ用ヒシムルコトヲ定メラレタリ

又內國收稅機關ノ改正ニ在リテハ從來府縣ニ收稅署ヲ置キ府縣知事收稅長ノ指揮ノ下ニ收稅事務ヲ行ハシメタルヲ以テ其取扱方自ラ異同アルヲ免レス故ニ新ニ稅務管理局稅務署ヲ置キ稅務管理局長ハ直接ニ大藏大臣ノ指揮監督ヲ受クヘキコト、爲シタリ故ニ現今ニ於テハ命令一途ニ出テ稅務ノ統一ヲ得ルニ至リタルモノトス

以上具スルカ如ク爰ニ始メテ内外ノ關係ニ於テ稅行政ノ經理確立シタルモノトス即チ其基礎ニ於テ鞏固ナルコトヲ得將來容易ニ其發達ヲ期スルヲ得ン

又此戰後ノ經營ニ於テ施設セラレタル租稅ノ制度ハ實ニ帝國ニ於テハ始メテ基礎ヲ統一ニシタ

ルモノニシテ外國ノ標範ト其採ヲ一ニシタルモノナリ

戰後經營ノ爲メ前後兩回ニ畫策シタル增稅總額ハ七千餘萬圓ニシテ別表ノ如シ而シテ之ト同時ニ稅務ノ整理其他新稅法實施ノ結果廢稅ニ歸シタルモノ酒造免稅稅、自家用酒稅、酒精營業稅、醬麴營業稅、煙草稅、醬油營業稅、菓子稅、船稅、車稅、牛馬賣買免稅稅、沖繩縣船稅、輸出稅等八百餘萬圓アリ

第一期(明治二十九年)第二期(明治三十一年)增稅一覽表

備考	計	第一期(明治二十九年)		第二期(明治三十一年)		計
		增稅	減稅	增稅	減稅	
地租	〇	〇	〇	八,四七五,九五八	〇	八,四七五,九五八
所得稅	〇	〇	〇	一,四九四,五一六	〇	一,四九四,五一六
營業稅	〇	〇	〇	〇	〇	〇
酒稅	〇	〇	〇	二二,五五六,四〇九	〇	二二,五五六,四〇九
登錄稅	〇	〇	〇	一,八四六,七五九	〇	一,八四六,七五九
醬油稅	〇	〇	〇	一,五九八,三八七	〇	一,五九八,三八七
造石稅	〇	〇	〇	一,一五九,五六〇	〇	一,一五九,五六〇
銀行發稅	〇	〇	〇	二,三七,九八六	〇	二,三七,九八六
兌換稅	〇	〇	〇	〇	〇	〇
噸稅	〇	〇	〇	〇	〇	〇
煙草專賣收入	〇	〇	〇	二,一四五,五五〇	〇	二,一四五,五五〇
煙草營業免許料	〇	〇	〇	八三一,七五〇	〇	八三一,七五〇
計	三三,五七六,二九三	〇	〇	四〇,三四六,八七五	〇	七三,九二三,一六八

一 第一期第二期ノ増税額ヲ假ニ明治三十三年度ノ租税印紙收入及葉煙草專賣益金ノ總額壹億五千六百五拾五萬貳千參百五拾九圓ニ比スレハ殆ント其五割ヲ占ム

一本表ノ外第二期ニ於テ郵便電信收入百六拾七萬參千參百四拾四圓ヲ増加シタルヲ以テ之ヲ加算スルトキハ第二期ノ増收入ハ四千貳百貳萬貳百拾九圓トナルナリ

一本表ハ總テ其當時ノ豫算額ニ依リタルヲ以テ増税實施ノ結果ハ多少ノ差異アルヲ免レス

第二章 内國稅

第一 地租

一 地價修正

租税中其關係ノ最モ重大ナルモノヲ地租トス而シテ地租ハ地價ヲ標準トシテ之ヲ賦課スルコト現行法ノ規定スル所ナルヲ以テ地價ノ修正ハ國家重要ノ問題ニシテ内外議論ノ存スルハ固ヨリ免カルヘカラス今地價修正ノ事ヲ敘述スルニ當リ沿革上先ツ地租改正ノ事ヲ略陳スルハ事ノ順序ニ於テ當ニ然ラサルヘカラス所トス我國古來租稅ヲ農ノ一途ニ課シ寬苛輕重其授ヲ一ニセス其租率或ハ四公六民ト稱シ或ハ五公五民ト稱スト雖モ概ネ收穫十分ノ三四ヲ貢租ニ充テ其他ノ徭役賦金亦寡キニ非ス殊ニ中古以來其制度紛淆ニ歸シ維新ノ初メ各藩ノ制ヲ綜フルニ方リ頗ル偏倚ヲ極メタリ明治四年廢藩置縣ノ後從來ノ苛斂ニ苦シムモノ租法ノ改良ヲ請求シ其已ムヲ得サリシモノハ定免ヲ解キ檢見收租ノ法ト爲セリト雖モ此方法タル段別錯亂ノ地方ト段別ヲ以テ計算スルノ制ヲ用キサル地方トニハ行ハレ難カリシヲ以テ大藏省ハ地價ニ從テ賦稅スルノ方

案ヲ上請シ明治六年七月ニ於テ始メテ

上諭ヲ以テ地租改正條例ヲ頒布セラレ明治十四年ニ至リテ成功ヲ告ケタリ

尋テ明治十七年三月地租條例ヲ發シ前ノ地租改正條例ニ於ケル第六章第八章ヲ廢シタリ抑其第六章ナルモノハ未來ニ於テ土地ヨリ生スル物産ニ課稅シ其稅額貳百萬圓以上ニ達スルトキハ其割合ヲ以テ地租ヲ減スヘキヲ示シ終ニ課率ヲ百分ノ一ニモ至ラシメンコトヲ豫想セシニ過キサルナリ然ルニ殖産興業ハ時ヲ經ルニアラサレハ興起スルヲ望ムヘカラス今其希望ノ期スヘカラサルモノト國家急須ノ常ニ變スルモノトヲ概律シ甲ニ減シ乙ニ増シ互ニ調理セムトスルモ其目的ヲ達シ得ヘカラサルハ言ヲ俟タス是事ノ草創ニ方リ法律ニ於テ行政ノ目的ヲ示セシニ過キスシテ其限關ノ明ナラサリシニ因ルト雖モ當時正義竊ニ以爲ラク是後日ノ紛爭ヲ醸スモノナリ宜ク時機ヲ視テ之ヲ修正セサルヘカラス

又其第八章ノ五年毎ニ地價ヲ修正スルノ規定ハ明治七年第五十三號布告ノ追加ニ依リ地價ヲ以テ賣買價ト爲セシ故ニ本章ヲ設ケタルモノナリト雖モ實ニ私有物權ノ安固ト國家富有ノ基本トヲ障害スルモノナリ而カモ尙ホ時機國勢ノ如何ヲ顧ミス年ヲ期シテ改正ヲ常事ト爲スカ如キハ斷シテ國家ノ利益ニアラス是則地租條例ニ於テ此二事ヲ變更セシ所以ナリ

明治六年ニ於ケル地租ノ改正ハ非常ノ事業ニシテ所得ヲ量定スヘキ土地ノ實積ノ由ルヘキモノナリ維新兵亂ノ後人心安カラス人文啓發セスシテ諸般ノ調査畫一ヲ缺クアリ各地ニ於ケル地價ノ評定ハ必スシモ權衡ヲ得タルモノニアラス爲ニ明治十三年第二十五號ノ布告ヲ以テ地價ノ不平均ナルモノヲ改正セントノコトヲ頒布セラレタルモ未タ其處分ヲ了セサルモノアリ是ヲ以テ

明治二十二年法律第二十二號特別地價修正法ヲ頒チ地租負擔ニ輕重ノ偏ナカラシムコトヲ計
ラレ前後減租スルモノ參百六拾六萬四千五百餘圓ナリトス此修正タル當時財政ノ許ス所ニ從ヒ
テ行ヒタルモノニ過キサレハ未タ之ヲ以テ完全ナリト爲スヘカラス
是ヲ以テ帝國議會ノ開設ト共ニ衆口地價修正論ヲ唱ヘ時ニ或ハ此問題ヲ以テ政權爭議ノ端緒ト
爲シ頻年止マヌシテ以テ今日ニ至レリ

○查スルニ明治二十二年法律第二十二號ヲ以テ一般地價ノ不平均ヲ整理セシト雖モ若干ノ地方ハ
修正ヲ受ケスシテ仍從前ノ低位ニ居レリ是ヲ他地方ノ負擔ニ比スレハ尙ホ不權衡ヲ免レス今地
價ノ低位ニ居ルモノヲ昂シ高位ニ居ルモノヲ減削シ全ク水準ニ歸セシムルノ方案ニ依リ地價ヲ
修正スルハ至當ノ方法ナリト雖モ此ノ如キハ實地ヲ調査シ年月ヲ經ルニアラサレハ之ヲ行フヘ
カラス故ニ寧ロ如斯方法ニ依ラスシテ簡易ノ方案ニ依リ一般人民ニ安固ノ念慮ヲ與ヘ細故ヲ問
ハス只大局ニ斷シテ一般ノ中正ヲ得セシムルハ事宜ニ適スルモノト思考シ以テ修正ノ方法ヲ定
メタリ

其方法タル各地方ニ於ケル改租以降ノ經歷ニ徵シ各地ノ成績ニ稽ヘ地價査定上第一ノ要素タル
收穫ノ權衡ヲ實查シ改租當初ノ區域毎ニ就キ各適當ト認ムル輕減歩合ヲ定メ之ニ依リテ各都市
ノ現在收穫ヲ輕減セリ地價査定上第二ノ要素タル石代ハ明治二十一年以降明治三十年ニ至ル既
往十箇年間ニ於ケル各地方ノ米價ヲ地租改正當時ノ區域毎ニ審查セシニ其全國平均ハ七圓四拾
錢九厘トナリタルモ元來米價ナルモノハ常ニ變動ノ頻繁ナルモノナルヲ以テ今此平均額ヲ取テ
直ニ將來ノ常價ト爲スハ妥當ナラサルカ故ニ之ニ幾分ノ斟酌ヲ加フルヲ必要トシ各改租區域毎

ニ審查シタル米價ノ内一般ニ其四割六分五厘ノ同一歩合ヲ以テ低減シタルモノヲ石代ト定メタ
リ又地價査定上第三ノ要素タル利率ハ改租ノ當初概シテ六朱ヲ用ヒ稀ニ六朱以上若クハ六朱以
下ナルモノアルモ交通機關ノ發達等ニ伴ヒ金利ニ種種ノ差等ヲ設タルノ必要ヲ認メス依テ一般
ノ權衡上六朱以上ノ部分ハ其儘置六朱以下ハ總テ六朱ト定メタリ右ノ如ク收穫石代及利率ヲ
變更シタル外總テ改租ノ際用キタル算法ニ從ヒ各府縣一郡市毎ニ明治三十一年七月一日現在段
別ヲ基トシ修正地價ヲ算定シ修正法案ヲ第十三議會ニ提出セリ然ルニ衆議院ハ長崎縣對馬國上
縣下縣兩郡ニ於ケル地價ノ要素タル收穫ハ他地方ニ比シ過重ナルモノトシ之ヲ更正スルヲ至當
ト認メ法案ヲ修正決議シ貴族院ニ於テモ衆議院ノ修正案ヲ可決シ明治三十一年法律第三十一
號ヲ以テ公布セラレタリ今其修正地價ノ總數ヲ舉クレハ田七億四千七百參拾七萬八千九百餘圓
畑壹億八千參百四拾八萬九千參百餘圓計九億參千八拾六萬八千參百餘圓ニシテ之ヲ明治三十
一年七月一日現在地價ニ比スルトキハ田ニ於テ壹億千四百拾六萬七百餘圓畑ニ於テ參千五百拾參
萬八千七百餘圓計壹億四千九百貳拾九萬九千五百餘圓ヲ減ス是當初ニ於ケル地價修正ニ依ル減
額ノ概算ナリ

地價修正ノ實施ハ明治三十二年二月一日現在額ヲ基トシ各區域ノ修正案分率ヲ求メ之ニ依リテ
各都市町村毎筆ノ修正ヲ爲スヘキモノニシテ明治三十二年二月初旬ヨリ著手シ同年八月ニ至リ
漸ク其事業ヲ完了シタリ其結果ニ依レハ田畑地價修正法ニ於テ地價ヲ修正スヘキ地方ト定メタ
ルモノニシテ土地異動ノ爲メ二月一日現在ノ地價額法律規定ノ修正地價額ヨリ低下トナリ同法
第二條ニ該當シ地價ヲ修正セサルモノヲ生シタルヲ以テ此地方ノ地價ヲ除キ實際修正シタル所

ハ田修正地價七億四千七百參拾五萬九百餘圓同壹億八千貳百七拾六萬八千八百餘圓計九億參千拾壹萬九千八百餘圓トナリ法律面ノ地價ニ對照スルニ田ニ於テ貳萬參千四百餘圓ヲ減シ畑ニ於テ貳百餘圓ヲ増シ合計上ニ於テ貳萬參千四百餘圓ヲ減シタリ是計算上當然生スヘキ差違ナリトス

又右修正地價ヲ以テ更ニ明治三十二年二月一日現在額ニ對照スルニ修正ノ爲メ減額セル地價ハ田ニ於テ壹億千四百八拾九萬四千餘圓畑ニ於テ參千參百七拾萬四千參百餘圓計壹億四千八百五拾九萬八千四百餘圓其割合ハ田一割三分三厘畑一割五分六厘田畑平均一割三分八厘ニシテ當初ノ減額概算ニ比スレハ田ニ於テ七拾參萬參千貳百餘圓ヲ増シ畑ニ於テ百四拾參萬四千參百餘圓ヲ減シ合計上ニ於テモ七拾萬千餘圓ヲ減ス此原因ハ土地異動ノ爲メ現在地價額ノ變更其重ナルモノナリ尙ホ府縣別修正地價等ハ別表ニ掲載セリ

抑地租改正當時ノ田畑ハ地價拾五億參百九拾壹萬九千六百餘圓ニシテ其地租ハ四千五百拾壹萬七千五百餘圓ナリ而シテ明治十年地租ノ定率百分ノ三ヲ輕減シテ百分ノ二箇半トセラレ大ニ土地所有者ノ負擔ヲ減セラレ尋テ地價ノ均一ヲ謀ル爲メ屢地價ヲ修正低減セラレタルヲ以テ今地租改正以降修正シタル田畑ノ地價ヲ以テ地租改正ノ時ノ地價ト比較スルトキハ地價ヲ減スルコト貳億九千四百七拾四萬七千八百餘圓又地租改正以降租率ノ輕減及地價修正ニ依リ地租ニ於テ減シタルモノ實ニ千五百五拾七萬參千餘圓ナリトス尙ホ又明治三十二年二月一日ノ現在ニ依リ地價修正前後ニ於ケル全國田畑ノ一段歩平均地價ヲ見ルニ修正前ニ於テハ一段歩平均地價田四拾圓九厘畑拾壹圓九錢六厘ナリシニ修正後ニ於テハ田參拾五圓九拾壹錢九厘畑九圓六拾貳錢四

厘トナレリ

上來略陳スル如ク田畑地價修正法案ノ起草ニ際シテハ正義ハ地租改正ノ結果ヲ考查シ諸般ノ材料ト既往ノ實績トニ徴シ全局ヲ達觀シテ專ラ其權衡ヲ得ルコトニ留意シタルヲ以テ今回地價ノ修正ハ田畑所有者ノ負擔ヲ均一ナラシメ適實中正ノモノナルコトヲ信ス

現在地價修正地價及法律面修正地價比較表

府縣名	三十二年二月一日現在地價	修正集計額	差引減額	減差	法律面修正地價額	修正集計額ト對比シテ増減ノ方
東京	九三、八四、二九六、七九三	七五、五二、八四五、六一〇	一八、三三、四一〇、一八三	一九、五	七五、五二、八四五、六一〇	△
京都	二〇、三三、四七九、一六七	一八、四三、〇六二、五〇〇	一、八九、四一六、六六七	〇、九三	一八、四三、〇六二、五〇〇	△
大阪	三三、九三、六一五、八八五	二八、〇五、六九二、四七三	六、八八、九二三、四一二	〇、九七	二八、〇五、六九二、四七三	△
神奈川	一一、七三、八四七、九一九	一〇、四二、六四三、四六〇	一、三一、二〇四、五三九	〇、八一	一〇、四二、六四三、四六〇	△
兵庫	五、六六、六二二、八八一	四、七三、三一一、九八六、六六六	九、三三、三一一、八三五	〇、六四	四、七三、三一一、九八六、六六六	△
長崎	一一、七三、八四七、九一九	一〇、六七、七三〇、七〇〇	一、〇六、一一一、一四七	〇、九一	一〇、六七、七三〇、七〇〇	△
新潟	五、二六、八八三、七〇七	二九、二二、三九〇、八八〇	六、〇四、四一〇、一七二	一、七一	二九、二二、三九〇、八八〇	△
埼玉	一五、六八、一〇七、八一	一一、八八、八三三、七五〇	二、八〇、二六五、九三九	一、七九	一一、八八、八三三、七五〇	△
群馬	三、八〇、七四九、七六七	三三、一一、八七三、〇五五	四、九五、一二三、二八八	一、三〇	三三、一一、八七三、〇五五	△
千葉						

茨城	栃木	奈良	三重	愛知	静岡	山梨	滋賀	岐阜	長野	宮城	福島	秋田	石川
二七、二六四、一八三、八〇	一六、七三三、九九七、三六六	一七、六三〇、九四七、五二〇	三九、三五六、七二七、七五〇	四六、二七四、六八四、七〇	三二、七七八、〇〇、一九四	九、九四九、三六八、四〇	三、四八六、〇六七、四七〇	一、一六四、一五〇、八四三、七	一〇、八三七、六二八、七六〇	二〇、一八三、六二二、〇三三	二二、〇九一、六一、〇〇〇	二二、〇九一、六一、〇〇〇	二二、〇九一、六一、〇〇〇
二、四六〇、七六三、一三九	一、四二七、二七三、七七一	一、六一〇、五七六、七六九	三、三二一、五二六、九四三	三、八九二、〇二五、六五〇	二、六二七、一八二、一九九	八、九三四、六四七、五五〇	三、〇一四、六九二、〇一〇	二、二二二、四〇四、四七〇	一、〇九七、二九九、九九〇	一、〇三二、一六三、二〇五、九	一、八、五六九、七五三、三三	二、〇三二、一六三、二〇五、九	二、〇三二、一六三、二〇五、九
二、六五八、八八六、六四一	二、五一一、一五九、六九五	一、五三三、二七二、八四〇	七、二〇四、〇三三、四二〇	七、三三七、二二一、八八〇	五、五三〇、六二七、二七五	一、〇六〇、一八九、二九〇	四、七三三、七五四、五六〇	三、七三三、七五五、六三二	六、五四二、〇一八、四四七	五、三三九、九六六、七〇一	二、一三三、六三六、六六〇	二、一三三、六三六、六六〇	二、一三三、六三六、六六〇
〇、九七	一、五〇	〇、八六	一、八三	一、五九	一、七四	一、〇六	一、三五	一、五〇	〇、五六	〇、四八	一、〇〇	一、〇〇	一、〇〇
二、四六〇、九八〇、六五五	一、四二七、二七三、七七一	一、六一〇、五七六、七六九	三、三二一、五二六、九四三	三、八九二、〇二五、六五〇	二、六二七、一八二、一九九	八、九三四、六四七、五五〇	三、〇一四、六九二、〇一〇	二、二二二、四〇四、四七〇	一、〇九七、二九九、九九〇	一、〇三二、一六三、二〇五、九	一、八、五六九、七五三、三三	二、〇三二、一六三、二〇五、九	二、〇三二、一六三、二〇五、九
二、一七四、八一	一、五三三、二七二、八四〇	一、五三三、二七二、八四〇	八、六二九、三三七	八、六二九、三三七	六、六三三、二七七	一、三三六、〇三〇	三、八八四、八五一	三、九七四、八一	一、三六二、四九九	二、九一四、〇九一	二、五七九、九四七	二、五七九、九四七	二、五七九、九四七

明治財政史第一卷

富山	島根	鳥取	岡山	廣島	山口	和歌山	徳島	香川	愛媛	高知	福岡	大分	佐賀	熊本	鹿兒	計
一三、三三三、三三〇、八八九	一三、六〇七、五九四、一九九	一九、七四三、七三三、七九三	三二、四六八、九三三、三三四	二九、九八二、八七一、八二〇	一七、九三六、四五四、九五〇	一一、〇五七、九三三、二一〇	二〇、四八八、九二二、一六	二〇、五〇八、八九二、三二七	一六、六〇六、五〇一、八一〇	三、七四三、六四一、六四〇	九、三三九、二一九、一〇六	二、三二一、四八九、〇三八、七	二、三二一、四八九、〇三八、七	八、六九二、〇四八、二五六	一、四九八、二、四四八、〇七	八六二、二四四、九三三、〇四八
一三、〇三六、一三三、二六三	一一、二五七、〇〇七、七〇	一八、一〇二、二八八、一一〇	二六、〇四四、八九二、二二五	二四、八三三、〇〇九、一六〇	一四、七四八、六一六、一五〇	一〇、五五九、五四〇、七〇	一八、〇三三、九五〇、二二〇	一七、八三三、三三三、二八〇	一三、九〇〇、六三四、一九〇	三、五一一、八、三三二、一一〇	八、一四七、五三三、八一〇	二、三二一、三三三、四七七	二、三二一、三三三、四七七	八、一〇六、九四九、一七〇	一、三、〇四三、三三七、四四〇	七四七、三三〇、九六三、七五九
三、〇七一、六六六、六六六	一、四四一、八八三、四九九	四、六四一、四三三、六六三	五、四三三、〇六三、〇三四	五、六〇八、六三六、六六〇	三、二八七、八三三、八八〇	二、四四一、九七九、〇〇〇	二、四三三、五九七、一〇九九	二、七六六、三三三、〇三七	二、〇七五、八六六、七六〇	二、三二一、一八二、二九九	一、九一五、五九九、二九九	一、〇一〇、一三三、六九九	一、〇一〇、一三三、六九九	五、八五〇、九九〇、八六	一、九三六、七〇七、三六七	一、四八四、四四〇、二九二、八九
一、〇三	一、〇六	〇、八三	一、七三	一、七三	一、七八	一、二八	一、一九	一、三〇	一、二六	〇、六二	一、二八	〇、四三	一、〇〇	〇、六七	一、三三	
一三、〇四一、二七三、〇〇〇	一一、二六七、一四三、〇四二	一八、一〇二、二八八、一一〇	二六、〇四四、八九二、二二五	二四、八三三、〇〇九、一六〇	一四、七四八、六一六、一五〇	一〇、五五九、五四〇、七〇	一八、〇三三、九五〇、二二〇	一七、八三三、三三三、二八〇	一三、九〇〇、六三四、一九〇	三、五一一、八、三三二、一一〇	八、一四七、五三三、八一〇	二、三二一、三三三、四七七	二、三二一、三三三、四七七	八、一〇六、九四九、一七〇	一、三、〇四三、三三七、四四〇	七四七、三三〇、九六三、七五九
五、一三三、八〇三、六	一、四四一、八八三、四九九	二、八六三、三三三	二、二四九、一〇	二、七〇三、一六九	一、〇六九、四八四	一、三三四、五五〇	二、五九四、七四〇	三、六三三、二七〇	二、五五八、九八〇	二、四五六、八四〇	一、七四五、〇九	四、九九九、五三三	四、九九九、五三三	五、七八六、六	二、九三三、五〇	二、三、四四一、六五五

府縣名	田畑合計	鹿兒島	宮崎	熊本	佐賀	大分	福岡	高知	愛媛	香川	徳島	和歌山
東京	一、〇七、八七一、二五八、八一四	二、二六、四七三、二六六	八、八七、四四三、二六二	三、五、六二、五九六、四〇五	八、六二、七七八、一六七〇	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五
京都	九、三〇、一九八、三九二、六三三	一、八二、七六八、七五五、〇四	六、九七、六〇、一九六、九〇	三、〇九、五〇、二六八、三一一	七、七五、八七、四六七、一〇	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五
大阪	一、四、九、九八、四一九、五五一	三、三、〇、四三、九〇、二六二	一、八、九、八、四三、九〇、二六二	四、六、七、五、九、六、四、〇、五	八、六、九、〇、三、四、九、六、〇	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五
奈良	一、四、九、九八、四一九、五五一	三、三、〇、四三、九〇、二六二	一、八、九、八、四三、九〇、二六二	四、六、七、五、九、六、四、〇、五	八、六、九、〇、三、四、九、六、〇	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五
和歌山	一、〇、七、八、七、一、二、五、八、一、四	二、二、六、四、七、三、二、六、六	八、八、七、四、四、三、二、六、二	三、〇、九、五、〇、二、六、八、三、一	七、七、五、八、七、四、六、七、一、〇	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五
徳島	二、九、〇、八、六、〇、〇、九、四	七、五、八、四、三、三、六、〇、三、〇	一、四、六、二、〇、五、二、〇、八、七	一、四、〇、四、六、七、七、六、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇
香川	一、〇、七、八、七、一、二、五、八、一、四	二、二、六、四、七、三、二、六、六	八、八、七、四、四、三、二、六、二	三、〇、九、五、〇、二、六、八、三、一	七、七、五、八、七、四、六、七、一、〇	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五
愛媛	二、九、〇、八、六、〇、〇、九、四	七、五、八、四、三、三、六、〇、三、〇	一、四、六、二、〇、五、二、〇、八、七	一、四、〇、四、六、七、七、六、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇
高知	二、九、〇、八、六、〇、〇、九、四	七、五、八、四、三、三、六、〇、三、〇	一、四、六、二、〇、五、二、〇、八、七	一、四、〇、四、六、七、七、六、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇
福岡	二、九、〇、八、六、〇、〇、九、四	七、五、八、四、三、三、六、〇、三、〇	一、四、六、二、〇、五、二、〇、八、七	一、四、〇、四、六、七、七、六、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇
大分	二、九、〇、八、六、〇、〇、九、四	七、五、八、四、三、三、六、〇、三、〇	一、四、六、二、〇、五、二、〇、八、七	一、四、〇、四、六、七、七、六、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇
佐賀	二、九、〇、八、六、〇、〇、九、四	七、五、八、四、三、三、六、〇、三、〇	一、四、六、二、〇、五、二、〇、八、七	一、四、〇、四、六、七、七、六、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇
熊本	二、九、〇、八、六、〇、〇、九、四	七、五、八、四、三、三、六、〇、三、〇	一、四、六、二、〇、五、二、〇、八、七	一、四、〇、四、六、七、七、六、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇
宮崎	二、九、〇、八、六、〇、〇、九、四	七、五、八、四、三、三、六、〇、三、〇	一、四、六、二、〇、五、二、〇、八、七	一、四、〇、四、六、七、七、六、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇
鹿兒島	二、九、〇、八、六、〇、〇、九、四	七、五、八、四、三、三、六、〇、三、〇	一、四、六、二、〇、五、二、〇、八、七	一、四、〇、四、六、七、七、六、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇	二、三、六、七、二、三、七、三、〇
田畑合計	一、〇七、八七一、二五八、八一四	二、二六、四七三、二六六	八、八七、四四三、二六二	三、〇九、五〇、二六八、三一一	七、七五、八七、四六七、一〇	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五	三、三、六二、五九六、四〇五

備考
 一本表ハ總テ地價修正ヲ爲シタル地方ニ對スル員額ヲ府縣別ニ計算シタルモノナリ故ニ一
 府縣中郡市ニ分テハ其減差歩合等皆一樣ナラス
 一田畑修正法第二條ニ該當シ地價修正ヲ行ハサル地方ニ對スル修正地價ハ法律面修正地價
 額ヨリ除算セリ

地價修正前ニ於ケル府縣限田畑別一段歩地價金表

府縣名	段	修正前地價	修正前ノ段金	修正後地價	修正後ノ段金	摘要
東京	一、八〇、〇一、一六三、六二二	九、三〇、一九八、三九二、六三三	五、二一〇、〇	七、五五、二、八四九、六一〇	四、一九三、二	全部修正
京都	八、〇〇、九七、七〇、一一、四	二、〇、三二、四七、九、一、六七	四、二一九、九	一、八、四三、〇、六二、四、五〇〇	三、八三三、七	全部修正
大阪	三、三、八、九、五、七、三、二、六、五〇	三、四、九、二、三、六、一、五、八、八、五	六、四七、九、八	二、八、〇、五、六、九、二、四、七、三、八	五、二〇五、八	全部修正
奈良	二、四、一、五、八、三、〇、一、七、七	一、二、七、三、八、四、五、七、九、一	五、二七、二、九	一、〇、四、二、六、四、四、三、四、〇	四、三二、五、九	全部修正
和歌山	一、〇、八、五、〇、四、六、〇、三、二、九	五、六、六、一、六、二、一、一、八、九、一	五、二一、七、九	四、七、三、五、一、九、六、八、六、六	三、四六、四、一	全部修正
徳島	三、三、二、六、四、一、四、二、四、八、九	一、一、七、四、三、六、二、〇、〇、〇	三、三、三、〇、四	一、〇、六、七、三、九、四、四、九、六、〇	三、二〇、八、八	全部修正
香川	一、六、九、四、三、〇、九、〇、四、七	三、三、四、五、一、九、四、七、二、二、六	三、一、五、五、〇	五、三、四、五、一、九、四、七、二、二、六	三、一、五、五、〇	全部据置
愛媛	六、七、五、二、三、九、八、〇、三、三	三、五、二、六、八、五、八、二、七、〇、七	三、二、三、三、三	二、九、二、三、三、八、九、〇、八、九、〇	三、二、三、三、〇	全部修正
高知	二、九、七、六、〇、五、四、〇、八、九、九	一、五、六、八、一、〇、七、八、一、一、四	二、二、六、九、一	二、八、六、八、一、〇、七、八、一、一、四	三、一、九、七、五	全部修正
福岡	一、〇、一、一、八、二、四、四、一、〇、三、六	三、七、五、七、七、二、九、八、三、四、七	三、六、七、七、五	三、二、六、七、二、九、八、七、三、三、五	三、一、九、七、五	全部修正
大分	八、八、五、四、二、六、三、三、〇、九、一	三、一、三、八、一、五、五、八、一、一、七	三、五、四、四、二	二、八、六、七、一、二、五、四、三、七、九	三、一、三、八、一	全部修正
佐賀	七、八、一、三、三、五、八、一、〇、一、一、一	二、七、七、六、三、七、七、七、〇、七	三、五、四、四、九、七	二、五、〇、五、三、四、一、三、五、六、九	三、一、〇、三、三	修正地方
熊本	一、〇、一、三、九、〇、五、一、〇、七、〇	三、六、一、七、八、四、〇、八、一、〇	三、五、〇、二、六	三、六、一、七、八、四、〇、八、一、〇	三、五、〇、二、六	据置地方
宮崎	五、四、三、三、三、〇、八、〇、一、三、八	二、〇、五、二、四、九、四、四、一、九、六	三、七、七、八、四	一、八、〇、一、三、五、八、四、五、〇、一	三、三、一、六、一	修正地方
鹿兒島	三、九、九、九、九、二、四、九、三	一、六、七、八、三、九、九、七、三、六、六	四、一九、六、〇	一、四、二、二、七、二、六、三、七、六、七、一	三、五、六、八、八	修正地方

奈重	三重	愛知	静岡	山梨	滋賀	岐阜	内	長野	内	宮城	福島	内	岩手
一、三三三、三三三	三、三三三、三三三	七、三三三、三三三	八、三三三、三三三	六、三三三、三三三	二、三三三、三三三	六、三三三、三三三	六、三三三、三三三	七、三三三、三三三	二、三三三、三三三	二、三三三、三三三	九、三三三、三三三	二、三三三、三三三	五、三三三、三三三
三、三三三、三三三	一、三三三、三三三	三、三三三、三三三	四、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三
二、三三三、三三三	二、三三三、三三三	二、三三三、三三三	二、三三三、三三三	二、三三三、三三三	二、三三三、三三三	二、三三三、三三三	二、三三三、三三三	二、三三三、三三三	二、三三三、三三三	二、三三三、三三三	二、三三三、三三三	二、三三三、三三三	二、三三三、三三三
三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三
据置地方	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正

明治三十三年

青森	山形	秋田	福井	石川	富山	内	鳥取	島根	内	岡山	内	廣島	内
五、三三三、三三三	八、三三三、三三三	九、三三三、三三三	四、三三三、三三三	七、三三三、三三三	三、三三三、三三三	七、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三	三、三三三、三三三
一、三三三、三三三	二、三三三、三三三	三、三三三、三三三	四、三三三、三三三	五、三三三、三三三	六、三三三、三三三	七、三三三、三三三	八、三三三、三三三	九、三三三、三三三	一〇、三三三、三三三	一一、三三三、三三三	一二、三三三、三三三	一三、三三三、三三三	一四、三三三、三三三
一五、三三三、三三三	一六、三三三、三三三	一七、三三三、三三三	一八、三三三、三三三	一九、三三三、三三三	二〇、三三三、三三三	二一、三三三、三三三	二二、三三三、三三三	二三、三三三、三三三	二四、三三三、三三三	二五、三三三、三三三	二六、三三三、三三三	二七、三三三、三三三	二八、三三三、三三三
全部据置	全部据置	全部据置	全部据置	全部据置	全部据置	全部据置	全部据置	全部据置	全部据置	全部据置	全部据置	全部据置	全部据置

山	和	德	香	愛	高	福	大	内	熊	佐	内	宮	内
歌	島	川	媛	知	岡	分	内	本	賀	内	内	内	内
口	山	島	川	媛	岡	分	内	本	賀	内	内	内	内
七九、七四〇、三三九	三三、二四二、三三九	二四、七六六、二二八	三九、四二二、六六三	四七、七六六、二二八	一〇、六四四、六七〇	八六、七〇一、七一九	二四、〇七二、二二七	二七、〇九八、八二〇	二七、〇九八、八二〇	二七、〇九八、八二〇	二七、〇九八、八二〇	二七、〇九八、八二〇	二七、〇九八、八二〇
二〇、四五〇、三三九	一七、九三六、四三〇	二〇、五七九、九三三	二〇、四九九、九二二	二〇、五〇八、八三二	一六、六〇六、五〇一	三三、七三六、四一〇	一八、六三六、一九二	九、三三九、二九〇	九、三三九、二九〇	九、三三九、二九〇	九、三三九、二九〇	九、三三九、二九〇	九、三三九、二九〇
二五、七九七	五二、三八一	四八、六八八	五二、一八九	四二、八三六	四四、二七一	四一、五五九	三三、四九五	三六、四一六	三六、四一六	三六、四一六	三六、四一六	三六、四一六	三六、四一六
二〇、四三〇、三三九	一四、七四八、六一五	一〇、五一五、九五四	一八、〇三三、九三〇	一七、八三三、三三三	一三、九〇六、六三四	三三、一八二、三三三	一七、四四四、五七三	九、二九七、〇六三	九、二九七、〇六三	九、二九七、〇六三	九、二九七、〇六三	九、二九七、〇六三	九、二九七、〇六三
二五、七九七	四三、〇七一	四二、四六二	四三、六八五	三三、七四六	三三、〇五七	三九、四三七	三三、〇八八	三三、〇八八	三三、〇八八	三三、〇八八	三三、〇八八	三三、〇八八	三三、〇八八
全部据置	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正

明治財政史第一編

鹿	内	内	内
兒	計	内	内
島	譯	譯	譯
一、一六三、九〇〇	二、八〇〇、〇〇〇	一、八七三、二二八	九三、一八〇、〇〇〇
二、六九三、九三三	一、一三三、八三三	八六二、二四四	二六、一六〇、八〇〇
二四、三三四	四〇、〇〇九	四三、九三三	二八、〇七六
二六、九三三	一、〇八八、九五八	七四七、三五〇	二六、一六〇、八〇〇
二四、三三四	二、六九三、九三三	二八、〇七六	二六、一六〇、八〇〇
据置地方	修正地方	据置地方	据置地方

畑之部

府	東	京	大	神	兵	内	長
縣	都	都	都	都	都	都	都
名	都	都	都	都	都	都	都
別	別	別	別	別	別	別	別
修正前地價	修正前地價	修正前地價	修正前地價	修正前地價	修正前地價	修正前地價	修正前地價
修正前ノ段金	修正前ノ段金	修正前ノ段金	修正前ノ段金	修正前ノ段金	修正前ノ段金	修正前ノ段金	修正前ノ段金
修正後地價	修正後地價	修正後地價	修正後地價	修正後地價	修正後地價	修正後地價	修正後地價
修正後ノ段金	修正後ノ段金	修正後ノ段金	修正後ノ段金	修正後ノ段金	修正後ノ段金	修正後ノ段金	修正後ノ段金
摘要	摘要	摘要	摘要	摘要	摘要	摘要	摘要

第一編 緒言 第四章 明治三十三年松方大藏大臣ノ提出セル戦後財政始末報告

新	崎	群	千	茨	内	栃	内	奈	三	愛	静	山	滋
内	玉	馬	葉	城	譯	木	譯	頁	重	岡	梨	賀	賀
四八八、七六七、二六八	一、三三六、一九九	二、四八五	八、六八四	四、六二四、三三三、五一一	一、三六、一九九	六、三二一、八二六、五八七	七、九七四	二、四八五	一、三三六、一九九	六、三二一、八二六、五八七	七、九七四	二、四八五	一、三三六、一九九
八〇、二六六、八〇四、七三三	九、九五五、六三三、三三三	七、三、八一〇、八一〇、二〇〇	六、九、四六八、五五三、六五七	一〇、一、八二五、四二七、五七七	九、一、三〇六、三三三、九五七	一〇、一、五、一、三三、七、八〇	五、八、二、一、九、六、二、四、五、六	四、二、九、七、一、〇、九、二、六、五、六	二、四、六、八、六、九、三、三、六、七	六、〇、四、六、〇、七、三、三、二、〇	六、四、八、六、〇、二、〇、九、七、六	四、三、七、六、〇、五、三、一、七、六	一、一、四、六、八、九、三、三、〇、六
四、九、七、一、九、四、三、五、九、二	六、三、七、四、九、三、一、四、一、一	六、九、七、一、九、四、三、五、九、二	六、三、七、四、九、三、一、四、一、一	六、九、七、一、九、四、三、五、九、二	六、三、七、四、九、三、一、四、一、一	六、九、七、一、九、四、三、五、九、二	六、三、七、四、九、三、一、四、一、一	六、九、七、一、九、四、三、五、九、二	六、三、七、四、九、三、一、四、一、一	六、九、七、一、九、四、三、五、九、二	六、三、七、四、九、三、一、四、一、一	六、九、七、一、九、四、三、五、九、二	六、三、七、四、九、三、一、四、一、一
一、〇、五、六、四	一、四、五、三、九	三、四、四、七	一、〇、二、九	八、八、三、三	一、〇、二、九	八、八、三、三	一、〇、二、九	八、八、三、三	一、〇、二、九	八、八、三、三	一、〇、二、九	八、八、三、三	一、〇、二、九
修正地方	据置地方	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正

明治財政史第一卷

岐	内	長	宮	福	内	巖	内	青	山	秋	内	福	内
譯	野	城	島	譯	手	譯	森	形	田	譯	井	譯	譯
四八三、三、九、九、八、〇、二	三、一、〇、三、五、八、〇、七、五、七	一、七、三、一、八、四、一、〇、〇、四、五	九、三、九、八、一、二、四、〇、一、七	五、九、三、七、〇、九、二、八、〇、〇	七、三、八、二、〇、七、六、三、三、八、三	六、四、三、一、八、七、二、〇、二、七、七	九、五、〇、二、〇、四、〇、〇、五、五	八、八、一、二、五、二、五、〇、四、四、四	五、五、〇、八、〇、一、七、二、四、四、四	二、三、一、三、三、五、〇、七、〇、〇、〇、〇	五、一、九、六、三、三、一、四、一、四	三、三、五、六、六、一、九、〇、六、九、四	二、九、五、三、三、五、六、四、〇、七、五、六
六、九、七、一、九、四、三、五、九、二	六、三、七、四、九、三、一、四、一、一	六、九、七、一、九、四、三、五、九、二	六、三、七、四、九、三、一、四、一、一	六、九、七、一、九、四、三、五、九、二	六、三、七、四、九、三、一、四、一、一	六、九、七、一、九、四、三、五、九、二	六、三、七、四、九、三、一、四、一、一	六、九、七、一、九、四、三、五、九、二	六、三、七、四、九、三、一、四、一、一	六、九、七、一、九、四、三、五、九、二	六、三、七、四、九、三、一、四、一、一	六、九、七、一、九、四、三、五、九、二	六、三、七、四、九、三、一、四、一、一
一、〇、五、六、四	一、四、五、三、九	三、四、四、七	一、〇、二、九	八、八、三、三	一、〇、二、九	八、八、三、三	一、〇、二、九	八、八、三、三	一、〇、二、九	八、八、三、三	一、〇、二、九	八、八、三、三	一、〇、二、九
修正地方	据置地方	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正	全部修正

石川	富山	島根	島取	内譯	岡山	廣島	内譯	山口	和歌山	徳島	香川	内譯	愛媛	
六三三三六〇三五〇	三〇二一九五七二一	一八五七八一九二四三四	一三五五二〇三二二八〇	四一五四四六〇〇二七二	四一五四四六〇〇二七二	六五六二二六三三〇〇	三九四七〇四九〇七七三	三七〇八九七三二一五九	三五二七九九五〇二二九	一〇〇九七八一〇三〇	三四六七七三〇〇五六一	一三一九七六三三四六〇	四一、一七六六〇四二九	六九九〇七〇一、五六六
四三六四三二六三八	二二四九六九八八六	九七九四九四〇〇四	一、八三五七、七四九三三	三、八一七、三六八五三三	三、七〇二、六六一五四八	一、四一七、〇六九七四	七、五五三、三六〇五三三	七、八二四、九〇一八八七	七、六七三、七九六一七	一、五一一、〇五七七〇	一、三三八、四九四、六九〇	二、九〇八、七六〇、九四四	七、五八四、二二六、〇三〇	五、五五一、五六四〇二七三
六八八〇	七二五二	五二七二	一三五五七	九一九九	一〇五八四	一、七四八	一、七三七	二、〇九七	二、八一三	七九二二	三五七	二二〇四〇	一、八四四、五	七八九〇
四三六四三二、六三八	二〇八六、六三三、二七〇	九七九、四九四、〇〇四	一、六〇一、七〇七、一四〇	三、二九四、六八四、三〇四	三、一七九、九七三、三三〇	一、四一七、〇六九、七四四	六、四四六、九七〇、六三〇	六、一四七、一六五、八〇〇	五、九九六、〇六〇、〇三〇	一、五一一、〇五七、七〇	一、三三八、四九四、六九〇	二、三六七、二七三、六〇	六、三七五、四六五、四七〇	五、三三三、五〇六、〇六〇
六八八〇	七二五二	五二七二	一、八二〇	九〇九〇	一、七四八	一、七三七	一、六三三、四	一、六五七、四	一、七〇四、四	七九二二	三五七	一、七九三、七	一、五五〇、五	七六四三
据置地方	全部修正	全部据置	全部修正	修正地方	据置地方	全部修正	全部修正	修正地方	据置地方	全部修正	全部修正	修正地方	据置地方	全部修正

明治三十三年松方大藏大臣ノ提出セル戦後財政始末報告

高知	福岡	内譯	大分	内譯	佐賀	熊本	熊本	内譯	宮崎	鹿兒島	計	内譯	田畑合計	内譯			
七、七二七、〇三三、〇七	五、二二九、九六八、一六四	四、二二三、四〇〇、七〇五	一、〇一六、五六〇、九三六	四、九五七、七五五、一六六一	四、三三七、〇六八、三三〇	五、八七〇、六九一、九六一	二、〇三七、八二〇、〇九〇	一、〇八〇、四六四、八二一、七	七、九三五、八一三、三三二	二、八六四、六五一〇、五六六	六、八一、二八三、〇七、一〇	一、六一、三五二、〇二七、三八	二、二八九、六四六、六二〇、一三	一、八一七、三五八、五二一、九二	四、七三二、九〇八、〇三二	三、九八八、六六八、六七二、〇三六	三、六九四、五七七、六四二、〇三六
二、六五九、六七一、七一〇	四、七五三、一七一、二二	四、〇〇六、九二〇、七七九	七、四六二、二五〇、三三三	六、二一〇、二二一、八八九	五、四四七、四八七、五九二	六、六二六、三三三、二九七	二、五四六、三九二、四〇九	九、五一四、五九五、八一六	八、六二七、七八一、六七〇	八、八六八、八一四、一四六	三、五五二、五九六、四〇五	八、八七四、四六三、二六二	二、五五〇、〇六九、八四四、一一	二、一六四、七三二、六五七、六六	三、七五九、六五七、八三三、四五	一、〇七八、七八一、五八八、一四	一、〇七八、七八一、五八八、一四
三、三七八	九〇八八	九五一〇	七三三	二、二三四、六	二、一八七	二、一八七	二、二三四、六	八、八〇九	一〇八七二	三〇九六	五、二二九	五、五〇〇	一一〇九六	一一九二	七九六〇	二七〇三五	二九一九七
二、二二三、五三一、五八〇	四、六五九、二九九、三九二	三、九一三、〇四九、〇五〇	七、四六二、二五〇、三三三	四、四三〇、八五二、九六七	三、七六八、二二八、六七〇	六、六二六、三三三、二九七	二、五四六、三九二、四〇九	八、六四四、五五六、〇八五	七、七五八、七四六、七一一	八、八六八、八一四、一四六	三、〇九五、〇二六、八三一	六、九七六、〇一九、六九〇	二、二〇三、三六五、四三三、八四九	一、八二二、七八八、七五五、〇四	三、七五九、六五七、八三三、四五	一、二九三、三三三、四二二、八九六	九、三〇一、一九八、三六二、二二三
二、八二二	八〇八九	九二八七	七三三	八、九三七	八、六二二	一一二八七	一一二四九六	八〇〇五	九七七七	三〇九六	四、五四三	四、三三三	九六二四	一〇〇五七	七九六〇	二四、一一一	二五、一七五
全部修正	修正地方	据置地方	全部据置	修正地方	据置地方	全部据置	全部据置	修正地方	据置地方	全部修正	全部修正	修正地方	据置地方	修正地方	据置地方	修正地方	修正地方

1,000,000,000.00 円	2,992,000,000.00 円	2,130,000,000.00 円	2,992,000,000.00 円	2,130,000,000.00 円	据置地方
--------------------	--------------------	--------------------	--------------------	--------------------	------

備考

一段別地價ハ總テ三十二年二月一日ノ現在額トス
 一荒地ノ段別地價及低價地ニ對スル低減ノ地價ハ之ヲ合算セリ
 一三十二年法律第四號縣境界變更ニ係ルモノハ其組換後ノ區域ニ對スル二月一日現在ニ依
 リ計算セリ

二 地租増徴

正義ハ明治三十二年度ノ財政經畫ヲ立ツルニ當リ歳入ノ増加ヲ必要トシタルヲ以テ恒久確實ノ
 收入タル地租ヲ増加スルノ方法ヲ取ルヲ以テ最モ適當ト認メ地租ノ定率百分ノ二箇半ヲ改メテ
 百分ノ四ト爲スノ法案ヲ定メ之ヲ第十三議會ニ提出シタルニ衆議院ハ之ヲ修正シ定率ノ改正ヲ
 爲サス唯明治三十二年以降五年間市街宅地ノ地租ハ地價百分ノ二箇半其他ノ土地ノ地租ハ地價
 千分ノ八ヲ増徴スルコトニ決議シ貴族院モ亦之ヲ可議シ明治三十一年法律第三十二號ヲ以テ公
 布セラルルニ至レリ而シテ地租ノ増徴ヲ爲スニハ土地臺帳其他關係帳簿ノ整理ヲ爲サ、ルヘカ
 ラサルヲ以テ田畑地價修正事業ト同時ニ土地臺帳面每筆ノ増徴地租算出記入ニ著手シ其完結モ
 亦地價修正事業ト共ニ終リタルヲ以テ茲ニ結果ヲ舉クレハ明治三十二年田畑地價修正及宅地組
 換後ニ於ケル各地目全體ノ地價ニ對スル百分ノ二箇半ノ地租ハ
 田 貳千五百貳拾貳萬八千六百餘圓

畑 五百五拾壹萬貳千百餘圓

郡村宅地 貳百六拾六萬六千參百餘圓

市街宅地 八拾六萬六千參百餘圓

右以外ノ土地 七拾貳萬六千八百餘圓

計 參千五百萬四百餘圓

又右ニ對スル増徴額即チ市街宅地ハ地價百分ノ二箇半其他ノ土地ハ地價千分ノ八ノ地租ハ

田 八百六萬八千九百餘圓

畑 百七拾五萬九千餘圓

郡村宅地 八拾五萬貳千七百餘圓

市街宅地 八拾六萬六千五百餘圓

右以外ノ土地 貳拾參萬九百餘圓

計 千百七拾七萬八千貳百餘圓

ニシテ總テノ地租合計額ハ

田 參千參百貳拾九萬七千六百餘圓

畑 七百貳拾七萬千貳百餘圓

郡村宅地 參百五拾壹萬九千百餘圓

市街宅地 百七拾參萬貳千八百餘圓

右以外ノ土地 九拾五萬七千八百餘圓